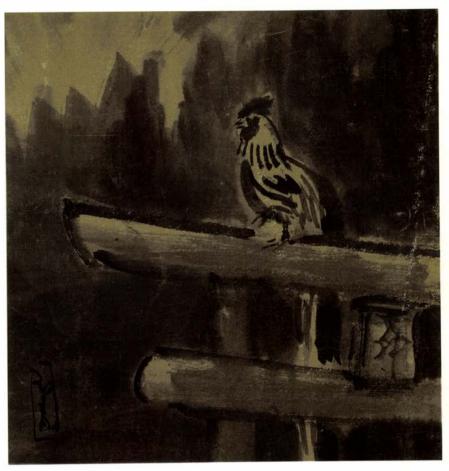
年 通巻七八八号 (每月1日発行)

日川協加盟





No. 788

同人特集・私の一句 一月号



ホテル・温 泉・健康ランド

美人になるお湯 元気になるお湯 宴会に 研修会に 宿泊にどうぞ

● お問合せ・ご予約は… 〒581 大阪府八尾市八尾木北5丁目101番地 TEL(0729)94-3591代) FAX(0729)92-0621



白島海岸

潮騒のリズムに 身をゆだねて 心地よいくつろぎを

国立公園 隠岐の島

施設のごあんない

収容人員 45名 客室 13室 舞台付広間 42畳 駐車場 乗用車10台 冷暖房完備 族館



〒685 島根県隠岐郡西郷町 TEL (08512) 2-1427 FAX (08512) 2-2330

木 鶏

西尾

栞

はいよいよ癸酉の夜明となりました。 まずは明けましておめでとうございます。 初日の出と言うても、昨日の太陽と変初日の出と言うても、昨日の太陽と変初日の出と言うても、同じ水道の水なのだが、不思議や一夜明くれば、新しい門出の気分になるものです。中国ではい門出の気分になるものです。中国ではい門出の気分になるものです。中国ではい門出の気分になるものです。中国ではまれた家禽だが、食用としてではなく、まれた家禽だが、食用としてではなく、まれた家禽だが、食用としてではなく、まれた家禽だが、食用としてではなく、まれた家禽だが、食用としてではなく、まれた家禽だが、食用としてではなく、

> 情、管原首などが発表の大を行くない。 様としてお詣りが絶えない。 様としてお詣りが絶えない。 で、学問の神

世、菅原道真公が筑紫の大宰府へ流される時、このお寺に母方の伯母の覚寿尼れた。その時、警固の者が、一番鶏が鳴れた。その時、警固の者が、一番鶏が鳴たが、その日の一番鶏が惚け鶏で一刻早たが、その日の一番鶏が惚け鶏で一刻早たが、その日の一番鶏が惚け鶏で一刻早たが、その日の一番鶏が惚け鶏で一刻早たが、その日の一番鶏が惚け鶏で一刻早たが、その日の一番鶏が惚け鶏で一刻早たが、その日の一番鶏が惚けったが、一番鶏が鳴け情しい出発となった。それでそれ以残り情しい出発となった。それでそれ以残り情しい出発となった。それでそれ以残り情しい出発となった。

がついている。それがニュースの語源です示す四つの頭文字(N・E・W・S)きを知らせる脚の下には、東西南北を示きを知らせる脚の下には、東西南北を示鶏がいる。いわゆる風見鶏である。風向

「ワレイマダ木鶏タリエズ」という電報芸の海の外掛けに七十連勝を阻まれた時、おるという説である。

う。
で打った話は有名である。
無のように確固たる信念で、不況の癸酉
無のように確固たる信念で、不況の癸酉
がある。

動じないたとえ。

ふるさとの風あたたかし風見鶏 栞風見鶏風の噂はききあきた 糸 葉風見鶏風の噂はききあきた 糸 葉



III 柳 塔 月号 目 次 題字・中島生々庵 /表紙・直原玉青

秀句鑑賞 川柳の群像 大空のこころ 〈同人特集〉 水煙抄 ■古川柳 年頭所感………… 柳塔 同 柳籠裏三篇研究 木 私の一句…………………… 同人吟 人吟) 鶏 (25) (十六丁) 黒 東 高 橘 橘 西 川紫 尾 野 尾 大 八 :: 選 栞 : :: 2 50 44 52 4 1 48 66 46 40

茴香の花: 銀河系

水煙抄

越

村

出智

天

笑

86 65

年 頭 所 感

橘

高

薫

風



った「凡聖一如」の元旦の ざいます。 麻生路郎先生のおっしゃ 明けましておめでとうご

ともに、 え、来る二月一日発行の柳人写真名鑑も二千 化を達成、 問う見通しがつきました。 六百人の参加を得て、かつてない大冊を世に 公私にわたり感慨深いものがあります。 れてくるものですが、 川柳界は昨年、 全日本川柳和歌山大会を成功裡に終 いよいよ組織の充実につとめると 念願の日本川柳協会の法人 こころは、 特に今年は私にとって 一年一年おとず

なお知恵と盛り上がる情熱をお借り致したく 柳大会を開催するか、どうか地方からの斬新 ようなイベントを計画するか、どのような川 齢八百号記念を迎えたく思っています。 われわれは来年(平成六年)一月の川柳塔誌 毎、年毎に加わって行く弾みを更に弾ませて、 実を挙げることが出来ました。この日毎、 から唐津にかけての各地との交歓に、親睦の 鳥取にて開催、勉強会の白鳥町をはじめ弘前 川柳塔社もまた同人総会と二賞発表句会を 月

三二十四十中	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	各地卵亶(佳句地十選/成田放任)■川柳こぼれ話 定型論余記	一卯:ずれ香・三里・竜水香・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	「斤」、「三」、「忌」、「「「」「「」「」、「」、「」、「」、「」、「」、「」、「」、「」、「」、「	13	路集「積もる」	「昆 布」	受賞のことば	平成四年度 茴香の花賞	平成四年度 銀河系賞
宝 薫 風 一	Þ E	中正	· 肌衫禾者	579	村新造	田千		田 泰子・田中 輝子 …		

。元日は歳の元、月の元、日の元であるか川柳でいうところの内在律のしっかりした元旦や一日はとざすおめでたさ 古句☆

ら三元と言い、四方拝の儀が宮中で執り行わ

れ、庶民は家業を休むのです。 古句 礼帳に徳兵衛とこそ書かれたり 古句 田辺聖子さんの小説「水府泡幻」を読んで田辺聖子さんの小説「水府泡幻」を読んで田辺聖子さんの小説「水府泡幻」を読んで田辺聖子さんの小説「水府泡幻」を読んで田辺聖子さんの小説「水府泡幻」を読んで田辺聖子さんの小説「水府泡幻」を読んでいると、大正の場合を表している。

て来ぬかと心配になります。
これは二日の夜に見る初夢の句で三国一のこれは二日の夜に見る初夢の句で三国一の

我のある顔をしている松の内 古句 松の内我が女房にちょっと惚れ 別 君の酒はいいと言われて松の内 路郎 松の内まだ一軒を飲み残し 葭乃 庶民のお正月の安息は昔も今も変らず、何 となくのどかです。

こころに立ち返られよと申し上げたい。 川柳を与野党の政治家諸氏に認識して頂いじる年はないのではなかろうか。 人間陶冶のじる年はないのではなかろうか。 人間陶冶ののではなかるが、 人間陶冶の 出自由はここにあるものを 路郎



の袖の下 名古屋市 越 村 枯 梢

藷

でつないだ命忘れ

たゴミ袋

IF. 敏

バ

1

コー

1º

額につけて市に佇

0 唐

津市

久

保

物忘れ増えて話の種も増え

地

獄みちコーヒー館を見つけたり

防犯カメラに愛想笑いして通り 税金納めています煙草喫ってます Ŧi.

億ぐらいでよかろう間

魔

片

孫

の御慶が新春にする

袋 言

去 0

年の干支の縫いぐるみ

ŋ

有 千切れ雲ことづけいっぱい頼まれ カに 難うただそれだけを初日 なる本をときどき読

0 出

る

松原市

玉

置

重

保 単細胞で火中の栗を拾わされ 険屋に癌の怖さを教えられ んでます

これでよいのか柿もぶどうも種が無 激辛のカレーに喝を入れられる

ったガイドのヒップ値ぶみする

旗持

豊中 市 田

中

IE.

坊

間 満 津子

越南

思い出を編

む残り毛糸をつなぎつ

人も野菜も捨てられる

なでしこが添うてやさしい

萩の壺

大阪市

本

セクハラと愛をお尻が使い 妻の目を盗むスリルに歳はない 年寄りのくせにと愚か者が言う シャンペンを抜いて女の歳を知

分け

尾

兀

まぼろしの鳥で学名だけ残り 滅びるは美学にあらず朱鷺 燕雀でよし鴻鵠をうらやまず 散る思い出したくないことも の鶏もおんなじ声で鳴き 校門を出て五十年

笑い話 今すぐ拾って持ち帰る	米子市	後宮二千 マハーラージャの夢百話	象の背にゆられて登るアンベール城	世界の至宝タージ・マハルは麗しく	ものねだりしてくる子らの大きな瞳	ベナレスのガードに群れる生者死者	沐浴と荼毘の煙に日が昇る(北インドの旅)	米子市	冬の虹そこで故郷が途切れてた	十二月止ればきっと転ぶだろ	うどん屋へ駈け込む雨の十二月	くっしゃみの三つも続き十二月	鳶一羽冬は空からやって来る	十二月優雅に薔薇を買ってみる	藤井寺市	スパイスのきいた啖呵と屋台の灯	旧姓で呼んで気楽な露天風呂	国技館 国際色が気に入らず	好取組ホラホラ電話のベルがなる	イヤリング外せばどっと来る疲れ	勝てば官軍 皆 美男子に見えてくる	和歌山市
	澤							青							吉							細
	田							戸							岡							Ш
	千							田							美							稚
	春							鶴							房							代
鐘の音淋しがりやの羅漢たち	胃が痛くなることばかりある鏡	なんとなく楽しい妻の給料日	なにも言わず熟柿になってから落ちる	笑い羅漢変形をした耳をもつ	竹原市 小	呆け防止畑仕事に昼の月	どうしてくれるのよと女の強おもて	高いとこから団欒みてる掛け時計	罪の意識があってホテルで書く偽名	また来ると言うた見舞いにまだ行けぬ	今治市 矢	横車腕に覚えがあるらしい	飲むことに頭が冴える太郎冠者	お世辞とは知っても眉が痒くなる	月下美人待つ間ボトルが空になる	なるようにしかならぬと胡坐動かない	下関市 石	外国の絵が語り出す部屋の壁	なぜか今かけたくなった糸電話	酒のカタログ鬼も見たくてのぞきこむ	新しい想い出巻いて糸手毬	息とめて雪降る音を聞いている
					島						野						Щ					
					蘭						佳						侃流					
					幸						雲						流洞					

			4				10000		
				ハンカチがぬれてるピエロの涙かも					円満の鍵は女房の方が持ち
				矢表に立って斜めに打ちかえし					実力にハッタリまでも加勢させ
				「お前らにもったいないわ」と男親					大金をつかめる手とはほど遠い
				一着に勝るものなし調教師					シベリアでたえた力を信じ切る
				目のうろこ落してくれた恩人で					入院の妻でおぼえた洗濯機
梢	千	正	天	奈良市	朗	弘	谷	奥	倉吉市
				春の窓思わせぶりに開けてある					痩我慢ここらあたりが限度です
				多数決の中に一人の煽動者					事勿れ主義になりたいなと思う
				忘れたい噂が毎夜来て騒ぐ					出るとこへ出ても引込み思案です
			1	指を鳴らすのがとても上手な落ちこぼ					指定席煙草をお吸いになりますか
				会場の寒さに馴れている個展					先輩もお歳を召してきた手つき
光	甦	野	林	廿日市市	三	忠	本	松	笠岡市
				朝早く昨夜の友に電話する					照準を上手に避けてゆく老狐
				娘もう関西弁で里帰り					ともすれば明日に期待をかけ過ぎる
				違反など大目に老人運動会					人工芝つわものどもの夢のあと
				一人へり二人へりして同窓会					新緑に燃えて紅葉に炎えて果つ
				荒れるのはいいが僕等の事も考えて					弱って来た分だけ妻が強くなり
慶	柳	津	弘、	柳井市	馬	寿	谷	樫	伊丹市

美しい老後は寄り添い寄り添って空っぽで生きれば上手に死ねそうだ 漬物 聞き役にまわりつき合いうまくなり 納得のゆ 石 かない百姓汗をかき 家風に耐えて丸くなり

宇宙 四季の

遊泳

物

画

ゴが

るり アリ ズム 美禰市

安平次

弘、

道

今治市

越

水

ない 0 1)

花屋で夢を見失い

スリ

ル追う少年豆の木に登る

幻想におぼれておれ

はれておれぬ朝の靴少年が持つ夢切符

松原市	小	池	しげお	豊中市	安	
御無沙汰を詫びて息子の酒の券				何時間飛んでもシベリアまだシベリア		
新婚やさかい二次会誘てみる				ロンドンはカメラの前を落葉舞う		
善人と言われたことが気に入らぬ				ローレライ乙女の岩てこれかいな		
割り算が下手で無駄足ばかり踏む				スリ注意ばっかりガイド強調し		
金貯めて地獄の名所まわりする				庭園で栗をひろったベルサイユ		
高槻市	JI]	島	諷云児	奈良市	宮	
おふくろの味が本当のグルメかも				雨の日のことさら秋の短い日		
肩書を解かれて本の虫になる				あと何遍賀状書いたら終りかな		
沈黙という奥の手が父にある				正月がだんだん怖くなってくる		
ボーナスもない年金の十二月				盃でゆっくりのもう新春の酒		
人の傷えぐり噂の種にする				肥えたなと思う正月有難し		
堺市	高	橋	千万子	大阪市	西	
タコヤキの舟の温みも秋のもの				文机の上に静かな刻がある		
かんなくず炎となれば手におえず				ボケてない証拠ボケたと言うている		
星とホシ サインのようにまたたいて				スリラーを読み過ぎた日の人嫌い		
出直しの舌に残れる柿のシブ				だとしてもここは静かに流れよう		
気のもめる一日だった白いタビ				主婦業の月月火水木金金		
界市	楊	井	二南	熊本市	永	
約束が違うと柳眉逆立てる				かけひきの裏を読んでるヤジロベエ		
片手間に選るネクタイが派手過ぎる				人かなし群がる方に行きたがり		
媒酌が二転三転する盛儀				だまし舟に熱い言葉が積んである		
鼻白む話よそ見で聞き流す				真似ばかり続けて自分を見失う		
誘惑を他人行儀で逃げて置く				下手な嘘じっと聞いてる美人草		

出

楓

楽

田

俊

子

П

笛

生

藤

寿美子

東大阪市・	森	下	爱	論	富山市舟	渡土	杏	花
盃が溜っているぞ目が座り					昏れる身に鳥の軽さをまだ欲す			
あきまへん儲かりまへんと貯めている					盗みたい隣の運もしぼみ出す			
ギンナンも乾いた音の御堂筋					ふとどきな男が拾う女運			
飽食の街でカラスと猫肥る					ざんげの刻を先へ先へと冬帽子			
へいへいへい句碑を読んでる法善寺					限りあるいのちざんげはお早目に			
奈良県	田	中	紀美代	代	宇部市 平	 田士	実	男
若い子とつきあい敬語忘れかけ					黄門の印籠ほしい永田町			
短距離が好きな女できれい好き					売り言葉買わない妻のほうの勝ち			
男ならひとこと言って去る場面					この指にまだ孫だけが止まります			
道草に入れ込む夫の悪い癖					それなりのときめきもあるフルムーン			
良い話ばかりも来ない菊の前					助走路の途中で定年来てしまい			
京都市	都	倉	求	芽	十和田市 斉	 藤		劦
里芋の粘り親と子の絆					うらを見せおもてうら見せ散る木の葉			
ともすれば後戻りする数え唄					嬉しくてりんご二つに割るところ			
むずかしい話は嫌いなウーロン茶					週休二日ガキ大将になるもよし			
今に散る樹々へ静かに鐘が鳴る					足元の視野から地球見てごらん			
					The state of the s			

賛成はしたが帰りの苦い酒 子と孫を揃え酒酌む床柱 禁猟区思う存分デー トする

意識してクルマを降りる脚線美

裸婦像を鑑賞できぬ

女流展

黒石市

相

馬

花

出来るのは柩を飾ることぐらい 遺産揉めせぬせめてもの恩返し 忘れるという簡単なこと出来ぬ夜 わたくしを見失ってはまた見つけ お亡姑さんに問うては返し縫いをする 脈々と田沼

柳沢受けつがれ

西宮市

林

は

絵

育て優駿

馬術部員の頻擦りと

樹 ヤへ .

バラ色の未来図 灰色の現実	虚と実の谷間にあった置き手紙	六十路坂いまだ理想の絵が描けぬ	胸襟を開けば孤独 風化する	胎動に絆の重み初詣	弘前市	口下手が癒えぬ男の冬帽子	有難い山 沐浴をして登る	花もって愛の深さへ逢いにゆく	ノンキャリア仕事の鬼を自認する	気楽さに命を洗う鬼の留守	五所川原市	傷ついてまた北国へ旅に来る	優しさが負担の青いねぎ坊主	大根の辛さたどれば尾の外れ	襟立てて胸の想いを首で止め	伸びてきて痛さのわかる爪ばさみ	弘前市	左遷地の雲は一人で欠伸する	風向きを信じて揺れる枯れすすき	ライバルに塩を盛ってる匙加減	ためらいの歩幅に明日が語りかけ	娘には知られたくない願をかけ	弘前市
					村						對						真						小
					田						馬						喜内						寺
					善																		花
					保						閃						實						峯
切り札がほしくて石を磨いてる	内の火をもやして本物に出合う	蛇行した行方が見える五十代	行く先は未定とにかく前へ向く	愛情で今が盛りの花を剪る	和歌山市	逢い出したらよく逢うねと手を握る	授業料と思えばバブル救われる	空腹も忘れるような嬉しい日	歯車のひとつとさえも見てくれず	主権在民とうに忘れた議員さん	和歌山市	ディナーショー用のお相手募集中	引きぎわと我が乳房にも言わせない	すもも もも 太もも夏の海眠る	ダービーも身近な男としてみれば	染色体一個の違い井戸深し	弘前市	老夫婦過疎でひっそり土いじり	改装をしてから客が遠ざかり	斬られ役うまく階段ころげ落ち	立ち読みで心に磨きかけてます	トラブルを無知と偏見巻きおこし	十和田市
					牛						堀						肥						阿
					尾						端						後						部
					緑						Ξ						和						

進

男

良

		タ場を埋めにくるのは子供たち					治館工匠できて娘に
		屈を埋りこべるのは子供にスタオルにくるむ私の宝物					影去師正直すぎて乗こなる
		がま蛙 鏡に怯えてばかりいる					お父さん先にお風呂というけじめ
		風白し 別れ話は聞きあきる					背丈もう息子に負けてうれしがり
井桂	福	和歌山市	登志代	登	芝	内	和歌山市
		あなたとのズレが癇癪玉となる					逝く年の自省甘酒吹きながら
		ホラ吹きのホラ聞き流す新春の風					反古にした約束だから忘れない
		陽当りへまだ未練持つ冬の蠅					無言電話へ今日は聖書を聞かせよう
		指向性アンテナ気まますぎないか					亡父がまだすわり続けている座椅子
		ゴンドラの唄は私の青春譜					急がねば裏切りになる始発駅
井千	桜	和歌山市	幸		山	西	和歌山市
		辞令一枚男に寒い盆の窪					石橋も土橋も叩きまだ嫁かぬ
		缶詰のブランドを言ううちの猫					花時計枯れても私待ってます
		望郷の父を泣かせた酒二合					古日記 数の子の値と蟹の値と
		ひれ酒に帰りたくない夜が更ける					白菊を活けて汚職の話聞く
		バラ千本愛の重さに眩暈して					初詣だけはしてます無信心
本朱	木	和歌山市	子	英	本	福	和歌山市
		王様の釣り池庶民の顔ならぶ					北山しぐれにも逢いました京歩き
		紫の数珠買い紅葉の染まる寺 (韓国旅行)					お迎えの順はまだらし飯の味
		十字架をだんだん軽くする修行					首相とはのらりくらりで済むポスト
		夫婦して愛確かめるガーリック					あんなのを議員に推したのは誰だッ
		バスツアー画布をはみ出たはぜもみじ					この国の総理そっくり昼の月
井 千寿子	垂	和歌山市	雄	武	宮	若	和歌山市

			お袋に泣かされている芥子和え					定退へ要らなくなった胃腸薬
			峠まで蒟蒻たべに人が来る					小心な男の好きな群れの中
			沼を出て沼に帰って来た蛙					助ける気ないのに根据り葉掘り聞き
			寝るまでに自分の影を片付ける					根回しの効いた会議でキナ臭い
			日本海 虹の橋では渡れない					政治家になるなと孫に言い聞かす
荒		林	米子市	治	鉄	枝	青	和歌山市
			デュエットへ妻を頼りにマイク持つ					猿が言う阿呆な犬には薬ない
			招待へ行くなと踏み絵置いてある					嫁に言おか収めておこか迷ってる
			鳩の出るてのひら妻と温め合う					代り映えせんから恋し古里は
			過疎地からポックリ寺の鐘が鳴る					やせたなら病も治る痩せなはれ
			晴れ着縫う針は他人に触れさせぬ					たわいない話ですぐ忘れ候
雄	西	小	米子市	なめ	か	井	松	有田市
			ひらけゆく街へと群れてゆく鴉					もう来ない男を待っているチャイム
			五線紙にのせる雨音風の音					男運悪くて自立できました
			打楽器の一つ乱れている疎遠					火の章のままで終章迎えたい
			生きる死ぬそんな会話のあった恋					風のような男に煽られる火種
			哀しみにめげず芽吹いたチューリップ					欠点は美人すぎるという女
輝	中	田	和歌山市	州	保	一宅	=	海南市
			年よりに死んだそうなは言いにくい					くえ鍋の美味しい季節君と僕
			石垣に亡父が生きてるみかん畑					白菊の気品に正座させられる
			尻結び忘れた糸で縫っている					六十を女盛りと言う鏡
			巡る季の中で政治が腐ってる					幸せですかてっぺんの木守柿
			常識の殼が重たいカタツムリ					大声で自分の位置を確かめる
裕	田	寺	和歌山県	実	結	田	内	和歌山市

気印背すじ伸ばして一万歩	やったるで一言多い父である	切りぬけるチャンスをたった今貰う	気分転換 通帳もってとんでいる	が湧き散って都会のせち辛い	米子市 田 中 亜 光	つまずいた石に行先教えられ	新しい政治へ地盤ゆれている	今孝行せねば老父も喜寿になり	立ったままでも帰省列車は弾んでいる	髪染めて新しい年待っている	米子市 菅 井 とも子	居にも気は許されぬ育ちすぎ	の落ちる刹那へ波は炎えて見せ	賑やかな話の好きな波頭	ライバルと一緒につつくふぐ料理	の森を囲みはじめた分譲地	米子市 石 垣 花 マ	ふたり目が生まれ童話の本贈る	きぬぎぬの別れ石榴も眸をつむり	広重の雨降る傘のお出掛けだ	一み慣れて橋の四季から逃げられぬ	天女舞う風のソナタを聞いて寝る	に手しい、これにはい
					弥						子						子						
ポケベルに主人つないでおりますの	間柄 釣られた魚と申します	酒おんな私に毒なものが好き	とんど祭すむと渋滞するあの世	鶴がいるあいだは冬の村でいる	米子市 新	あれもこれもみな地獄への準備かな	落葉樹お前の覚悟は潔い	騒ぎながら踊りながら生きている	狂い咲く桜が母に重なれり	球根を植える宝を隠すよに	米子市 政	ショートカットで余生どこまで延ばせるか	待たされて信じたものが褪せてくる	空港のロビーで今を見詰め合う	はかどらぬ編目へ尺度かえてみる	気がかりが消え遅咲きの薔薇を買う	米子市 寺	この道のりがずっと続いていって欲し	出番まだあって老蛙も頼られる	聴診器 父の樹の音ききにゆく	気力だめしにさまざまの風やってくる	つっかい棒ときどき海の気を吸いに	
											岡	7,3					沢						
					正						日						み						
					子						日枝子						みど里						

楽屋裏丸出し嫁と睦まじく	今様に考え割切ることにする	灯を消すとわたしの音が狂い出す	そして今心の貯金増えました	光陰やよくぞここまで古希の春	米子市	余生など思わず今朝も紅をはく	今からは軌道修正間に合わぬ	った今あの稜線をこえて来た	心経を唱えて音のない世界	今ここで笑顔みせねば義理を欠く	米子市	どう生きようと今大切な時間	鯛茶漬 胃の昂りがほどほどに	今日もパントマイム気を抜くことはない	コスモスに溺れる孫の手を放す	が和む花野の人となるときに	米子市	ぼちゃを食べて第九を歌う十二月	ンタンの枯葉を歌う命日だ	い替えた車も弾まない事情	たしから太地喜和子は逃げちゃった	定番の主婦から逃れ悪女たり	米子市
					光						中			63			白						金
					井						井						根						Ш
					玲						Ø						d						夕
					子						き						2						子
よそ行きの顔して新車乗ってます	週休二日チーズケーキでも焼こう	いつもいつも妻のゲームで靴をはく	肩書きをたくさん持っている妻で	友情を計るハカリを買うてくる	竹原市	糞公害 鳩は平和の使者である	短編の恋終らせてまだ若い	カタカナがこんなにもある頁繰る	母さんの味スーパーで買っている	美人だがセールスだから逃げておく	竹原市	菜根譚読まぬでもない眼鏡拭く	子も所帯 寡婦返上の彩を撰る	曲り角美しすぎる女が住み	灯下親しむとは妻の家計簿	柿あかくあかく結納迎えられ	竹原市	一件落着まだ居る二女も長男も	婚約期 親の出番が少しある	床に花活けてる彼が来る日だな	春までに憶えときたい祝い船	嫁ぐ日が近くなりけり秋深む	竹原市

時

広

路

森

井

菁

居

宅

不

朽

岩

本

笑

子

爆	人間はきらいきらい春よ春ふたりに親は	人間はきらいきらいと鶯が春よ春ふたりに親はもういな	一	人間はきらいきらいと鶯が春よ春ふたりに親はもういな
	やかに正義が勝	鮮やかに正義が勝ってゆくドラマ	やかに正義が勝	やかに正義が勝
露杖	杖音	杖 音たてて彼岸の春がやってくる	杖 音たてて彼岸の春がやってくる	杖 音たてて彼岸の春がやってくる
	材	をが丹さば見つこしまたをこった コスモスの道自転車がよく似合う 鳥取	妻が好きな男わたしは大きらいするという。	オースモスの道自転車がよく似合う 鳥取県 新
	いこう自己	が好きよりつこしませきかって、スモスの道自転車がよく似合う	きな男わたしは大きらいスの道自転車がよく似合う	スモスの道自転車がよく似合う
	間はきらいきらい。正義が勝たてて彼岸の春	間はきらいきらいと鶯がやかに正義が勝ってゆくドラマやかに正義が勝ってゆくドラマたてて彼岸の春がやってくる鳥取スモスの道自転車がよく似合うスモスの道自転車がよく似合う	を比べておめでとう に正義が勝ってゆくドラマに正義が勝ってゆくドラマ に正義が勝ってゆくドラマ に正義があてゆくドラマ この道自転車がよく似合う きな男わたしは大きらい	間はきらいきらいと鶯がやかに正義が勝ってゆくドラマやかに正義が勝ってゆくドラマたてて彼岸の春がやってくる鳥取県スモスの道自転車がよく似合う

目の毒になりそうですなバイト嬢	黄門と平次の芸でウサ晴らし	クーデター起こしたくにもなりますぜ	要領が悪いばかりに下にいる	すい星を止める信号製作中	鳥取県	よく切れる宝刀秘めている自信	受け売りと断わり的を衝いてくる	残り火をお世辞がときに燃えさせる	他人事の不倫の行方気にかかる	自己主張しないやさしい子が増える	鳥取市	足跡も指紋も拭いて逃げだした	コスモスの道は無人の午後となり	待つことに慣れた窓辺の百合の花	逢えば優しく逢わねば淋し束ね髪	ひいふうみい逢うも別れも風の中	鳥取市	陸橋を渡る影にも怯えている	水煙 血煙 人は生きている	避雷針ばかりを立てている男	寒風の中曖昧に身を晒す	蜃気楼 男に一つ魔が差した	鳥取県
					谷						美						小						森
					П						田						谷						山
					次						旋						美っ						盛
					男						風						千						桜
花は吉野 妹背をわかつ吉野川	梅忠の話を亡母のいる部屋で	新口へ雪呼ぶ雲の速さかな	切なさは恋に焦がれる蜆川	落人へはらはらと舞う紙の雪	尼崎市	自由とは淋しきものよ昼の酒	尊厳死の形で松が立ち枯れる	立ち直る努力へ肩を貸しましょう	よい姑を演じ早起き加減する	生きている私にピント合わせよう	鳥取県	やさしさを贈る話が永くなる	楽しさは超特急に似て過ぎる	ボリュームを下げて聴きたい恋の歌	笑うまで君の瞳をじっと見る	告白の勇気をくれた花言葉	鳥取市	黙っとけ言っても解る人でない	獅子頭 三代続けて子が冠る	六十四で八十七の病母負う	菊花壇軒のポストを埋めつくす	菊きちが遂に担いだ優勝旗	鳥取市
					田						羽津						西						武
					中						川						原						田
											公						艷						帆
					薫						乃						子						雀

7	憎めない誤診が嬉し快復期職退いて鍬とキャラバンシューズ買う				て球は
	古希近く喪中欠礼ふえてきた二つなら安し隣と買うて分け				阿呍で黒子の妻がいてくれる露天風呂老いて乳房のまだまろき
	秋深し暗峠を汗で越す				自分史へ恥を覚悟で脱いでみる
岸	大和高田市	たず子	谷	門	西宮市
	いい時に逝ったネ本田 松下さん				四捨五入あっさり逃げるのも男
	花道を飾れはうまい言い回し				受付にゆとりをくれる花がある
	着飾って今この刻とひがん花				不況だがマネーゲームがよく流行る
	外人がするとウインク 様になる				光らない石のこころに触れてみる
	見逃したサイン柘榴も口を開け				がんばろう年の初めに言い聞かす
秋	西宮市	美智子	Щ	奥	尼崎市
	恩師よりジョッキ大きい方を持ち				わたしまで億という字におどろかず
	立冬へなお夕顔の強気なり				雲一つなし秋篠寺と対峙する
	ユトリロの世界に沈む小半日				腰まわりばかり貫禄ついて来る
	風邪三日 花も一緒に病んでくれ				幼名で呼び合いくらし捗らず
	松茸を買うて諍うもととなり				金婚におしどりできたきょうの晴れ
西	西宫市	年 代	城	春	尼崎市
	若松にたっぷり若さ貰う新春				やわらかな言葉が欲しい冬木立
	市場道 落ち葉カラカラ追ってくる				耳掃除静かに冬の音を聴く
	飛行機雲 伝えてほしい人がいる				しんそこに笑えぬままに冬に入る
	恩は恩 好き嫌いとは別のこと				新世紀の歌を聞きたく自戒する
る	あれも恩 これも恩 生かされている				六度目の酉を二人でつつがなく
奥	西宮市	武庫坊	城	春	尼崎市

姫路 市 人 見 裂 記

競うの

は苦手

後から付い

て行く

市

丸

Ш

よし津

綾取りがうまく友達たんと居る

気にかかること片付けて無の境 地

欲望は捨てることなく滅すこと 節約をバ

握鮨 カリフォルニア米入国す ブルで知った戦後の子

孫達が象の 足だと言う八十路

雏 **公面市** 坪 H 紅 葉

思うよう動けぬ自分にすねてい

山近く図鑑を開く鳥が来る 朝寒く山は上から赤くなる 病は話しかけたり話したり

同

通院

に二日とられて義理をかく

高 石市 浅 房

子

少し期待の雑煮箸

神話もゆるぎ出す不安

世紀末

西

年

輪の中で一人浮いてる失語症

名人芸堪能してからそばすする 女は度胸 男は機 嫌よく遊ぶ

御 遷宮御 供 してゆ 1 尾 長鶏 寝屋川

市

野

あ

P 8

味

ステッキとベレー 帝の 発の 理 帽子にヒュー の点景にあ 夜明けをしかと知 る子の が溶ける秋 マニズムあ 情 17 日 りき る 和

枯れ葉舞う軽さに終の日を思う

女系家族で男は無口になって行く 言 葉で結ぶ母の文

こおろぎよ許せ只今改築中

取り壊す前夜ひと際虫しぐれ 席の息子 口数多くなり

補助 親友の奥さんの手も温かっ

お初穂も布施も旧家守ってます 松江 市

柳

楽

鶴

丸

妻曰く私はマルサの女です

チャイナ小町とデートしましたエレベータ

苦しみと試練に耐えた大連

水虫をエンマさんの土産に持ってゆく 恥ずかしながら竹下登の地 元です

喜寿とは見せぬ 足さばき(祝 島根県 小 石田清泉君喜寿 砂 白 汀

未知数に が家のは聴こえず隣の電話 ル

JII

出しからばエイズを向けようか

賭けるとこまで落ちこめ にやれと天 0 声 n

松江 市 木 与根

— 17

島根県	堀	江	正	朗	島根県	松	本	文	子
春を待つ初冬の炬燵笑いだす					消しゴムで消えないものを確かめる				
戦盲の負けを励ます白い杖					畳替えて終の住みかになりました				
ラジオまで早口になる世の流れ					絵ハガキがたくさん届く秋ですね				
留守番の風音しみてくる初冬					やっと逢えたのに知らん振りしてしまう	j			
幸せがたくさんあって独り言					手の内を見せず銀杏は散り尽す				
島根県	堀	江	芳	子	島根県	佐々	々木	芳	正
大黒柱の艶とうさんの笑顔です					職退いてこんな自由があったのか				
看護婦さんにも祝ってもらう誕生日					構想へ炭火のするめ反ってくる				
愉快そう残念ばなし聞かせられ					中程で打ち明けようか月の橋				
夫と腕組めばしっかり歩けます					射程距離 男が話題溜めている				
ガラス窓 春も初冬も美しい					われもまたかく狂わんか癌末期				
島根県	西	村	부	苗	出雲市	金	村	青	湖
食卓は元日という豪華版					蓑虫ぶらりここに老後という姿				

ぐっつ 朝刊も一日遅れ雪しきり気がつかぬはずはないと言わ 本 頑 とき告げ 積んだ山が一 張ろうとい すりとみんなも眠る飲み る鶏 い合う友がい 0 層高くなり 声 か 6 今日 が るはげみ 来る 疲 n ても n 根 県 原

秀

子

出雲市

板

垣

酔

上手がいえない性が直らない 男かずら教えて欲しい名の由

来

食卓は 仕

方なく生きてるような日もあ

また

妻呼 そんな手もあっ 道 問 の話 えば親切過ぎる土 んで新聞見 がはずむ んせる老の たか恐い褒め殺し 眼がの 地 訛 鏡和柿 貸す ŋ

月そっと二人を尾行する嫉妬 弱点がふと親しさを覚えさす 北 首縦に振って約束日が待たれ 点と線結 風と枯葉いつでも妥協する んで納得 L た誤 解

	凡人にかえる宴の乾杯さ					受け売りの言葉を聞いている襖
	万引きを見つけた自分が逃げてゆく					鏡餅 山ふところの義姉達者
	嫌われない気遣いをして逃げられる					退い
	東北の情けが届くつがるふじ					巣に帰る羽音の下で鍬洗う
	鯛やきのおじさん二代目が焼いている					付も神楽も
宮	八尾市	丘	草	垣	板	
	慎重な人 憶病と笑うまい					無人駅から始まった独り旅
	長い目でじっと眺める余裕見せ					諦めた頃に出てくる探し物
	守備範囲だけはきっちり守る人					軍籍のない夫言い訳許さない
	災いの火元となっている野心					他力本願誰かが持ってる熨斗袋
	両方の言い分聞いて悩む日々					唯我独尊 明治の自負は捨てられぬ
河	大阪市	多賀子	多	Ш	袁	出雲市
	邪心捨て山の辺の道柿たわわ					制服を脱いでほっとする時間
	松茸の量にあわせる土瓶むし					肩書に酔うと女の花が散る
	同名へ縁は異なもの早とちり					病院に用のないのを幸とする
	現代を生きる神経補強して					ビー玉であそぶ子供を探してる
	敬虔な祈りへ新春の風が吹く					ふたありがだんまりになる金魚の死
津	大阪市	きみえ	ŧ	岡	吉	出雲市
	羽づくろい欠かさぬ妻の背が丸い					物想い大事なことを聞きもらす
	老夫婦 鶏冠の色も少し褪め					負けまいと半ば逃げ腰背のびする
	ひょっとこがひどく気に入る神楽舞					補聴器も都合の悪い事聞かぬ
	思い込みが時々激しい老い二人					耐えて来た孤松は村を見捨てない
	凜として初春を迎える白椿					松籟も四季それぞれに音符変え
石	出雲市	まこと	圭	谷	久	出雲市

井

庸

佑

守

柳

伸

倉

西

弥

生

いことおっしゃるピンクの口 を送り 来てなれそめ 出 L たら寝 の秘 正 話 お 月 61 てゆ 尾 紅 市 3 To 宮 临 太陽が た 廃 め 虚 V か 6 10 きがそっと聴こえた台所 つば 星 の流れに聴 10 夢の マイホー 7 た日 L 尾 市 1

英

大以 3 心伝心 0 に 白 磁 二人に合図などいら 0 壺 0) 紅 椿

若 年

夫 賀

婦

八 尾 市 高

百 年 1 代 ファミコンに 生きたいと思うお 凝 る三が IF. 月 H

翔 聴で隣 L 翔 んで花 0 笑いに 0 命を抱 誘わ れる 10 7 Vi る

昼

寝

癖この頃妻も横になる

八尾 市

Ш

下

津 留

方も 子 ic ふんわ 知らないままに種を買う り乗って夢を見る

手

拍

植 0 文 和服 に出 合う 奈良 0 鹿

猫 傲 ょ 慢 n な男が転 は 少しましね ぶ五 億円 と炊 事 番

八尾

市

村

風

义 10 乗ってい ると気がつき口 とじる

白 n 1 V 柿 札を出さぬ 0 落 ちて話 1 マト 題 まんまで事もすみ 鮮烈さで迫る が詩 になり

往

診

0)

コー

ス碁仇入れてある

杉

星 7

影

0)

ワ ネット手

"

熟

年合唱 練手管

リオ

0 舞

台

裏

立志伝読 話 んだか万年床をあ を鳩も聞 V 7 Vi

煙 渡り鳥今年もあった昆 薄 突に 氷を渡 禁煙 り小石にけつまずき 0 ビラ貼ってな 陽 0 池 42

胸も ٤ 来た曳山 1 切るシャッター (唐津記念大会参加

屋

JII

市

田

英壬子

徳偲 神主さんの素朴さもよきハーモニー ぶ京の はり 清 秋の膳 (規不風さん中陰忌

相 ふるさとの母屋に鶏はもう居ない 槌を打てば温もる冬電 話

振 今 り出 年こそほんとうの しに戻って泣 私 43 で居 ているもや た Vi

寝

屋

JII

市

稲

千 片 耳 + ル で聞くたわいない噂 てにされ婚 メラの音聞 前 10 ている腹 0 成 です H 0 虫

屋 JII 市 江 口

度

十二月約束いくつすっぽかし	陽の目みぬ苔にも与えられる幸	無味無臭 優等生の暮らしぶり	みぞおちに住むがんばりが冬を越し	人生の薄暮たたえて我往かん	岡山市 川 端	灯を消すと昨日のわたしが見えてくる	決断がついて洗濯機が回る	切り株に憩えば木の葉舞うて落ち	遙かなるロマンも老いの美学かな	福寿草匂うて老いの部屋も新春	岡山県 嘉 数	美しい客へ飼猫すぐなつき	通の店ここも迷路の奥にあり	すれちがう灯に秋を知る船の旅	さい果てのぬかるみに灯のにじむ町	漁師町昔スターの歌謡ショー	寝屋川市 堀 江	こうなれば我が一票の行方など	ポイ捨てに出来ぬ年金パートナー	春風はみんな気ままにさせてくれ	ほがらかに春を食べます絵画きます	おめでとう若さ勝ちですクリントン	寝屋川市 平 松	
					柳子						兆代賀						光子						かすみ	
文化財とは恥ずかしい山車が荒れ	差し出口 口のチャックが緩みかけ	生き残る兄弟寄って祭寿司	戌の日がよいと炬燵をまたのばし	ふと会えば噂たんまり持っており	岡山県	カラオケを二人で歌うああ夫婦	勲章に遠く文化の菊薫る	諦めか悟りか不倫拒まない	杉木立バブルが眠る墓がある	大波も小波も岸を語り合い	岡山県	仲人が誇大評価をして困り	ユニークな子の絵が新世紀にはまる	書き初めに自信の筆の息づかい	今年また自作自演で舞わんかな	天に父 地に母 至上の安らぎに	岡山県	言いにくい意見波紋に乗ってくる	紅白を聴いてる追手もう来ない	真直ぐな意見が負けた多数決	手を上げるだけの会議へ出ていった	本当に感謝してると言えますか	岡山県	
					二						荻						矢						小	
					宗						野						内						林	
					吟						鮫虎狼						寿恵子						妻	
					平						狼						子						子	

真直ぐに歩くと蟹は転ぶだろ	自画自賛 先祖を語る床柱	人前は無口でとおす貝柱	天の配剤 人にはもらえない翼	どうしての疑問が湧いたお節介	倉敷市	飽食の時代を生きる肘枕	民草のままで散りしいとしき兄よ	邪心などない目 裏口よりのぞく	愛のゆくえをたどる水割りかたむけて	結論は急くなと父の咳ばらい	岡山県	老父歌う麦と兵隊 祖国愛	妻の書くシナリオに舞うぬれ落葉	目に見えぬ勲章のある母の胸	生活とは遠い話を戦友とする	アホなこと思うて今日の陽が落ちる	岡山市	不眠症毎夜寝酒の世話になり	上弦の月には心弾むもの	正義感 頑固のようにみる他人	ポンコツ化傷ない脛が痛みだす	お祭りもすんで朝晩冷えてくる	岡山県
					田						Щ						井						池
					辺						本						上						田
					灸						玉						柳五郎						半
					六						恵						郎						仙
一斉放水 松浦河畔 初春の虹	押入れが有るからボロが無くならぬ	検診の喉頭癌へ未だ脅え	孫叱り子に叱られた日の記憶	落葉掃く隣の柿が熟れている	唐津市	大仏も稼いでいます古都の春	密漁の罰金 密漁して払う	召喚をすれば検事がとばされる	人ひとり殺せるかもね今の僕	錠剤を飲んで眠れぬおんなの血	唐津市	世の中に道あり落し物届く	村中がタレント米がよくとれた	青年の理想必ず受け継がれ	満足の笑顔母乳はまだ残り	子には子の人生だろう劇画買う	唐津市	偉そうに七つ違いを威張る妻	仕舞風呂憂さが流れる音立てて	天網恢々時効五分前	鯛の浜焼き唐津供日の余りもの	腐っても鯛かと鰤の苦笑い	唐津市
					浜						Щ						仁						田
					本						口						部						П
					義						高						四						虹
					美						明						郎						汀

唯大きいだけが自慢のドテカボチ さりげない言葉から知るお人柄 口コミが商売繁盛左右させ 後先を窮 瑞雲がなびく今日のサヌキ不二 交通安全 初句会少 両立をさせたい親の欲目かも まだ少し生きるてだての眼を手術 口ごたえする子の方にある理 気まま父の腹時計で昼を食べ 派手だとは知りつつ昔の服を着る 連休に用 がことを頻りにほめる醜さよ てる物溜 と思えど相 山頼れるものは家の 万歩計 がまだ決まらずにベルを押 の無いのが見る予報 8 妻も多目に紅を引く ず乗 口車に 芽出度い句を作る めて小さく病んでい まで休 手の返事こず 0 た \$ 御 ませる 用心 車 嫁 屈 唐津 香川 3 JII Ш + 県 順 鳳 市 成 木 松 浜 重 村 村 本 放 迷 明 ち 親子 ょ 任 人 不覚にもと金に王手かけられる なにかある夫のおしゃべり多すぎる 邪心など一点もない 孫よりは子が可愛いと本 休日に夫婦茶碗をかえてみる 落ちるしかないと決めれば強い 丸 友に応え魂のクリーンに祖谷 百年誌に学びの庭の錦綴 百 安楽死出来ても墓が高 神さまのお告げともっともら 吉野川ぞいに釣瓶落しの陽を拝む 竜田姫やっと織り始めたか錦まばら いの顔 入れ 棒が居るからここまで来れた道 年の節目を祝う四世代 い越され美人でなくてすみません とやジャ の序列が決まる運不運 の話 る覚悟で椅子を空けておく 苦労話 で秋 ンボを当ててからぐれて 0 は似合わない 夜が白け 秋の空 すぎる 一音出 (白鳥小百周年記念) 岸和田 へ翔ぶ 3 香川県 香川 香川 もの 県 市 県 剣山にて) 福 池 JII 水

松の内

良

沢

元旦は

言

い訳

内

か

お ŋ

浦

勝

晴

峰

伽名子

崎

U

かり

もみを焼く煙なつかし秋深むくきめきと不安がまじる待合せときめきと不安がまじる待合せい。	退院の喜び仏間に灯をともす	家族にもやっと戻って来た笑顔妻倒れ家庭の無知が身を責める看病に亡き夫偲ぶ落虎笛	でである 高外なる結果招いた言葉兄 無器用で優しい言葉出て来ない 無器用で優しい言葉出て来ない 本当と嘘の境目知らず老い 本当と嘘の境目知らず老い	年はく効くと 長薬 虫 分子立 私と	井田田片
			野	野峪	
	さよ		2		
	子		j	ひ 富 で 子	1111
			: # c		20
眉間の皺を引っ張り出したアルコール・嘘をつく相手女房だけとなりをバッジ最後のラッパ吹いてみるをがっているのである。	益鳥だなんて人間さまのエゴ	さみしくてまた握手する僕である 養虫の話まである母の文 黄楊の櫛と小さな笑顔だけのこし	本戸銭を払って拝む眠り猫 (東照宮) 拍子木で天井の竜鳴かせてる 雲行きが気になり出した旅プラン 肩書の重さがとれた父の背な	にも毎日サンマでは ても毎日サンマでは 表に出てこない 表に出てこない 表に出てこない でから顔を上げられぬ でから顔を上げられぬ	8
ル	市		市	市の市	1
n			岩	芳	7
il	市				7
il	市榎		岩	芳	可見

			丁寧な言葉で無理なことを言う					人肉が混じる噂の肉も食い
			消しゴムを持って自由な翅伸ばす					春日遅々パロの訓練のどかなり
			特を脱げば 老化がしのび 寄る					北満へ戻り一縷の望み湧き
			忌憚なき意見を吐いて疎まれる					まだ生きていたありがたい陽を拝む
			輪の中で群れているのは雑魚ばかり				亡記)	流氷の時季 江岸に春まだし (異安嶺逃亡記
白峰	上	井	+	造	新	村	田	広島県
	y H		そのまさかあるから賭がやめられず					竹下派 数のおごりが数に負け
			そっぱ向くそれでも聞き耳立てる犬					今年こそと私の中の鬼がいう
			爪染めて娘料理は大きらい					鼻の穴見える仏であたたかい
			上役のミスをまってる横すべり					目覚めれば隣に妻のいる安堵
			冬将軍消費景気の助っ人に					持ち駒をいっぱい持っている敗者
頂留子	田	藤		風	静	解	藤	広島県
			宝石が半値底値と言う不況					神の視野はずれてからの転びぐせ
			小さな秋 一輪挿しのほととぎす					化野の芒と風の咎に合う
			お互いにほめ殺し合う嫁姑					鉛筆の先で詩嚢が痩せてゆく
			北京秋天 天皇さまはフェミニスト					人並の幸せ夫婦の海苔茶漬
			秋					起爆剤ひそかに抱いて妻の乱
倫子	東	板	大阪市	美	寿	Ш	吉	羽曳野市
		- 11	愚痴言わぬ人には愚痴をひっこめる					七十の画布にも欲しい青い空
			子にもらう年玉ちらほら自慢聞く					秋のいろ柿もおんなも熟れている
			三ヶ日お詣りばかり老夫婦					ダイエット実りの秋が邪魔になる
			詩に暮れ詩に始まるお正月					自作自演まだ入れられぬダルマの目
			大空を目ざすめん鶏の雄叫びか					平静を装い敵の数を読む
典子	磯	神夏	大阪市	太	透	中	田	羽曳野市

大阪市
中
西
兼治郎

どこの 葉焚き秋の匂になる煙 だれ乗って走るか救急 ったで牛 は 肉 12

機

買

旅先で妻とは 銀行の隣 預ける金はなし 行けぬとこが あ ŋ

元旦 一だ朝陽を入れる窓を開

大阪

市

稲

本

凡

子

雨の日は洗濯機も休ませる ときめきを貰う包みがほどけない 言が多い少ない日の余生

相棒 子を頼り にしてる紙コッ ブ

亡父の ランダの実り雀も鳩も 座が今も残っている茶の間 待ち

東大阪

市

崎

Ш

美

子

アクセサリーとしての良書がある

後悔ととり越し苦労で一夜あけ 風を受けゆらぎだす無神

試 彼 女から内緒と言 室 出 入り 激 しい われ胸躍 まだかいな る

大阪市

寺

井

東

雲

内緒やけどあん の梅は不作で皆不作 が落ちてボ たー ーナス現品で 番美人やで

> 一冬や春 に根深大根旨 を待てずに寒桜

二人揃って一緒に行くのは 不況風吹いて家庭の鍋 料 理

くなる

逆上り出 来ない孫にある絆 お医者さん

大阪

市

E

H

影

耳遠く 犬の耳びくりと騒ぐ 分身と思えど義歯のよそよそし 点滴のしずく見ている目 こましゃくれた梅一 なって平和な明け暮れ 輪の寝 夜のしじま のうつろ IE K 月 知 県 赤

単身赴任 ふる里に落人眠る森があ 世紀覗く眼鏡が曇りだし 妻が生き生き仕度する

ライ J ピーした暮しにも似たきのう今日 バルに今日はお世辞を言っとこう

たった一 章 前でやっと親しくなりました 0 マス目を埋める冬の宿 パイでやさしい 父 0 顔になり 小

さざんかが咲かぬ恩師の三周忌

月になったらよいことありそうな

澤 幸

高知県

泉

-26

Ш

菊

野

大阪 市 北

勝

美

泥舟にのせられかけたこともあり	寡婦という五十年の泣き笑い	いろいろなドラマを見てる港町	スタイルに自信はないが黒が好き	修羅の面やっと外した古希の坂	姫路市 中	自分史に初恋の彩描き足そう	年下の良人が似合う長寿国	生かされる喜び愚痴も同居する	物産展郷土の菓子に童唄	終章に見事に咲いた竹の花	姫路市 丁	手鏡の中の私は本物だ	リハビリに週休二日許されぬ	人間になろうなろうと数珠を持つ	いつか炎えつきる日が来る励まねば	ジグザグの道に落ちてる幸不幸	姫路市 大	干し柿の彩ほんのりと味の彩	吊り革で揺れつ見ぬふり他人ごと	これからだ八十を記念の服仕立て	菊の鉢 葉の艶ばかり褒めてゆき	未練あるビール今日から酒にする	高知市 北	
					塚						坪						原						Л	
					遊						サロ						葉						竹	
					峰						ワ子						香						萌	
ポケベルが企業戦士にしてしまう	燃える傘二人の愛は振り向かぬ	女心と肩を組むのは秋の空	ときどきはあの世を覗く絵ローソク	雨の部屋身の上ばなししたくなる	今治市 四	温泉につかる姉妹も六十路越え	だんだんと夫に似てくる孫の所作	ダイエットする気で買ったレオタード	煩悩が払い切れない夜の底	小柄でも人に負けないでかい夢	堺市田	気の毒な記事の活字が大きくて	手を振ると別れが惜しいように見え	こんにゃくの色が変わっておでん冬	勝いくさ重ねて悪い知恵もつき	表札を替えて小さな運を待つ	西条市	老母の呆けかわいくもあり腹も立ち	三枚目演じて本心のぞかせず	膨れたり凋んだりわたしの夢は七変化	雑草を抜きつつゴメンナサイを言う	空が青くてコスモス咲いて軽い鬱	神戸市	
					野						黒						片						Ш	
					村						田						上							
					京						真						明						美	
					子						砂						水						穂	

吹 田 市 Ш 本 希久子

め言葉花も女も活かされ 3

夜明くれ ばうっすら雪の忘 n 傘

地に還る落葉はらはら風を呼 還暦と米寿が揃う祝 い箸 3:

りえちゃんのファンはみんな押し出され 大田

八十路坂やっぱり欲な杖をひき

市 藤

軒

太楼

市 安 本 晃 授

静

岡

った余生の旅 の発車 ~ ル

割り切

年金

のお蔭孫とも

仲がよい

つっこんだ首です最後まで抜けら 知らないとすねる仕草も適齢期 点滴を見詰め年金のありがたさ

ń

す

力の 後味のこる夏帽子 朝茶に写る恵比 須 顔

無重

耐

0

定年の朝 から軽い父の 貨 車

てなお白紙に おどる青 春譜

真 剣な恋だ恥ずべき事は なし 富 田

林

市

片

智恵子

奈良県

長谷

春

蘭

まだ咲かぬ椿の意地をみてしまう 君偲ぶこころを人に見すかされ 手袋に病んでる小指 見破られ

ン告知受ける勇気はまだ持てず

子の 顔が揃えば老母の

信

号を待つどの顔も皆他

人

終日雨ゆっくり大豆煮ています 秋空に小さな意地は溶けて行く 二人し 大写し

0

ヒップは

乱れ 握手し 受話器置く音たしかめて好きな人 ない酒で垣 てしばし眠れる獅子となる 根のあるお人

出勤のズボンの皺も十二月

お

n

箕

面

市

中

嶋

田実子

強情で 酔えば出 てくる気の悪さ 河内長野市

混浴は老女が多く気味悪い 犬が居て旅へは行けずカラオケで

っとする顔がすぐ乗る口

逆らうと後が大変妻の愚痴 か

三日見ぬ三日の嵩の落葉かな よろよろとド 枝豆の笊仲よし小よしの指動 ングリの独楽倒 n 1 たり

派手好きは老い n ば我が子我が妻七五三 のきざしか秋 0

て越して来た坂忘れかけ 何の コマーシャ ル

市 柿 花

紀美女

28

西华

井

F.

喜

七人の敵 原発の逆転 入院をするほどでない ペンで書く年賀の へ年賀の墨をする 能登の明と暗 不整 理 0 脈 中 七 尾 市 松 高 秀 峰 夕焼 よく のど飴に慰められているひ に 光る山ふところの 満足赤とんぼ る味噌汁と目玉焼 を歌う 小さい とり 灯 松 市 谷

満足があ 生 お 命 ばはん 0 はお手玉 賜り夢がまた増える Ē 手 唄 E 中 市 吉

悲し

過ぎ仕事

0

鬼も癌

3

堺

市

瀬

福

体内 あみ 雨もよし洗い晒した花言 だくじ で誰が操るコンピュー 曲って曲って出す答 葉 ター

か な 12 方が よ か 0 た顕微 豊中市

留袖 友送 七五三可愛くて孫ほしくなる 0 る踏切りまでの月の道 疲れ嬉り しさ寂しさと

母と娘がゆっくり話す小正 うしろから妻のハミング流れてる

悪人の

飼う犬善人吠えたがる

る里

0

駅

はホ

1

4

が一つだけ

インタビュー今の気持ちとありきたり

杖 青

> 13 鳥

逃げてもなおも追

Va

け

静

県

蘭

田

獏

沓

ついて地球を救う講義聞

< 続 T 除

ルミ貨 夜の鐘

も味方に入れて十二

月

余韻を耳にそばす

する

美人ならそばに居ますと妻が言う

散髪屋尾ひれを付け 本人は夢だと言うが実は欲

た客が来る

北 四 マラソンにたとえ門出 雪の 京秋 五入すこし情けが足りない 天 のぼりを立てて旅役者 詰 めをあやまる思い込み 出会う友好両 の祝辞する 陛 ta

笑

せたいから失言

0

ふたつみつ 個を弾き出

ンパ

ンの

カロ

1) V

ĺ してる頼

0 有 微

13

て身震

りなさ

笑み

0

内らで抱い

ている思惑

南

市

坂

公

子

りがとうなんて言われて心細い

真

風

あ ずき

隆

大阪

府

籾

Ш

辻

Ш

子

霧雨にけむる紅葉の刻流れ	葉ふる降る刻の流れに	たきりの友と握手	一言が過ぎた友への疑惑の眼	富士宮市	かんぬきが固い誤解がまだとけぬ	老いた身を破れ太鼓と言うなかれ	とが	ろ酔いが思いだし		夫婦坂 中途半端は許されず	精髭 今日	便りおどの	除機に昨日の憂さ		けもの道矢印なんかありません	治家がこ	くとも元旦らし	賞罰なし自慢の出来る履歴書だ	大阪市	豊葦原瑞穂の国のコシヒカリ	田町の昨	球儀の	鳥居くぐれ	10
				渥					槇					西					桝					KK
				美					田					岡					本					原
				弧					英					洛					蕗					静
				秀					詩					酔					児					歩
邪魔そうな女子マラソンの揺れる胸	ライバルの出世を耳に焦ってる	宿の火事 内緒の浮気表沙汰	引越しへ神も仏も縛りつけ	和歌山県	過労死へ不況がけげんな顔をする	薄情者泣くだけ泣いてケロリとし	図太さに日干しにされた遠慮勝ち	住みにくい世を図太さが闊歩する	岡山県	傷を持つ男に論す孫がいる	底力有っても無くても譲渡する	定位置がなくて転がす椅子が好い	許してはみたが返信とげの束	岡山県	飽食の余り喜ぶ蟻の群れ	息抜きの喫煙所時計に休みなし	蜜に寄る蟻に似ている大派閥	列はなれ大きな餌に蟻二匹	加賀市	死が倖せと思う人が死にました	年重ね肩書年毎消えてゆく	歩道とは自転車走り犬散歩	狭い日本 目障りは休耕田	仙台市
				岩					花					岩					細					Щ
				崎					田					道					呂木					村
				瑞					たい					博					魯					映
				穂					け志					友					木					輝

一線を守って静か嫁姑三ヶ日若いつもりで紅をさす飾り棚旅の想い出また一つ		大太鼓 千の鼓動をうちならす恍惚のハエが一匹動かない	向日葵がしおれて夏の恋終るあなただけ面と向かっていえる人	倉吉市	生き甲斐を見つけた車椅子を押す	ら見舞こ丁って木禽の皮をごく誕生寺ここもお守り売ってはる	逆杖の銀杏に祖師の苦を思う(作州路の旅	鳥取県	半分は本音を吐いているジョーク	乱れ打つ太鼓原始の血が騒ぐ	老化だなすぐ目頭が熱くなる	晴れ晴れと捨てた故郷に錦着る	鳥取県	親の肩もまずにあんま器が届き	震度四その日一日大家族	さむがりをしゃきりと叱る冬野菜	ほんとうの愛に飢えてる捨て台詞	大阪市	
	Щ			野			0	乾					上					渡	
	崎			中				喜					田					部	
	君			御				音与					俊					3	
	子			前				志					路					さと美	
内緒をふりまく彼をみてしまう石ころがころがり秋の声を出すかんがえるまでもなくボクおたくかんがえるまでもなくボクおたく	倉吉	快老学いくつになっても挑戦者どん底へかけ寄る友の手がぬくい	野仏のひざのあたりの草紅葉老い来ても心の弾む衣替え	島根県	だけ誇りはも	免状や悲しい飲が子きこなる岸までは泳いでゆけぬあめんぼう	約束は片手切符で逃げられる	米子市	犬もまた雷ぎらいでカレー好き	ドクターが廊下を駆ける夢を見た	次の世もまた島国にうまれたい	うろこ雲ゆっくりとけて何になる	吹田市	諸外国見てる日本の貢献度	物差しで計れぬ事故の後遺症	逃げ込んだ窮鼠深追いしない猫	爆笑の渦へピエロの投げキッス	唐津市	
族	市			乐				114					3.5						
族	市渡			高				茂					栗					筒	
族	市			97.9															
族	市渡			高				茂					栗					筒	
族	市渡辺			高野				茂理					栗谷					筒井	

窓ごしの秋陽ゆったり甘露です	ぼけまいぞポックリ寺のあの説教	祝酒しっかと抱いて医者忘れ	ふるさとでしっとり濡らす雨にあう	出雲市	傷心を洗い流した谷紅葉	玄関の靴をお客にそろえさせ	いわくある酒で悪酔してしまい	座を抜けた間に噂交わされる	出雲市	他人事で済ませぬ女のイヤリング	つまずいた小石は丸い石でした	ふるさとの家に明治と大正と	川下で母は答を待っている	出雲市	大器かと親の欲目で見る寝顔	空港に孤児が落としてゆく涙	根性があるか尻尾を振らぬ犬	職退いてからご近所の顔を知り	箕面市	風上で笛を吹くのは母だろう	邪恋をも許して星座よく光る	最高の敬語で金を借りに来た	実生から育て摘み取る枝がない	倉吉市
				富					小					島					椎					野
				田					玉										江					П
				蘭					満					祥					清					節
				水					江					庵					芳					子
家にある花が気になる恢復期	とっくりと嫁の意見も聞いてやり	梅ぼしに引き立てられる粥の味	死別していい事ばかり思い出す	宝塚市	姿かえ封建社会が顔を見せ	鬼なれば鬼の顔にて出てほしい	永田町 数の力にかげり見せ	民馬鹿にしたような凄い匙加減	池田市	肉厚い手から破魔矢を貰い受け	近よればコスモス顔を振るばかり	竹林で透明になる人の影	竹の葉が揺れて石仏丸くなる	守口市	貸した金しわしわ札で戻って来	親のこと思わなかった四十代	ドレスアップの時だけ思うダイエット	百歳まで生きると決めている夫婦	茨木市	観光地やたら観音像を建て	魂が入らぬ観音像が増え	万歩計 犬は二万歩になる	約束の小指が痛い十六時	弘前市
				吉					岡					森			1		堀					須
				田					本					Щ										郷
				笑					吉太郎					まさお					良					井
				女					郎					お					江					蛙

				いた隣の柿に気を取った隣の柿に気を取り		夢を持ち続ける限り老いはせぬ
				整へ 歩帯寺間売んで出る		りをなりこ匠个つてが
				正座して夫の言訳聞いている		説教の効き目長さに比例せず
				無口な夫婦信じ切ってる箸を置く		花束のリボン園児の手製です
子	ゆり	路	淡	倉吉市	福元 みのる	藤井寺市
				先駆者がさかさに浮かぶ無重力		鍋ものがお好きなようでと手を省く
				喜寿へ一歩医師も汗ばむ内視鏡		過労死の心配はないパートナー
				永い癖 無帽のままに挙手の礼		いっぺんは歩いてみたい獣道
				ハンドルの粗暴と優美曲がる辻		木の葉黄に染まり街みな詩となる
錆	紫	内	竹	町田市	結 城 君 子	守口市
				酉年は極楽鳥になる気分		強情な姑に嫁の負けたふり
				手のひらにタネを包んで明日を待つ		エイズより政界を虫ばむ金権病
				バブル崩壊したら本音が日本中		女房よりたよりにしている万歩計
				この一年旅と句と酒指回し		万歩計俺の行先ついて来る
生	森	上	井	茨木市	原田メイシュン	諫早市
				老母を看る明日自分を重ねつつ		インコでもお伽噺をするテレビ
				北風と四つに組んだ束ね髪		姉妹の連絡基地が病室に
				お客様のニーズに敏い店めがね		店の暇やけに集金人が来る
				これまでのことは言わない夫婦箸		大波もさざ波になる永田町
子	富	上	井	倉敷市	松 尾 柳右子	大阪市
				元旦の計三日で終らすな		佇めば水に静かな音があり
				宝くじ当たらぬ前のでかい夢		愚かなる善人にして良く眠り
				質状くる差出人だけざっと見る		尾燈今残す別れの虚脱感
				新年の御慶回っても三四軒		僧しみがくさり切らずにいる夫婦
亭	ろ	宅	Ξ	羽咋市	古 川 覚然坊	八尾市

投げやりでいても律義に花を付け		り替えた障子落ちつくの小さい男は小さい文	変変疾 母よー人で一世帯 で変奏 母よー人で一世帯 で変奏 母よー人で一世帯 で変奏 母よー人で一世帯	あきする金ブ	和泉市岡
治		木	天	40	井
ちか		歳	千		や
かし		栄	代	好 :	やすお
美徳とは耐えることだと教えられいつまでも女でありたいのも欲かいつまでも女でありたいのも欲かいのも欲かがしている。 風七色に吹き抜ける		かっぱい かっぱい かっぱい かっぱい かい かい かい はい と エ ホ バ の かい	神びる草 腰痛なんだ見んとこう 伸びる草 腰痛なんだ見んとこう 子離れをしても偶には釘を打つ 子離れをしても偶には釘を打つ	れ	出雲市
藤		米	井		伊
原		田	上。	見	藤
鈴		恭	照	志子	寿
江	15	昌	子	子	美

赤信号ひとりで渡ることもある 年ごとに雑煮の餅の数が減る 年ごとに雑煮の餅の数が減る 豊中市 清	すがいる	表妻の苦労に二重丸あげる と妻の苦労に二重丸あげる 根や口も美人と数は一緒です しまったがり はかけん はいて笑いの来た平和 戦争に泣いて笑いの来た平和	般若湯をのんで刺身を食べている 耐という特効薬を買ってくる 耐という特効薬を買ってくる	高根県 加 カード
非	t	木	原	本
	専	圭	喬	隆義
史	ė	郎	水	風 良
虚栄の帽子被って立て前言いにくるとりとめもない一日の釣瓶落ちとの字の心の点がきまらない	ち	行商のオバハン電卓たくみなり 一言い残すことのありそう紅葉燃ゆ 言い残すことのありそう紅葉燃ゆ 言い残すことのありそう紅葉燃ゆ	世ンチからぬけておかゆの味を恋う 片棒をかつがされてから不安 片棒をかつがされてから不安	馬取県 歌交わし古事記を閉じる推古帝 (古事記) 歌交わし古事記を閉じる推古帝 (古事記)
松	公	神	梅	津瀬
本	*	保	田	村尾
たたし	2	拓	宣	八 六郎

健康のシンボル素顔美しい	八十路坂もリズム崩さぬ母だった	健やかに育ってほしいお赤飯	野の花を生けて心に彩を足す	鳥取県	自分から歩くと答きっとある	原石の光見落とす目の高さ	三猿もたまに片目を開けたがる	自分には過ぎた相手という疲れ	和歌山県	風向きで半分聞える内緒ごと	正直に進む頭に飛ぶ吹矢	泥臭い言葉が救う太い眉	巣立つまで乱気流さけ舵をとる	和歌山市	お互いのプライド守り共白髪	今年こそ今年こそはのタイガース	歯切れよい啖呵職場の行かず後家	除夜の鐘百八つ目の終い風呂	大和郡山市	雑学の傘で通り雨過ごす	群れるしか知らぬ鰯へ網が待つ	背信の靴 蟻百匹を軽く踏む	船酔いを知らぬ女房舵をとる	鳥取県	
				石					小					北					坊					石	
				尾					倉					Щ					農					谷	
				かっ					ア					好					柳					美	
				つ乃					サ					笑					弘					美恵子	
相談に乗れば土舟もこいでみる	相乗りが二人の溝をうめてゆく	の知	欲捨てて足どり軽い万歩計	香川県	職人の余生鋏は離せない	その裏を菩薩はちゃんとお見通し	七十年えらいと思う日記帳	母の味に近づいて来た落し蓋	鳥取県	手錠までかかる計算しなかった	計算は度外視にするジゲ起し	絵に描いた餅にネズミは寄りつかぬ	父さんが母のペットになっている	鳥取県	いうなれば私年金受け取り器	興至れば艶話も辞せぬ師なりけり	ぬるま湯の中でじいちゃん枯れすすき	河豚食って松茸下げて帰る夢	箕面市	口車に一番乗りをする男	苦しみをジョークで飛ばすお姑さん	陣痛の苦しみ忘れ二男二女	やがて散る花も私も紅を引く	鳥取県	
				新					西					幸			_		岩					太	
				Щ					Ш					家					津					田	
				マサ					和					單.					ようじ					幸	
				リア					子					車					じ					枝	

77 17		-X-		Left		ਜ਼				s.	44	1		h.H.	,	+	6 T		17	deh	+/	h	
石仏群静か大沢の池巡るほとばしる夢・嵯峨野路		勇退のチャンス寿ぐ祝い	たそがれて山門静かに閉	博多帯しゃきり紬の秋を着る		平均寿命はるかに越えて大往	一言へ二言かえる倦怠期	同じ父母持って子供の出来で		さし迫り三分間の写真出	給食の知らないままで手弁当	十月の雨は絵になる里の		雑談の中で衣を脱がされ	うたた寝の妻が返事をするテレ	赤とんぼ見知らぬ里へお	紅葉の情けに騒ぐ胸があ		ワープロの名手 毛筆憧	熟年もアリス永吉好きな曲	拗ねすぎて今か今かと待つ電話	夕焼けを嫌うあなたは寂	
に埋めた過去	J	酒	に閉ざされる	着る	出雲市	大往生 (義母九十		来不出来	岸和田市	す	弁当	秋	河内長野市	る	るテレビ	嫁入り	る	鳥取県	れる	曲	つ電話	しがり	吹田市
去	町				小	九十一歳			三				植					鈴					瀬
	田				白金	一歳で死去)			輪				村					木					戸
	達				房				通				喜					公					まさよ
	子				子				彦				代					弘、					よ
主役にはならぬサラダの味が好き	かい土に素直な花が	島根県	木枯しが吹いてどこかで犬が鳴く	故里へひとつおぼえの数え唄	産む苦しみ知らぬ男の父性愛	鳥取県	柿の葉をお茶にしてます生きたくて	クラス会 和服でビール遠慮する	娘のたてた抹茶で春を飲んでいる	鳥取県	彩ひとつ足してやさしい冬にする	かまきりもつられて嫁をとるという	鍬みがく私に名刺などいらぬ	鳥取県	大阪弁丸出しにして食ううどん	法律の裏で稼いでいる宗教	鹿は賢い	大阪市	喜びはここに極まる孫の婚	すれ違い頑張りましょうと車椅子	墨すって筆買うたけど悪筆で	大阪市	守護神が北極星という寺院(能勢妙見)
		槻				黒				田				さえき				清				岡	
		谷				田				村								水	e.			田	
		-				くに子				喜美子				やえ				利				ふみ	

鳥取市 前 田 枝

残菊の彩あせぬ間

の日向

ぼこ

豊中市

Ξ

宅

つえ子

ス一つ早める秋の陽が落ちる デター信じた人も旗を振る

旅 帰り古新聞も拾い読み

倉吉市 最 1: 和 枝

立 限りない空の蒼さにうろたえる ち退きは応じぬつもり一軒家

楽へここにもひとり雨男

歌 山 県 西 忠 雄

古新 コンパクト叩いて枯木に花 聞 二度の役目の アナウンス が咲く

ロシア語で古里恋し鮭のぼる

ゴト過去を煮付けるか 和 歌山 宮 П 克 子

使えない生きる手段の二枚舌 断は互 いの意見聞い てから

深鍋でゴト

藤井寺市 中 島 志 洋

賀状来ぬ旧友ひとり気にかかり

支持率に民の怒りが込められる 風邪ぐらい休んでられぬ初句会

浄水 ぐむうちの子がいる鼓笛隊 0 子の 蛇口につけて夏を飲 才能を見てる親

茨木市

藤

井

正

雄

ひとりいてジャズの心がわかる午後 葬ありて地蔵も貰う灯のひとつ

新春おめでとう会

٢ \$ 1月15日 (祝) 午後1時開会

とこ ろ 大 成

(心斎橋「大丸」と「そごう」の間を東

百

〇句 (各題2句 空 小

島 蘭 幸選

城

武

庫 坊

選

◎祝賀会

7000円

※新同 人には記念品を呈上します。

福袋の交換を行いますので、参加者は各自 5 0 0 円程度の品物をご持参ください。

柳

Ш

社

あけましておめでとうございます

川柳塔社常任理事会

 常
 副
 理
 主

 任
 理
 主
 事

 事
 長
 幹
 長

Ш 神奥 榎 板 阿 野 河 内 内 谷 田 本 尾 萬 田 村 JII 天 月 凡み 吐 岳 萬 太茂 柳 九つ郎子 来 人 的

宮 宮 春 西辻玉 田 高 塩 小小 袁 城 出 置 中 杉 満 池 岡 出 口 美 射 笛 武 楓白重 正 智 庫 房 生 坊 楽

Ш すとお岩 津 軽 通 木 Ш V は 浄土 抱 か 道 n たり

八 木 Ŧ.

代

天 歳 け て自惚れ 軍 鶏 0 0) 瞳 空 てよし富 0 0 和 お に光り お 6 1: か

0

Ш

(癸酉に題す

(勅題に寄す

水

粉

T

翁

主婦 松茸 とい 「がきら 3 め 63 くさ特売場に V てい る祭ず 向

旅は続 紅き実 はるば

てね たわ

ぷた太鼓

0

鳴りやまず

は ると来

わ情けも鈴なりに

つる六分

0

俠気

かな

野

村 太

本 田 恵 朗

時 どきは 飯 歯 n を飢 には 向 it 覗 えの 無 ば 理 母 V て見 民 な鮑を舐 は 祈 んよう母 は ŋ 見 0) 目で縋 せま め ている 0 部 13 7 3 屋

群

れたメダ

カよ何が

処

散

3

さすが

年

輪

叱る言 かい 40

葉に味があり

ほろ苦くまた温か

くはげ

まされ

耐え抜き年輪

散

'n

をち

てる

寒椿

順 は低 時

10

P んと知

1

テ

P 0

7

ンであ

3

0

n

茸 2

ほん から うれ

まにほ のぞけ L

h

まに

久し

ぶり なり てきとうにやれと背中が泣

V

てい

道描

10

て迷

b

ぬ彩に塗 伏

0 tr

てある

斯界

初

日

0)

出

輝

<

虎

城

拝

Vi

話ため

ている

ば昔の

顔

に

空即

是 す

色

今 の茶吹け

彩

決

め 3:

7

あ

3

り上

がる浪

に想 年の

V

を寄 は ば飛 1

I

"

F

食

12

切

ŋ

かえたとは犬のこと

IE

本

水

客

せて待 家 代 仕

男

茂

- 40 -

•	545	5455	***	يهمو	545	reser	45-64	دهمو	545A	News.	4564	5665	5855	week	بعمو	565	545	***	وبهمو	505	nun		5645	5455Y
	オバハンと呼んだら悪い歳になり	夢に見る愚痴が線香くゆらせる	ピエロにもなれる男の政治論	朝めしのうまい匂と妻の味	叱られることに馴れてて妻達者		芋粥でよし元気な顔揃う	これも業お池の亀と根較べ	単細胞したい事して死ぬもよし	柿落葉掃くには惜しい色ばかり	眼を閉じて掌を合わすだけでよし仏	to.	少しばかり理想があってアデランス	七十のプランへ妻の句読点	ネクタイを嫌う男で話下手	汽車に乗ってからど忘れを思い出し	鶏声に明け恙なき日を拝む		どんな痛みかと問われても困るなり	生ぬるいお粥イライラせんことだ	幻覚か柱時計が鳴っている	山脈を見ている長い長い僕の戦	十病棟だんだん天に近づくよ	
						児島						松						恒						谷
						两 与						Ш						松						垣
						呂						杜						叫						史
						志						的						紅						好
	太陽熱の恩恵くらしを豊かにす	社会の恩こころにしかとボランティ	自然の美くらしの四季	宇宙飛行二十一世紀へ夢開く	諸悪行浄め給えと初詣		滔々と子からエイズの予防法	怪我をせぬ位置心得て二度の職	コンパクト前後左右はみんな敵	飢えること知ってて節が枉げられず	男を無視する時ガムを嚙んでいる		出世コース降りて過労死 他人事	強がりを言うなと老いに笑われる	健康への自信伸びたり縮んだり	注意信号のまま続いてる老いの日々	もっと頭使えと驕る顔が言う		いま少しこの世の未練に酔うてみる	皿回し思えば我も皿回し	恐ろしや鏡に泣いているピエロ	こおろぎも浄土の旅に発って冬	厭世の深みにはまる雪そして	Sets

月

原

宵

藤

井

明

朗

井

文

しや鏡に泣いているピエロ ろぎも浄土の旅に発っ 少しこの世の未練に酔うてみる に発って冬

波 野 Ŧi. 楽 ᢗᠵᡏᡷᠵᡏᡷᠵᡏᡷᠵᡏᡷᠵᡏᡷᠵᡏᡷᠵᡏᡷᠵᡏᡷᠵᡏᡷᠵᡏᡷᠵᡏᡷᠵᡏᡷᠵᡏᡲᠵᠮᡲᠵᠮᡲᠵᠮᡲᠵᠮᡲᠵᠮᡲᠵᠮᡲᠵᡏᡲᠵᠮᡲᠵᠮᢠᠵᡏᢠᠵᠮᢠᠵᡏᢠᠵᠮᢠᠵᠮᢠᠵᠮ 思 失敗 地 道お 転氏環 ガ 小民 を問 ぼろ夜をひとときさわ い球 職 神 0 事 3 ス 魚 境 0 カ 字架も悩みも背負 するところ 市 子も 0 0 Fo 出 儀 0 を見逃す 0 0 丸 苦手この娘 7 民 ぐち を重 勇 太鼓 悪さ赤 に 火 カ うことに もしし を啞然とさせる裏 0 たら会える日もあろ 平 を小さく 気ない じやこ 高さそこから 0 が金権 ね香焚く三 和 雑 から 女の横 を祈 とん 音 母 U んと謹 は \$ とし まま平 U 捕 もやが 0 人は 主 目が n 慣 でく 祖 1 II ŋ 母が 鳥 n 0 気になっ か V かず 慎してい Va 人 笑う たび て嫁に 天に П かい T 響 C 10 b 子も日本 生 4. 忌 翔 豆 日 らう きて か 42 我は 世 人旅 猫 をたく なる n 薬草干 7 3: な 3 和 界 と猫 行く 61 3 ます WD 6 我 0 た 1 子. 1 藤 小 遠 T. 林 村 Ш 藤 由 可 甲 多 香 女 住 吉 万全の 指白叱む 生 怒 顔立 7 経お 百 = 聞立風 きて 3 1 くとは 眼 0 1 0 済 お 歳 面 中 表 食 ・ムカー ても泣 鏡の な か エッ 復 無 百 ŋ 鏡 情 好 7 0 返事が 手を打 興 きで長 白 10 L 事 歳 1 に 男 12 父 10 た過去に 1 小 な テ 入れ 葬 な 女闘う眉 話 型型 1º 男 自 0 難 声 1 儀 L - 奈落 兀 17 無 民 ても大阪 は to 15 1 ち ta 軽 に またも 湯 屋 ブル 生 たく 父さん 女に 明日 その 丰 棺 聞 ば Va き残 が 0 汚 + を引 なら 芽出 0 43 ンプ おちる音 よもう一 生 た話 怖 10 した手を洗 0 Ŀ 釘 メロンを食 < V 1 3 3 ぬ度 弁 降 靴 な 演 などい なる 男 話 かい 打 ŋ 2 磨 義 10 は 歌 て 勝 か 1 理 H ち 俺 好 朝 かい ち度 n から 0 き か + あ ~ かい 3 n 損 岩 大 有 ta 野 本 \mathbb{H} 矢 働 雀 素

+

郎

踊

芳

仙

身

郎

角絶 気 曲ち 画 た 儘 きり t 切 旅 1 0 to ラッツ た絆 1 3 惜 し涙 数 12 かい 0 義 内 かい 騒 2 理 4 て 頰 孤 揉 す 涂 0 児帰 たう 長 ま 中 n 寿 下 なが 国 国車 6

読

25

保酒 風首 存 船 致 塚 開 石 地 は 区 発 現代 白 鳥

飛 人に 壁 0 寺 默 に忘 0 秘陽 権の n b ぬ < n

飛 鳥 K 昔 0 う たが な

西 H 柳

宏 子

とき 空先情 Н をもう it 銀 0 こと思 なや た 0 現 まに 飛鳥散策 柿 物 向 えばば 支 の種より 会 一えば 給 きもし 重 古 皮 43 V 背 12 札 肉 なの ぎり V

鳩ぐ 石め る ま

Sp 萬

萬

的

氏凧 鳳ま E 鳳 上げる景色 逢 0 える 間 祝 着 0 楽 ま 7 L U もま 部み 1 カ 添 屋 あ えて来 ル 初 た 線 語 た 詣 0 3 愛 小た年 良 (貴 ŋ

高 杉

友 一

の九

明年の

秋を忘し

n

と待っ

3

に待っていれることは

達 九 石 Va

忌

落

注 入 0

意 n

0 0

は

す < る

T

この

世い

なる

流

L 0

ような

鬼 游

まま

風

紫 香

黒

JII

1+ かい

かい

あ

b

た

部

屋

第27回 岡山県川柳大会

2 1月24日(日)午前9時開場 岡山県·邑久町立中央公民館 兼題と選者(各題2句)

> 「飾 る」 石井冬魚選 「深 V21 山田止水選 瞳 かなもりかず枝 選 「砂 嵐」 河内月子選 「海 板東弘子選 峡 門脇洋子選 「昏れる」

特別席題 当日1題発表

出句締切 正午

閉会予定 午後3時半

1500円 (昼食・参加賞呈) 숲 曹

主催 白百合川柳社

旅 長 ま 意 IF. た 筒 0 月 同 ま 0 らまに 岬 カ 10 挨 x 男が 拶 ラに 残 僕 文 を動 し夕陽落 鳥 聞 夕 陽 言う か き + 狙 飽 きる 7 つわ 妻 れい は る 魔

女

·喜屋武岬

可

内

笑

天

小 出 智

子



りのよいおばさんでありました。 柳界の皆さんから慕われてきた、 あなたは昭和6年9月にはじめて川柳界に あなたは肝っ玉母さん、 女傑、女丈夫とあらゆる賛辞をもって 岸和田の大姉御 ものわか

界につくされた功績の数々は枚挙にいとまが ありません。 入り、五十有余年の長きにわたり、 わが川柳

を表に、その裏面に 昭和51年岸和田市久米田寺に 。ちっぽけな善意でもよし心満つ 操子

同58年6月15日より五日間、市民ギャラリー 立されました。 という女性として関西では初めての句碑を建 同53年11月、 。大地の恵み太陽と握手する 句集『千亀利』を発刊され、

> れました。 五万三千石の岸和田城下の文化発展に貢献さ 十万円を文化会館建設費の一部にと寄贈され で操子川柳作品展を催され、 売上金の内百五

胸の奥深く生きていることでしょう。 広大無辺の温かい心は、永遠に我等川柳人の 採録されるという広い心の句集でありました。 文化祭川柳大会の出席者四百五十余名の句も 十一名の句も載せられ、なおその上、岸和田 自分自身の句はとにかく、岸せん新旧同人七 梓されましたが、まことにユニークな句集で 句碑にある太陽の御作のごとく、あなたの また、昭和62年、第二句集『万年青』を上 あなたの御霊の前にこうして佇っていても

> くるようです。 にまかしときんかいな」という声がきこえて をされる庶民性豊かな「そのことは、わたい

あなたの代表句

う。「わいも来たんやして」と気さくに句座 生を初め沢山の川柳人がおられることでしょ 展げていることと思います。そこには路郎先 陰徳は、きっと極楽浄土への長い道を坦々と 何回かの生命の峠を越えてこられた、あなた 如来さんのお手に乗られることになりました。 という句がございますが、いよいよ今度は、 ょう。(「高橋操子さんを悼む」西尾栞)。 に侍って、楽しい句作に耽けられることでし の不屈の精神を、この世に施されたあなたの 。お身ぬぐい大仏さまのお手に乗る 操子

姉位。家業は呉服屋さんである。 年1月29日死去、享年7。 貞徳院慈温操薫大 高橋操子は明治4年6月26日生れ。平成元

になってしまいました。 た。そして間もなく主人が倒れ、医師からは 上から谷底へ蹴落されたようなショックでし に三女を四歳で急死させたときは、幸福の頂 一年余りの命だといわれ、家の中がまっくら 昭和27年1月2日、このお目出度い正月

は不況のどん底で、それと共に家業は失敗に 31年12月29日に夫が死亡した時は、 世の中

をさしのべて岸和田弁丸出しで、ニコニコ話 誰彼の別なく好き嫌いもなく、常に温かい手

一泣いていては家族みんなが食えませぬ一泣いていては家族みんなが食えませぬ

- 借金があるから自殺などできず でした。そんな生活の中にも、私は川柳を続 でした。そんな生活の中にも、私は川柳を続 けました。川柳を主人と思い、また、宗教だ とも思いました。

懸命になって近づこうとしました。
会掌をして無我の境に至れば、それは神の合掌をして無我の境に至れば、それは神の

躍ぶりだった。(中略

今それが何よりもうれしいのです。時折、私はだれにも頼らず、まことのわが心に頼り私はだれにも頼らず、まことのわが心に頼り私だけを頼り、夜ひるとなく働いて、十年後素直でした。十指の素直な姿のように、私は素直でした。十指の素直な姿のように、私は素直でした。

「20歳の時、今村良之祐の柳誌『むろまち』の会員となったのがきっかけで、その間本職の呉服業に精励なさったことはもちろん、戦の呉服業に精励なさったことはもちろん、戦の呉服業に精励なさったことはもちろん、戦の兵服業に精励なさったことはもちろん、戦の兵服業に精励なさったことはもちろん、戦の兵服業に精励なさったことはもちろん、戦の会員となったのがきっかけで、その間本職の会員となったのがきっかけで、その間本職の会員となったのがきっかけで、その間本職の会員となったの時に、

集『千亀利』がぬしさんの手で生れたのであ 集『千亀利』がぬしさんの手で生れたのであ り 学和田城の別名「千亀利城から頂いて句 をからすん。の存在であるとみたがどうか。(中 しさん」の存在であるとみたがどうか。(中 しさん」の存在であるとみたがどうか。(中 しさん」の存在であるとみたがどうか。(中 しさん」の存在であるとみたがどうか。(中 しさん」の存在であるとみたがどうか。(中 しさん」の存在であるとみたがどうか。(中 しさん」の存在であるとみたがといった一般的表現で生れたのである。 しからすんでも霊ある動物」とある。動物とは からすんでも霊ある動物」とある。 しさん」の存在であるとみたがどうか。(中 しさん」の存在であるとみたがどうか。(中 しさん」の存在であるとみたがどうか。(中

「高橋操子さんを板尾岳人さんや私は、岸和田の肝っ玉母さんと呼んでいる。私たちに和田の肝っ玉母さんと呼んでいる。私たちに和田の肝っま母さんと呼んでいる。私たちにれてのだ。頼みごとをしても巨体を揺すって、なのだ。頼みごとをしても巨体を揺すって、なのだ。頼みごとをしても巨体を揺すって、なのだ。頼みごとをしても巨体を揺すって、なのだ。頼みごとをしても巨体を揺すって、はいまかしときーや」と和歌山弁で言われたら、もうしめたものである。

自家業へ七十などと思ってず耐えし日のモンペ大事にしまっとく

早くご主人と死別して、世の辛酸を嘗めた人ゆえ、女ながら肚が出来てる。呉服屋とい人ゆえ、女ながら肚が出来てる。呉服屋といれ、女系家族の印象が強い。は、女系家族の印象が強い。な子さんと敬子さん、ともに女医さんでいたっしゃる二人のお孫さんから、私は殊にそのような思いを抱くのだろう。銀食器少女はまるい夢えがく

集『万年青』跋文・橘高薫風)

試験から試験一途な孫の旅

▼次回は「戸田 古方」

(句集『千亀利』序文·中島生々庵)。

利』 = 昭和53年 = あとがき・高橋操子)

く川柳のお陰と思っています」(句集『千亀

柳が教えてくれました。今日あるのは、全

を正しくながめ、反省しながら進む心構えを様の句を読み、また作句するたのしさ、物事やるときがあります。どんな苦しい中にも人

よくやったなあ、とひそかにわが心をほめて

柳籠裏三篇研究(+六)

大野温干・青木迷朗 岩田秀行・紀内恒久・西原 亮

鈴木倉之助 故岡田 甫

266 ぼんのくぼかき~~伯父と正燈寺

青木―「盆の窪」はうなじの中央のくぼんで

苦労人の伯父さんのお供で正燈寺行に従うされに期待をかけている。

概念が、江戸の文芸には見られる。 伯父は、親父と違って大体、粋人という一般説のようにてれている場合の動作であろう。

岩田―異見あり

伯父がわせたであきらかな紅葉也 二35 信父が来てとかく他人の飯といふ 六9 伯父貴からちょっと来やれハいやなきみ 伯父貴からちょっと来やれの飯といふ 六9 「〇27

りで。 「ぼんのくぼ」をかくのは、意見を聞く時の 「ぼんのくぼ」をかくのは、意見を聞く時の ・ 主題句も、伯父に意見をされながら、正し 主題句も、伯父に意見をされながら、正し

鈴木―本ものの紅葉狩です。岩田氏御明解。のとしてある。

267 引越の一日た、きつける音

青木―引越の時、不用品は言わずもがな、ま を釈なく処分したり、叩き壊したりする。一 会釈なく処分したり、叩き壊したりする。一 となく処分したり、いき壊したりする。 したたきつけるとは、不用品も随分と溜め 込んだものである。

かと思う。 はたきで引越荷物のほこりを払うのであろう かと思う。

いのであろう。
の職の置き所などで、ガタビシと音が絶えな家具の置き所などで、ガタビシと音が絶えなり、柱に釘を打ったりする音であろう。

岡田=岩田説の通り。釘をたたく音。 ・ すれにせよ近所ではうるさい。

268 すミつこで将棋国元忌中也

青木―大名のお国元では殿様の近親者か誰か のご不幸があり、身分ある人々は忌にこもる ため、皆謹慎して邸内もしんと静まり返って ため、皆謹慎して邸内もしんと静まり返って

新しく棚をつったり、不要なものをこわした

岩田=「たたきつける音」は、引越した先で

る。 岩田一賛。 を始めたというのでもあろうか。 部屋のすみっこで、人眼につかぬよう、 たとえ国元でも忌中となると遠慮があ いつもは大っぴらにしているのだ 将棋

投じ、

じらされた客の気持としては、

一刻も

岡田―同

姿鏡へおすへをうつし大笑ひ

顔が半分しか映らないので、周りの奥女中が すぎているからであろう 佐藤=賛。ただし、おかしいのはお末が太り 大笑いしたとでも言うのであろうか。 青木=「おすえ(御末)」は一名、 普通の身長ならば姿見へ自分の全身が映る このお末、大女のため、首から上か、 もっばら雑役に服していた。 御端下と

来たといって呼び寄せられ、また散財しなけ

言で、蒲団代だけでも大変なのに、蒲団が出 人の言でなく、三蒲団をつくらされた本人の

ればならぬとは懐の痛い事だと

なり又キツウとも云」(俚言集覧)。よって他

270 けふできた床をとらせるきつひ事

周囲の人々の述懐。不粋と言われても大金を 夜に同衾したいとは、随分と気が急く事だと しい、おびただしい、ひどい、はげしい、な 青木―「きつい」は、 今日出来上がったばかりの三蒲団で、その 物事の程度がはなはだ

> たての三蒲団を床にとらせるとは、 事」と言ったような感じであり、「今日出来 西原=「痛シといふ事をキツイと云 せく事だというニュアンスは含まれないよう 岩田=賛。ただし「きつい事」に随分と気が 早くと逸るのは無理からぬ。 い事だ」という風に考えている。 に思う。この場合、「すばらしい事、うまい 実にうま 甚の意

岡田―同。 鈴木一賛。 いこっちゃ」に当たる。 西原氏の「痛い」と思います。 キツイは関西弁でいえば、

の同人推薦を承認 川柳塔社常任理事会 (11月29日 (豊中市 (黒石市 ·西村黙光 · 佐治千加子(弘前市 (鳥取市

▽井上直次

千葉風樹

>一路賞・各地柳壇賞の平成4年度選考委員

を担当する常任理事を決定

お 喜び を 申 LEV 主

塔 柳 ŋ

中 Ш 林 原 田 本 田 田 \mathbb{H} H 原 田 沢 田 輪多朗 由多香 孝可由 新 子

た 50 · ・ ろ 麻生路郎の作品とその周辺

(25)

橘

高

薫

風

酒盃を手にしての興行である。 進行解説しているがそれは省略、無論のこと 録しておく。発句から揚句まで川上三太郎が 動号で紹介した志保原三吟は珍しいので記

ギヤマンの切子に映る昼さがり お祭りが済むとそろそろ棚を吊り 河郎の夢も流れんおぼろ月 或る時は音一つせぬ新世帯 これやこの襟足で売る一ト盛り 常夏の花にも見える暮し向き 遠出髷青葉に染まるこころもち 古り住んで朝な夕なの溝の色 嵐の庭にこうろぎを聞 橋ばかりなる雨の深川 隅田の春のみんな風邪ひく 亭主に似せる女房の筆 水打つほどの日を余しけり 除隊の靴の黴びる下駄箱 五月の庭の月を忘れる ケレオソートの匂うからたち 三太郎 三太郎 古

久保田万太郎とも親交のあった雀郎らしく

戯れに死ねればこころやすからん子よ妻よばらばらになれば浄土なり

での発言が興味深い。 路郎も気力をふるい立て月評会に出ている。 路郎も気力をふるい立て月評会に出ている。

ずに、 う感じが薄く、俳句の方では他の人間は居ら と思う。それで僕は詳しくは知らぬが、とに を感じたり、物を見たりする様な気持がある 独りで物を感じたり、 俳趣味があると思う。 と言うのではなく、 ものであるが)それを強めて行くと、 もこういう気持で句を作りたいと願っている れど、それに近づこうとすれば、勢い今言っ 角詩に近づくほど川柳が良くなるとは思っけ 味に動きつつあるとは思っていないんですが のではないかという感じがするのである。 しらずに俳趣味と同じ様な立場に外れて行く 紋太――僕はいつも路郎氏の句を見て 自分一人が存在している様な心持で物 ――僕自身では自分の句は決して俳趣 句に表われたそのものが俳趣味だ 句を作る態度に僕の思う 物を眺めたりするとい 川柳には何処となしに

> す。尤もそのために私が客観句を全然排して 想、自分の心の動き方、そういうものを詠ん うした御意見が生まれたのであろうと思いま 43 成り作句数が減って来た。これも止むを得な いるのではないが、 ければならないというのが私の句の行き方で ない様に十分気をつけて主観の句や主観がか 謂小主観の句又はそれに近い句に堕ち易い弊 り紋太さんの御意見では従来の川柳が主とし い。そして興味中心的な句が減ったために可 しかも、それには人生に深く触れるものがな で、その中から第三者に共鳴して貰いたい。 った句を発表しているのである。で自分の思 があるから、私も出来得る限りその弊に陥ら 下手に作れば必ず自分にしか分らない句、 す。主観句や主観がかった句というものは、 僕の句には主観的な句が多いという所からそ て客観的に詠まれている。それにも拘わらず してそこに始終悩みを感じているのである。 て私の好きな川柳の味わいに遠のく様な気が た孤立な心持に進まねばならぬ様な気持がし 路郎 事だと思っている。拙吟を例に私の説を補 たい。今年の八月号に「生の疼き」と題し、 今のお話はよく分りました。つま 私の句には主観の句が多

なりをして頂きたいと思います。 その点をご諒解の上でご批判なり或いは鞭撻 思うのである。紋太氏の主張されている客観 した様な意見の下に進んでいるのですから、 て拝見して居りますが、私は先程から申しま あるならば、私と同じ道を歩いて頂きたいと ているので、決して第三者に強いる訳でない が、私と同じ様な感じを呼び起こされた方が る。それが為に私はこうした態度に歩み出し ないという事は、詩としてどうかと考えられ 自分の思想というものが稀薄にしか伝えられ や写生句ばかり詠んで、自分の心の動き方や いのでその間にあって、単に客観的な穿ち句 ないという確信を持っている。人生は誠に短 感じた事がそのまま伝わらないことは決して ことを考えると、決して第三者に自分が深く みを持って、それらの句を批評して下さった を読んだ第三者が直接又は間接に可成り親し ている句だと考えている。同時にそれらの句 よって表わした詩として、多少の深味を持っ な句であるけれど自分の真情を川柳の形式に というように句の表面から見れば、甚だ平淡 殊に紋太氏の句に就いては常に敬服をし 俺の子というのがあっておそろしく

> 作るということはいけないと思う。第三者に り、真理であろうが、誰かに見せる為に句を はなく、作った句を第三者に示すということ 見ている場合が少なくないと思う。(第三) き方が顚倒していると思う。 理解せしめんが為に句を作るという態度は行 のは誰かが見てくれるということは事実であ は第二義的なことである。路郎氏が真剣なも 見えるものでも作者は可成りな興味を持って なものであれば単なるスケッチと第三者から を余りに狭義に解釈して居られるのではない 氏は沢山な詩を作って居られる。紋太氏は詩 人間が詩を作るのは発表せんが為に作るので れて句は成り立たないと思う。句として相当 かった句はあるであろうが、主観を全然はな かと思う。(第二)主観がかった句、客観が 太氏は詩に近づけば云々と言われたが、紋太 つの事が思い浮んで来ました。 (第一) は紋

よいものならば、或は第三者の共鳴を得なく です。 えある世の中である。若し発表をしなくても んで墓を残し、死に先立って葬式を出す人さ から行けばそうあるべきであるが、人間が死 いて人間欲を無視した意見だと思う。純理論 (第三) は素人氏の意見は少し極端に走って 路郎 (第二) は言うまでもないことです。 素人氏の言われた(第一)は同感

> のである。そう私は考えている。 或は他の詩型を借りて、その真情を吐露する ある。そこに発表欲が生じて或は川柳となり これは人間の持つ欲望とは相容れないもので 裡に或る至情を礼賛すれば足ると思う。然し をリズムカルに嘆美し、或は大いなる咏嘆の ても良いものならば、我々が野に立って夕陽

わがままを父特権と思いいず

され、七十八名が参会、路郎は次の句を詠む。 と、いよいよ確信を得たように推察する。 ある句」とはの命題が、雑詠と主観句にあり 川柳雑誌社各支部連合の御大典奉祝句会が催 長男アートさんの死に会って以来、「いのち 吟、主観句と客観句の軽重を計る作家意識が、 この年の十一月五日夜、日本橋倶楽部で、 右の月評会の路郎の発言から、雑詠と課題

新年号に「船出」と題して再出発を期す。 いる。そうすることが僕を買うてくれる人々 方へも新年号には是非何か書きたいと思って 下働くべく考えに耽っている。同時に雑誌の る。しかしいつまでも遊んでいられない。目 の第一の義務だと思う。と書いた路郎は、 十二月の編集後記に、「私は毎日遊んでい 風すこしあれど船出の四十 貧しさのながながしくも四十一 病んでいる身にもかどまで出て祝い

素人(岩本)――今のお話を聞いていて三

人吟 高 杉

同

12月号から

鬼 遊

は人間愛だと考えております。 勢の問題と申しますか、その基本になるもの 私の川柳観と言いますか、川柳と関わる姿

味が含まれています。 でいますが、どれもが抽象的で、いろんな意 の何れもそうでありますように核心をつかん まれた人間詩である」と言い、相元紋太氏は 「川柳は人間である」と言い、麻生路郎師は 人間陶冶の詩である」と言われました。そ 堀口塊人氏は「川柳はあくまで良識からう

門を通過することなしには、一歩も前進でき ないものと信じています。 識することからはじまるのであって、この関 産物であると思います。経験はものごとを認 ますが、川柳は空想の産物ではなく、経験の 「生きて来た堆積だ」と書いたことがあり

ろがあります。 これは歌のこころですが、川柳に通じるとこ 働きでもある」と、本居宣長は書いています。 と取り巻いている<物の意、事の意>を知る れば足りる。それは同時に<情>をしっくり 「あるがままの人の<情>の働きを、極め

蜘蛛が糸張る高からず低からず

現は、小虫ならぬ私を捉えてはなさない。 誰に指示されたものでもない。本能と経験か に飛び通う中空で、営々と網を張る作業は、 く者の知恵である。蚊や蠅などの小虫を対象 らの英知だろう。「高からず低からず」の表 目的に従って方法を巡らすのは、生きてゆ

何の心配もないのが恐ろしい

不安が大きい。 平穏無事な生活だけに、ありがた味が深い。 の遠い茨道を歩いて来て、やっと辿りついた める。「何の心配もない」だけに、もしやの 「好事魔多し」のたとえが一瞬、脳裏をかす 若い世代にはこんな感懐を覚えない、苦難

七十五これほど半端な年は無い

年十二月号に、工藤甲吉氏の「八十がふんば ある。作者のうめきが聴こえてくる。本誌昨 ったとて知れている。の句がある。共に老い 数詞もこのように詠まれると、磐石不動で

怠けたらあかんと庭の草が伸び

てますます盛んなることを祈ってやまない。

その過ごし方に戸惑うほど、身についた習慣 忠告である。しかし週休二日制になった当初 ない話だが、勤め人にとってはありがたいご そうだと納得しないでもない。戦後働きに働 は心まで染みついていたのである。 しかし各国からそれを責められる。割の合わ いた結果、経済大国と言われるほどになった。 言葉が労働問題として新聞記事に載りだすと でそれを美徳だと信じて来たが、「過労死」の 日本人は働きすぎだとよく言われる。今ま

吊り橋の真ん中 保険かけてない

物種である。危険に際して「保険かけてない」 もしろい。 ひらめきは、 ない。保険の有無にかかわらず、命あっての も病気も不意に訪れる。自衛しなくてはなら 戦争はなくても危険は充満している。事故 人間臭い計算である。そこがお

ふと夜中手を心臓に当ててみる

見ると心不全など心臓病による死因が多い。 そんな不安を抱くのは作者一人ではない。 保険の有無に関係ないが、新聞の死亡欄を 強

間味があってよい。 がった句よりも、弱点をさらけ出した方が人

保護者交替夫を守る番になり

ことで、日常生活において口喧嘩の絶えない らが保護者になってもおかしくない。それが 宿り、お互い離れ難くなるものである。どち 夫婦であっても、何時しか二者一体感が心に に絆を深くする。惚れた燃えたは若い時分の 長い歳月を経て夫婦の情愛は徐々に細やか 宮崎シマ子

似た者夫婦貧乏神に顔がきく

計算はうまいが金に縁がない 池しげお

バブル崩壊の巷は泡踊りの最中である。招待 金に縁のない二句を並べて申しわけない。 島、諷云児

おはぎ届く 忘夫忘れる程うまし

席でゆっくりご観覧ください。

と、テレビのコマーシャルが言っている。正 かし、川柳の上ではご心配無用です。 直に言うと、世間の人は変な目で見ます。 「うまいものはうまい、そう思いませんか」

新米も秋刀魚もキラリ秋が好き 小島蘭

だけに親近感がある。結句の「秋が好き」の 断定が直截簡明でよい。詩人は秋を愛する 秋天が展ける。どちらも庶民的な食物である 「新米」「秋刀魚」と来ると、高く澄んだ

肥満度はサンマにまかせておきなさい

る。女女しくないところがよい。 正に食欲の秋である。見事な開き直りであ

全自動何か物足りないお前

に大切なものが失われてゆくように思う。 四十二基が稼動している。便利さだけがしあ か、不安がないとは言えない。便利と引換え わせではない。安全性は保障されるのだろう 現在、日本国内で原子力発電所は、十八か所 砂

とり敢えず机の上を片づける

たない。平明な一句に複雑な混沌を見る。 る。こんな思いにはコンピューターも役に立 間の緩慢な動作の一つに種々の思考が錯綜す 激しく回転してルーレットは止まらない。人 これから何をしようとするのか、脳細胞は 新家完 司

いやだとは一度も言わずはずむ毬 小野克枝

表わさない毬の無表情が哀れである。じっと

こんな毬だった自分が見えてくる。感情を

はまたはずんでいる毬になっている。 していると波が押しよせて来る。次の瞬間に

負けの込む胸でざくろの実が弾け

ザクロ弾けて己の馬鹿をまるだしに 政 岡 日枝子

これは毬と違ってざくろだけに感情が鮮や

するだろう。時にはいさぎよく弾けたい かである。馬鹿と言われようが、気分は清清 ここに住みここが好きですここで死ぬ

句

次の世はお前の好きにしていいぞ

が持てる。死の向うが明るい。 共に死を扱っているが、愛情があって好感

海が見え川も優しい顔になり

味わわせて頂きました。 をゆく。海が見える頃には心も洗われる。 葉を道連れに、流れは今日も知らない町や村 何度目の冬を数えることだろう。木々の落ち 多くの方々の「生きて来た堆積」の一面を 人生は長い旅である。春、夏、秋、そして

白線をはみだし森がよく見える

この一句を借りて鑑賞を終ります。

先 一

晴 主

花

13

to

3

風

12

漕

to

手

6 先 に

た

<

h 7 知

8 0

0 3

主

生 3 切

#

切 咲 あ 3 5

3 1 る

結 辞

命 61 玉 7 茶 1

溢 T 賓 魻 0 な

0

数

7. 7

罪 3 泳

ta

水

音

水 17 X

0

母 n H

0

7

守 天

阳 12 H

た 0

> 10 15 P かい 持 1 湖 80 To

to

は 13

運 To

は

あ

n

対 Ш Á 枯

岸 茶 石 葉 氷 書 3: 0 碗 畑 た

は

1)

力

to

本

い咲

花

散 猫

0

T

輪 40

去

な 焼 0

7 落 に 12 ŧ 読 天 1.

ば 葉 4 引

背

かい II n Y ^ П

h 重

2

す

る

同 人 特

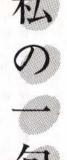
集

か 世 片 な 紀 肽 枕 妻 4, 元 子 頼 気 規 2 To 0 7 F. 城 今 H ル あ 飲 2 II to 2

辅

祭

0



河 和 和 内 和 大阪 大阪 長 大 高 歌 島 歌 歌 岡 中 阪 尾 Ш 槻 根 Ш Ш Ш 県 市 市 市 市 市 市 市 市 市 滝 谷 桝 JII IE. 野 水 西 児 西 宗 島本村粉 村 本 島 尾 村 北 下 蕗 水太千 早与 真 吟 雄 茂 몸 云 代 児 児 津 客 史 風 平 翁 苗

耕 微 文 眉 他 お 間 紐 お 駄 子 秒 3 君 義 負 自 主 1+ 動 盲 書 延 切 目 が 針 1 理 # X 3 画 婦 が ば だ 2 な 1 ti. 代 0 0 UF 2 揃 像 かい C な 10 _ b 父 に 10 + 6 た 3 2 30 11 L 13 あ 6 0 13 n は L が う 勉 7 凧 0 は う 笑 に 3 知 果 0 上 思 誇 を な 残 鎧 強 U 白 顔 刺 b L Y 勝 n よ 3 ず 手 着 手 月 慢 ż 10 L t を n 言 た な الح ち 今 n 心 to て to 次 3 0 < る 3 か L 礼 第 敵 温 0 身 か H 11 味 白 1 待 0 細 b H 続 に か 城 智 構 な to 所 1 に 寿 3 0 ち 1 13 ず 0 1+ 1 味 12 かず 信 ž F. 13 在 3 逢 母 7 ぼ 6 小 10 軽 7 3 な 意 方 聞 2 Va 加 う IF. あ 12 0 豆 糠 Us 10 1 3 To 梯 に 識 独 筆 H を B す 靴 か b す 子 行 襟 3 す 楽 す 者 如 n ta 酒 < る る 3 よ

和 寝 歌 岡 香 香 海 高 屋 香 出 尾 治 南 知 路 治 Ш Ш JII JII JII JII III 子 雲 市 県 県 県 県 県 市 市 市 市 市 市 市 市 矢 桜 時 近 池 I. 11 高 新 津 # 宮 越 赤 大 木 袁 八 野井末藤 内 西 宅 JII 原 藤 崎 村 橋 III 守 E 菊 葉佳 千 吟 明 千 TF. 多 柳 保 か ひ 白千 万 賀 お か 雲 笑 n 州 ŋ 子 子 子 伸 峰 水 野 香 秀灯 途

直 批 病 瓶 父 ī 十心 お 笑 シ急 手 T 檄 7 4 海 H h 12 室 0 0 10 +: は 風 + 流 傘 は 曜 文 逝 12 0 n 文 呂 中 足 0 中 死 \$ 通 吉 > 下 平 3 3 \$ 続 0 0 字 デ 12 0 窓 0 角 0 7 場 ŋ 12 干 3 休 H 7 _ 凄 幸 3 0 船 K 食 並 無 0 ば 1) 運 残 波 8 め 馬 せ 広 母 ~ ~ 父 7 10 は T 命 3 な だ 12 X 頭 かい 大 7 た 0 7 子 長 \$ 共 私 李 観 な 女 L か か 0 慕 3 3 な 4 句 夫 0 男 嘘 ii ま b H の音 0 0 3 L 夕 妻 帳 2 嫁 4) 老 13 話 体 ż 学 香 水 天 か 夢 定 To 茜 H は 7 私 聞 き 溜 0 0 ば 後 職 h 校 を * 2 き 焚 桥 満 から お 10 ま n 水 ŋ 调 2 3 13 ま 子 去 ち 見 置 12 3 3 Vi L 言 居 0 B < L ょ かい 足 3 Va L 驕 な 30 う 5 3 2 う な 有 n 7 n た 方 き か う あ が 3 に # 3 3 る t n

V3

名古 尼 尼 宝 尼 西 鳥 静 美 奈 桜 出 呉 和 出 塚 临 崎 条市 屋 取 岡 阪 禰 良 井 泉市 西 県 市 市 市 市 市 県 県 市 市 市 市 市 市 市 市 天 岩 奥 吉 春 春 片 越 津 蘭 出 安 板 植 西 小 松 小 平 白 次正本垣 本山 田城 城 上村村 田 田 岡 池 本 \mathbf{H} 笑 枯八 獏 ふ 弘千雀 年 明 夢 洛 玉美 武 英 L た 房 智 庫 げ 重 踊 だ 坊水梢 子 女代 子 沓 2 道 梢 子 酔 詩 酔 お 子

幸春 均 満七 秋 病 先 再 背 別 U 合 面 反 傷 未 強 霖 完 等 to 坂 2 せ 月 床 輩 U 格 白 0) 論 付 n が ょ は 法 足 な 13 П に C 0 は 0 孫 0 か 0 道 n 10 気 n な 主 白 励 柿 ŋ 自 丰 母 話 7 ぬ 絵 かい 1 分 男 7 主 0 大 n ti を 叙 グ 12 に 行 + 距 給 途 ま \$ K 0 意 実 き 3 伝 7 嬉 き 離 お 1 夫 麗 中 方 欲 U < ti 茶 先 勝 合 で む かい コ L ス か 婦 K C かい が 7 な を 3 2 0 L 僕 祭 あ 決 ~ V 1 6 で 涙 す 7 t ŋ 出 7 U 0 0 は n 1 寸 8 動 森 彩 3 ず 7 虹 7 う 死 浴 古 5 な か ta に 1 3 < 0 な 13 忘 6 7 0 な 0 か に 衣 本 淦 話 木 独 0 塗 7 ず に ŧ 10 織 消 H 紅 着 屋 B n n Li な n 言 13 す ż 3 3 酔 L せ 言 P ż 0 0 D 14 to 0 3 消 7 色 文 す る ス づ 之 111 3 け か h な

寝 和 鳥 鳥 岡 屋 倉 加 和 唐 新 歌 大 米 出 # 取 取 津 JII 中 Ш 智 宫 木 子 JII 吉 H 阪 Ш Ш Ш 県 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市 弘 Ξ 斉 仁 大 小 藤 青 松 松 KK 荻 稲 渡 細 石 井岩 津 呂 木藤部矢林井枝垣上道玉 村津下川宅野 葉 辺 公つ鮫冬菩魯四十ト正鉄花 柳 博 満 観 之 虎 Ŧi. つ X み乃子狼葉句木品郎郎子雄治子郎友江 子

善 千 お 足 真 今 H 補 L 筋 齡 まー 水 詩 大 L た 帰 直 聴 八 0 H 仙 は 郎 2 日 H Z ル あ 0 器 n 7 4 \$ が た 本 + す 花 誕 バ b 流 悪 通 1. # 引 12 又 旅 を 1) + n 峰 2 か 4 き 生 外 L 3 7 竹 迎 明 7 12 運 K ズ 妻 葛 勢 2 母 思 踏 藤 白 之 掛 き H 悟 せ 落 T 掟 4 心 柿 鬼 な を 深 は 7 装 H \$ 0 ば 下 が 10 は 2 L 3 3 T 又 字 守 き み. 7 束 決 T 12 0 F. 狂 う き 10 な 妻 背 う 名 詩 かい 3 かい かい は 意 逢 か 宙 落 は 3 0 \$ 太 休 は 0 置 b 知 馸 42 割 0 7 6 我 下 かい 0 亡 7 E 踏 惠 H 7 2 杉 0 ---孤 う 12 FI 1 12 隅 2 袋 抜 足 T 木 母 夢 那 独 要 眉 H を 孰 F. 人 今 to H n V. 0 U 智 b 連 3 n 0 3 星 2 ず n 打 7 位 3 が 3 H 0 かい 0 61 置 b 滝 あ 3

3

羽 和 富 岸 和 田 T 青 倉 姬 曳 竹 歌 貝 西 出 鳥 鳥 大 倉 取 取 野 吉 塚 宫 関 森 田 Ш 阪 原 Ш 林 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市 工芳野石 時 宮 黒 片行 瀬石 人 西 堀 堀 गा 田 奥 田江江井中谷広口田 出 天 尾 川 藤 地 田 倉 見 侃 芳正庸透弘一克 真 智 千 六 甲 狸 素 芙 翠 身 恵 郎 流 佐 太朗路子砂子代太洞吉村郎子 昌 子 朗 佑 記

研 親 111 7 抱 准 恋 男 良 老 響 洒 掘 ---進 刻 8 牛 糸 # 切 < 14 な 2 4 Va き 西勺 n 線 備 主 1 切 越 0 を ż 3 中 な 夢 子 論 L 女 師 あ 8 下 n 6 歯 1 11 T な # よ 12 あ # 3 ば げ 越 7 ぎ 0 2 i 主 10 音 2 は 失 美 To 温 n T ż 貼 石 た 母 姑 10 票 2 7 は B 4) < 鎌 3 0 1. 12 か 大 自 2 か 0 0 陽 足 n 2 う To 13 話 Vi 1 力 T 命 h 笑 渦 風 h な 見 な か ば n 餇 T 額 E かず 0 は 友 Y ン 余 て ょ 3 ż 消 彩 見 7 励 から 李 不 + ば 吹 な か 牛 13 之 徳 は き ŧ を 逢 2 3 7 良 ま 響 Á b 1 b 12 き な 认 す 1 n # IIX # 12 3 か 7 12 Va 0 0 主 12 言 握 W な お 万 あ 杜 お 1 3 h 妥 n 2 0 13 朱 ż 手 1 色 IE. 歩 7 甫 た 嫌 n 茶 11 協 0 M 13 母 1 す 1 月 計 に す 10 0 鳥 (" な 2 香 3 0 # 3 n 死

岸 和 和 米 和 和 米 屋 歌 鳥 鳥 和 大 大 弘 歌 弘、 大 倉 阪 阪 尾 前 子 H 本 7 取 取 敷 田 田 Ш 前 111 阪 Ш 泉 市 県 市 市 府 市 市 市 市 県 市 市 市 市 市 片 清 真 濹 堀 神 内小土 岡 金 籾 H 肥 金 茂 In 喜 江保芝谷橋井井山上辺後 山見 H 内 H 部 H 英灸 和 俊 裕 千 光 拓 登 美 B 文 夕 ょ 志 志 香 2 す 春子生代千 螢お秋隆一六 子 子 子 進 う 子

and the contraction of the contr

子 新 毎 野神 _ 天 月 7 IF. 布 惜 畑 自 7 出 Ŧi. 者 オ + 育 春 H に 0 器 1) 直 寸 0 惚 ス 3 百 産 向 7 な 咲 択 K な 干 主 花 庭 0 n E 幕 羅 う 新 洗 雲 す 0 V 法 = 人 n T ス は 分 遙 終 た 10 7 に 衵 冬 河 > To 7 八 社 頂 な ti か 0 な 0 許 内 2 な グ 迫 本 戴 に 死 方 き 笑 13 H to た 彩 づ 1 き 偲 音 3 音 B 82 美 0 が 0 n 眉 な け 白 بح な 主 頭 n 站 た が 1 2 2 7 慢 # に 溶 7 2 かぎ き 7 東 10 す h B 12 解 Va 聞 4 孫 1 飽 ば は 10 슾 Ш H 4 な た 今 気 語 か 3 地 かい き に ず \$ 1 か 絵 る 7 に 付 X か 1 0 0 3 来 IIII 2 慣 h 0 堤 あ 出 1 Fi 3 Da. 花 汁 3 E n M n 7 ŋ 3 + な だ 磨 Vi Vi 7 る 3 14 7 脳 H 歳 < 12 3 1 来 う から 0 ta 3 た 中 0

岸 和 和 和 大阪 大阪 大阪 西 31. 高 和 奈 歌 歌 宫 田 前 尾 石 良 田 取 Ш 中 \mathbf{H} Ш 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市 寺 山浅町 島 村 神 清 北 = 宮 新 細 久 计 夏 沢 下 野 田 Ш H 磯 水輪 口家 JII # 家 本 川 美 は 富 2 房 達 勝 利 通 笛 完 稚 代 英慶 志 津 0 仕

彦生司代南男

子 子

留子子美武

子 保

里

子

3 **一 こ** 絵 デ 7 洮 握 湖 書 君 定 渡 草 1 余 金 地 # # な 7 位 n 笛 湧 唐 1 復 1 婚 球 から n Va H 0 置 終 な な 草 1 1 に に かず 汗 7 飯 親 鳥 な 10 津 1 ż B う ま B 12 吹 7 お かぎ 12 1] 晩 1] あ 終 は 3 ナギ 本 母 た 10 改 # 孫 注 " 酌 " 2 3 老 2 割 1 探 音 居 橋 T 札 渡 15 が E が 70 _ L 爪 1 誘 0 拘 1 す 野 n た 砂 袁 2 だ お う 7 Va 0 3 0 3 0 気 は たぎ 短 下 to 新 浜 1 児 # 4 H Ш かい 広 T 原 を to 17 茶 牛 か 千 伸 B 逆 2 に 手 h 歩 0 1 かい 0 0 万 L To 長 主 # 0 2 0 1 き 描 夫 7 15 M 4) 3 3 だ 婦 7 n 草 富 歩 森 輪 3 2 b 春 1 香 7 42 言 か な 7 17 箸 思 千 ± 計 0 かい か t 0 かず 3 た b 10 X な To 7 t 3 案 里 中 和 な 3 3 風 今 n 汗 開 良 う 邪 7 古 む が 花 n 42 12 3 3

咲き

寝屋 岸 水 和 富 歌 奈 唐 ± 茨 鳥 * 和 島 唐 唐 野 子 良 津 木 7 Ш 子 津 JII 宫 取 H 根 津 津 市 市 市 市 市 県 市 県 市 市 市 市 市 市 市 市 浜 柴 岩小福 榎 井 堀 吉 菅 田 長 浜 渥 堀 林 光 久 H 谷 端川 # 中 JII 本本田美 井佐砂元保 L: 春ち義英 弧良露玲ダ 白 み 正虹 吐森三寿と 亜 专 千 > 0 弥蘭よ美 子秀江杖子 吉 7 3 敏 生 男美 子

尉 昔 嬉 12 還 太 つ小 住 咲 満 に 遺 寝 花 3 + 1 b 謝 暦 L 陽 B 2 42 願 期 B 書 転 15 7 バ n 料 か 7 0 12 1 B 10 馴 8 な h 6 7 # な 2 書 ル T h 主 で 0 義 n 10 走 会 0 かい 来 7 紀 が 行 男 か だ F 厳 理 7 3 n 1 Ti to 逝 0 が 息 容 1 1+ よ 0 L 風 0 続 訣 暇 弁 故 h 6 3 괌 た 4 子 丽 2 2 果 4) 17 7 0 n が h. 13 郷 3 か T 子 3 0 b 0 父 # to 1 桜 た る あ 地 揃 0 寸 検 猫 7 視 ば 下 1 0 2 L 3 百 准 2 7 球 天 診 野 か な 1 Us かい 肩 た た 10 散 度 備 愛 た かい 気 to 受 書 3 に 6 3 車 彭 白 3 石 逢 ン が 予 b あ 17 n 1 コ 10 如 船 0 10 を 0 7 あ 句 0 b 報 に 確 3 便 3 坂 足 4) 3 が 聞 准 な 7 せ 먥 か 父 n な 袋 3 1 b to 10 創 10 備 3 < な n な 12 7 1 4 3 n 脱 寝 な Va b る

和 藤 岸 t # 吹 歌 大 字 鳥 八 八 鳥 米 和 米 弘. H 尾 IlI 阪 部 取 星 尾 取 7 子 前 治 庫 中 田 県 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市 111 吉 垂 渡 平 乾 鷲 宫 小 林 林 古 政 波 月 溒 野 吉 多 見 高 出 井 部 H 崎 林 野 出 野 原 III 坂 H 美千 希 3 実 喜 3 由 瑞 荒 77 H Ŧi. 宵 П な あ 久 寿 2 与 多 枝 楽 7 子香枝介 峰 房 子 美 男 志 章 庵 子 7 明 住 £

八 沙 II 輪 _ 雲 私 今 幸 た 序 個 水 - + 折 ŧ 件 折 合 分 羅 0 0 流 走 な H # 列 平 坪 + か Ħ n 外 は 3 4 牛 13 に か 7 0 K 6 6 0 0 0 0 き な 許 0 花 7 で 2 7 ŧ 出 B は 彼 旬 坂 方 に П 欲 は 白 h 0 牛 3 2 3 離 Ŧi な T 1 色 To to 由 to 時 き 出 た 扭 n 12 求 荷 7 宿 拘 かい 2 あ 広 1 か 14 明 期 h 13 水 豹 祭 h D do 物 # 点 が * 2 1: H X 穑 0 L 服 1 7 b n 0 0 3 が 3 軽 な 0 0 会 絆 80 性 か 0 10 1 18 種 かい P で 夢 0 to 3 か ま 旅 額 ta to ŋ > 子 な 1 絵 体 ž す 深 洗 手 4 播 4) 内 かい 坂 石 1 かい 10 掛 0 3 未 う 合 有 1 L あ かず 靴 17 6 1 3 見 0 温 ż 飲 n 咲 縫 が持 T 3 から 3 10 来 哀 3 to 1 う 4 な 椅 0 Us 子 差 10

和 和 大阪 雏 鳥 守 子 取 中 原 Ш 阪 吉 取 吉 П H Ш 知 Ш 面 市 市 市 市 県 市 市 市 市 市 市 市 本 渡 西 淡 結 栗 青 田 宮 江 丸 谷 矢 F JII 茂 H 谷戸 津 間 辺 路 城 村本口山垣内 田竹 理 中 H 原 結 よ 満 艷 M 君 春田 き 欣 明 ょ 史 寿 俊松 高 3 津 ŋ 史 1 惠 2 光 津 子 子 鶴 子 子 好 子 路風 実 子 步 子 子

10 E 箱 微 1 花 雑 1 男 百 # I 渋 霧 会 脸 府 主 な か 軒 間 屋 草 間 答 から 合 は 閉 70 滞 占 0 11 To 誹 開 ti Ħ は 0 な ż 炊 包 ま 重 12 10 0 D 中 0 売 許 す 3 謗 12 かず To ŧ 花 T う 尻. 13 1 絞 合 3 D n かい 7 X Vi あ 母 3 た 母 12 0 H 3 7 間 2 は 7 水 0 3 2 0 7 老 飯 0 便 似 :3 7 合 母 12 > 洒 ++ 0 吉 杯 1 h 包 海 妻 に 在 利 合 明 は 間 な 3 2 な 在 す 0 な な から が かず は 2 To 3 ギ n 1 10 3 普 7 注 家 る 仲 n 味 す 病 居 骨 X 頭 > かず 地 ぼ 海 ぎ な 上 4 直 ば 方 3 h T かい 夜 脳 通 グ 見 \$ かい 独 確 n 忘 0 1 退 老 ì 見 4 0 L あ き 0 0 10 n ぼ は か 0 n だ n 3 底 お ž 10 11 12 7 音 人 古 洒 め h 3 る す ば 達 来 伍 T 底 ta h n る が だ 3 2 老 n 3 な h

Va

C

岸 和 寝 藤 和 寝 和 歌 屋 # 大 唐 屋 出 鳥 今 出 合 鳥 歌 有 # 图 吹 H Ш 取 JII 寺 阪 治 雲 取 津 JII 敷 Ш H 雲 Ш 阪 \mathbb{H} 市 県 市 市 県 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市 笠 福 後 谷 里 西 野 竹小土木松 吉 筒 北 JII 西 浦 原 出村治野橋本井岡 \mathbf{H} П # 田端 H 村 次小吸楓 克 朱 か IF. 京 ち は 3 朴 綾柳 柳 3 宏 か な 2 晴 子 男 路 II. 楽 子 枝 お 夏 文 竜 水 L め 7 子 子

10 4 縁 春 3 71 半 舌 II あ 女 合う 自 X 1 神 初 カ 3 0 1 沂 B 7 # 打 8 0 堂 関 分 n 牛 4 棚 ラ H 3 紀 10 き 3 1 n ち 6 X な 13 史 0 薄 7 1 0 3 n 賀 鶴 6 To も 1 3 0) n 墓 今 12 中 洣 ル 出 な 2 状 2 は -7 0 素 ŧ 7 1 H 卷 II 駆 な ż 女 な 面 額 ち 歳 0 額 \$ ŧ Lo H 花 3 # 0 結 群 ぼ 0 な 新 戻 10 かい 1 0 10 K 抜 羊 占 産 17 15 会 n よ 主 忘 3 だ 13 0 た 1 6 17 手 來 Va 変 13 0 北 7 2 ま ば 電 n 居 17 に た る 7 な に かい ż 温 締 帰 落 11 0 話 た 7 Va 華 大 10 12 WD 合 酔 减 T 1 花 8 the 行 ち 鳥 妻 主 た 0 0 齣 あ 1 b 7 3 牛 直 3 3 かい かい 吹 あ だ 歯 道 かず 1 4, す 夜 話 き す ぼ 語 好 雪 h 3 12 かい あ 15 0 景 1 0 n き 12 た 13 笑 3 が 15 ち 0 か 輪 7 あ 3 時 11 b n

間

和 和 西 歌 岡 岡 尼 境 鳥 鳥 島 歌 竹 八 吹 鳥 静 宮 Ш Ш 崎 港 根 根 根 Ш 尾 原 中 江 Ш 原 取 宫 H 岡 市 市 県 県 市 市 県 県 県 市 市 市 市 市 市 市 市 北 松 松 Ŧ. H 細 石 藤 福 吉 岡 小 田 森 奥 井 安 佰 原 本 原 中木 田川 原 井 島 村 本 中 H H E 本 た 寿 理 歳 清民鈴 清 正 元 桂 蘭 能 2 照 晃 ず 子 江 瑛 薫 栄 泉 子 江 子 香 幸 風 水 坊 生 子

淀 大 鬼 石 U ŧ X 幸 常 底 魂 順 2 あ知 花 \$ 履 t だ 識 切 庭 亦 # 辺 な 番 4 b h 束 0 0 去 111 0 望 な 7 1 は に お K 1 ち 慣 13 面 13 0 # h 凄 DU 3 僕 2 記 味 外 牛 見. 風 味 振 添 n 2 2, か 憶 邪 to 万 14 0 あ ま せ ŧ せ 0) 噌 n ż 鼓 n 6 + に ば ば 1 な 3 動 靴 7 0 110 3 To 7 詸 かず 嫁 恐 ま な 1 移 は 7 かい To III 爆 面 to か 比 夫 言 h よ 6 発 な 見 n 7 ~ 私 婦 子 華 今 0 Va L 哉 1 脱 う な 1 7 から 供 牛 L 诱 合 3 I 0 10 0 4, ル 3 き to V か か 紅 継 0 0 \$ 13 仲 等 添 音 7 1 3 な 3 To 明 な # 7 は 0 秋 3 \$ は 12 3 12 な 見 旅 n H 冒 合 < な 持 柘 家 12 な 元 7 消 7 族 0 b 3 61 た 榴 13 0 7 かい Lo 12 化 t to す 古 3 12 6 お 3 す 面 3 な 3 n ま 選 に す

3

泉佐 大阪 島 尼 松 鳥 大 大 宫 根 阪 阪 原 尾 尾 崎 原 取 取 取 宫 市 市 県 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市 県 北 中 中 橘 SIT I 松 小鈴 稲 高 高 黒 玉 河 河 中 久 1 本出木野本杉杉 JII 置 内 内 原 原 原 高 \mathbf{H} 萬 萬文智 節久凡千鬼紫 天 汲 重 月 2 佳 3 b 風 的子子子子子歩遊香 Y 子 笑 子

水煙 抄

一十二月号から

越 村 枯 梢

ゆっくりと歩けば風がみえてくる

くれるかも知れぬ。 さすれば風にも心あって、私の進路を教えて ら辺りで歩を緩めて世の中を見渡してみよう。 たちは一生風の中を走りつづけてきた。ここ 向い風か追い風か、またはつむじ風か、私

苦笑して僕を見ている神仏

や仏は「度し難い人間だ」と苦笑している。 右に左に躓きよろけている。この姿を見て神 生きてきたが、振返ってみると失敗ばかり、 神も仏も信じない無神論者だと肩肘張って 三寸の舌大それた事をいう 草

大川幸子

返しのつかない事を言ってしまった。私の罪 こなす。しかし、重宝すぎてついある日取り 舌は重宝なもので、お世辞も毒舌も自在に

か、舌の罪か。

信じきる母への嘘が汗になる

出来の悪い私であっても、母は私を疑わない。 その母についつい嘘を言ってしまった。それ が流れて止まない。母よ許されよ。 でも母は信じている。私の腋の下から冷や汗 私を最も信じてくれていたのは母だった。 弘.

浪人の息子にテキの厚いこと

前句同様、母と子の太い絆。 下道

子

升瓶立てると男臭くなる

国家を論ずるがよい。この男臭さには缶ビー ほんとうの男はどっかと一升瓶を並べて天下 ルなんか寄せつけない。 男か女か中性か判らない人間が増えてゆく。

呼び捨てをちょっとためらう嫁がくる

も老いた。うっかり息子の嫁を呼び捨てにな と忍従が大切かも知れない。 んかすると「失札な」と叱られるかも知れな い。これも時代の移り変りか、老いれば諦め 年上の縁者から呼び捨てにされてきた私共 狂四郎

貧乏神肩を落すと寄ってくる

沢田きん

て貧乏神の寄りつかないようにして下さい。 かれていない皆さん、肩を張り、背を伸ばし から離れようとしない。貧乏神にまだとりつ

生れつき相性の良かった貧乏神が未だに私

トンネルを抜けて油断をしてしまう

と、誰しも油断しがちであるがまだ先が長い。 ねばならぬ。一つ抜けてやっと陽の目に会う 間違い電話一本あっただけの午後 人生は暗い長いトンネルを数多く通り抜け

勢理客トミ子

以心伝心 電話のベルが鳴っている

もある。郵便の来ない、電話のない日は何と な私にとって電話は楽しみであり、心の糧で て下さい。 つまらない日だと思う。皆さん私にも電話し 「川柳忘却毎日退屈しています」このよう

いい仕事いい顔してるなと思う

中している時の顔には一分の隙もない。これ にいい仕事の出来ている時である がほんとうのいい顔をしてる時であると同時 である。芸術家であれ職人であれ、仕事に熱 私も川柳に熱中しようかな。 人間のいい顔は物事に打込んでいる時の顔



黒 111 選

枚方市 森 本 節 子

忘ほ

れん

市

永

田

暁

風

うるさい 言 1 顔 は書きづら 先は犬がきめてる朝 0 姫お 種 とる蔓に 程くすりのことをきき質 住 V いも 何処竹ばかり (竹林公園にて) 残 り花 のやめにする 0 道 す

行

朝

遺

熊本市

ラスト

タン

ス踊 しく

n

たい

0

は別な人

水茎 他

麗

借用

書

余生とは

11

-ス外れ

てみるもよし 分ない夫婦

から 一の跡

見れば申し

7

犬の

目と目

が合って帰れない

野

昭

代

弱

虫

7

兀

且

の計

大胆に

書

1

てお

姫鏡

挑

掛け合

13

H 美代子

最

後

0

柿

がポトリと落

ちた日から冬

てい

る勇み足の跡

ネ仕 つまでも見

具. "

III

の赤

が乾いて冬景色

クが 掛け

寒そうに居る中之島

幕うらで喝釆聞

いている黒子

生きの 抱 たとこ

血筋ひ

たすら竹を踏

ぞっこんを見せぬ素振りに

味

があ

3

のようにびっくりしてあげる

於井寺市

高

孫 似

が

ひとつ

息

子の

左

利

きたい本音をヒゲがじゃまをする

ルメ料理が一切といの眼が乾いて られ とう 順 に見に 0 てひっそり老いる姉 別れ 来る事 瞬は死を遠ざけて て泣けてくるのです 挙げ 故 ぬ手 現場 かい おとうと 本

広島 市 流

奈 美

子

満潮だ耳朶を揺るがす呱々 戦を重ねまだまだ若くいる 森の深さをまだ知ら の言 葉が薫る双百寿 2 0 声

県 高

畠 五.

月

年頭の誓いは去年と同じ事	糸を持つ人へたのしい凧の舞	強がりの女が持ってた涙つぼ	夢見るように風と歩いている私	無駄な空間等はなかった子沢山	熊本県 大 川 幸 子	とても些細な約束をする枯葉	気が付けばすっぽり秋の真ん中に	秋の訣れを一つ飲み込む鰯雲	秋の日を騙して風に舞っている	首を洗って待ってくれたのは父で	富田林市 池 森 子	人波の彼方を拝む初詣	時止めて話上手なフェミニスト	ちょっとしたきっかけ糸がほぐれ出す	シクラメン冬のなさけが咲いてます	ささやかなおしゃれ初春には初春の紅	名古屋市 藤 井 高 子	ヒロインで出たこともあるレポーター	訳を聞きたい傷が湯舟に浮き上がり	ちょっとドキドキさせてピーポー遠ざかる	淡々と昔別れた人のこと	対抗意識 女 背筋をしゃんとさせ	松山市宮尾みのり
三度目の昔話を聞いてあげ	ひかえめな萩で小さな花をつけ	見る度に曲ってきますうちの茄子	みの虫の誤算は草に宿をかり	山の気を吸えば高啼くもずの声	広島市 森	鍵穴へ噂が流れ込んでくる	耳底で追われる靴の音がする	盃を干して話に艶が出る	珈琲のかおる心の紐を解く	落ちこぼれても美しい故郷がある	砂川市	義理だけの賀状がつづく五十年	夢ばかり追うて独り身過してる	秋空の大きさの中百舌鳥しきり	人の句を読んで頷く秋燈下	気の疲れが眼元に少し夜の蝶	尼崎市 野	ささやかな粗品で長いお付合い	宅急便松茸代り着いた柿	睦まじい言葉聞いてる夫婦鍋	気心がよくて約束してしまい	子育ても終えてパートへ若返る	尼崎市的
											大												的#
					田						橋						瀬						場.
					文						政良						昌子						十四郎

似た顔の羅漢にゆれる枯尾花	いさり火を拾い集めて天の川	野に遊び子供にかえる彼岸花	十字架とステンドグラス光る窓	ドラの音しばしの別れ佇ちつくす	西宮市	内弁慶が母の影にかくれてる	屠蘇気分皆ふっとんで孫産まれ	飾らずに話せる人と旅をする	知らぬ間に夕暮れになる地下を出る	箸習い始めた筆で書き		1	ドルンニン ンニ首に辞りつし	とう すっこう なっしい	つまったプラン王わず句	二の足を踏んだ男の無精ひげ	欲求不満ぶっちゃけている長電話	堺市	カラオケが好きで太鼓も叩きます	それなりに映る鏡へ舞ってみる	ふる里で唄えばほほえむ野の仏	燈明の揺れへ祈りが深くなる	いくばくを生きるに仮面はもういらぬ	兵庫県	
					菊						無	1						桜						森	
					池						H	I						井						脇	
					1						育	9						荘						和	
					N I						子	•						次						子	
好物へ幸せの箸ポンと割る	里がえり一日だけの人気者	前職の辛さを語る爪の彩	雲の峰にちょこんと乗ってる冬の月	尼崎市	はからずも母の形見に虫がつき	年取っていじめられたも懐かしい	五ヶ月ぶりの土産の主に尾っぽ振る	母上の白慢の娘もう三十路	熊本県	最終にのって楽しい旅つづく(句評リレー	あの世での名前はとうに付いている	白無垢へ涙せき切る袋帯	色付いて自己主張するからすうり	富山県	さざ波が流れ安堵の心電図	めきへとるノモ朝の	対かな時とき痛む脳の傷	イハイと返事しなから	前には、	1	のうた老けゆく女を	月は人が数えて譜をつ	福一鶏また一鶏夫婦	柏原市	
				森					岩	Ĵ				島					V	5				大	
				安					切					11					H	1				峠	
				夢立					康					ひか					ð					П	
				之助					子					る					4	-				動	

大阪市	勢理客	客	トミ子	子	和歌山市	堀	畑	靖	子
うどん鉢洗って一人の昼が済む					リフォームをすれば着られるものばか	ŋ			
ベランダで新春を待つ福寿草					苛立ちは空白のない予定表				
あれもこれも足らず師走の忙しさ					和らぎのみなもとだった母の膝				
陽だまりで退屈してる鳩と人					曖昧な返事に期待よせている				
尼崎市	尾	宮	弘	治	和歌山市	玉	置	当	代
祭りの夜 嫁も雑魚寝の中に居る					月下美人咲いて宴が盛り上がる				
いやがらせ私の絵馬が落ちている					捨てがたく又しまい込む衣替え				
秋風に慌てる母の毛糸針					木枯しが吹いて慌てる冬仕度				
門一杯開けて結納待ちうける					出る釘は打たれ初めて痛さ知る			g	
松山市	白	石	春	嶺	鳥取県	奥	谷	彩	子
三日月が刃物に見える冬の窓					肩の塵払い夫の背を送る				
通された部屋に華やぐ見栄の数					喜ぶ老母の顔が見たくて汽車に乗る				
酒くせも知ってる人事課のデータ					うれしい日部屋一杯の花といる				
迷わずに来た定年の門を出る					晴耕雨読ゆっくり夕陽落ちて行く				
大阪市	亀	井	円	女	和歌山市	Ш	П	三千子	子
老夫婦無欲の強さ知りました					帰国して先ず食べたのはにぎりずし				
佐渡おけさ出ると夫は酔うている					宮殿の前はイギリスだと思う				
男は度胸女は涙を利用する					嫌な事ばかりが耳に入ってくる				
コマーシャルにまた乗りました買いま	ました				子に系図聞かれ過去帳出してくる				
八尾市	秦		正	子	今治市	渡	辺	南	奉
可愛いねと言われた八重歯ゆれてます					何もかも知ってしまうとあじ気ない				
血統付きの犬褒め合っている公園					順風満帆つい口笛が出てしまう				
子に賭けた見果てぬ夢も遠ざかる					幻を追うには足りぬ余命表				
命賭けの愛とは知らぬ倦怠期					サングラス手配写真に似てしまう				

は、大子母へ君れる州 鳥の家には少し狭い濠 鳥の家には少し狭い濠 鳥の家には少し狭い濠 鳥の家には少し狭い濠 らしい夫がトイレ使ってる だてれば三日は続く妻の皿 だてれば三日は続く妻の皿 だてれば三日は続く妻の皿 をで金の成る木を買いに行く 中を呑んで仔犬を孫は飼う レンダー一枚になり落ちつか レさへせめて口紅赤く塗る しさへせめて口紅赤く塗る 長 日和おっとり雀と差し向かい 日和おっとり雀と差し向かい を変の、田相撲に深む秋 に発うで、たい、たらしまだできず をで金の成る木を買いに行く とさへせめて口紅赤く塗る 寝屋	画をまだ棄てきれずいる枯れ野	ちっぽけな愚痴は棄てよう月明かり	帆に風の恵みを受けて愛	壺にまだ捨てきれぬ君の思慕	和歌山県 杉 山 精 子	事メモ動き出してる初暦	金賞を付けて哀れな菊枯れる	弁が好きで鈍行乗り換える	の丸を掲揚平和な世が明ける	静岡市 永 倉 柳 華	車 遠い昔の父を恋う	老化現象かな古い話を繰り返す	ヤイムを押し押し襟元を整える	金をいただくたびに有難う	佐賀市 江 口 万亀子	方味を活かし役者の息が合う	新しい風にはためく星条旗	ソプラノで笑いアルトで泣く女	雪の便り土鍋が歌い出す	摂津市 木 下 道 子	あでもないこうでもないと孫の名を	国から友頑張りの句に出会う	身に分で男幹に無する。近一に	たら見扱こ虫しら戻
	仕舞の空の碧さに洗われ	沌の永田相撲に深む	落葉余りに惜しき色なれ	和おっとり雀と差し向か	Ш	しさへせめて口紅赤く途	逢う夜行列車に乗ってゆ	学の雫を残し秋がゆ	口から朝が始まる音を聴	歌山	レンダー一枚になり落ちつか	を吞んで仔犬を孫は飼	で金の成る木を買いに行	想はふとんの中と決めてい	根	だてれば三日は続く妻の	しい夫がトイレ使っ	x	り向かぬ女になった自	島根県	鳥の家には少し狭い	パートで思いがけない顔に	初し靴にした子供へ君とる加	い化はいこともへ羊し
					崎										島					林				
崎 島 林					菜					翠					ち					延				

泣き坂を越えて女のかぞえ唄お疲れの振子は時を刻まない	心をかくして揺れる影法師	鼻ぐすり効いて来たのか軽いコひと口のメモに行先告げてないメモ帖に逢いたい人がひとりいて	私を置き去りにする鳩時計 岡山市 中	濯の好きな隣のお嫁さの足跡だけがある渚	狂想曲遠くで聞いている冬野 出雲市 岸	口下手がムキになるから誤解され太陽と仲良し野菜生き生きと秋深し心の刺も抜けて澄む	追憶の楽しかったことよく覚え	お下がりの机で弟優等生無髪に戻りたいなど欲を言う	岡山県 伏
	本		嶋				木		見
	道子		千恵子		桂子		芳水		すみれ
冬の夜不景気風で増す寒さ信心にこだわりのない初もうで信心にこだわりのない初もうで	主張開	気を入れて冬将軍と向い合うポケットに母の気くばり入れて出るボリュームを上げて木枯し寄せつけぬ	ユーモアの得意な彼に救われる	人混みを遠くに見てる旅の宿卒業に口紅セット送ります	順風の人生だから邪魔が入り鳥取県	雪舞台訣れの涙凍らせる雪囲い寡黙な日々が過ぎて行き	母さんの合図でやっと走り出す	落書きで人気のほどが知れてくる 一件落着やっぱり見たい日本人 でかざる誰も帰って来ない部屋	神戸市
	渡		足		土.		永		木
	辺		立.		橋		澤		村
	杏村		由美子		睦子		裕子		貴代子

一尺の深さを箆で掘る遺跡	指輪が抜けぬ程深い愛ですか	時に邪魔無くてはならぬ影連れて	年金はまだですねえと米洗う	尼崎市	時雨来て語らい尽きずおもてなし	千年の喜怒哀楽を見る銀杏(鎌倉にて)	自分なりの耳を拡げて行く夜長	1)		面垣間見る	夫婦とはこんなに脆い離婚劇	歴史秘め天守の甍天を突く	よく乾く主婦ご機嫌の青い空	姫路市	E	きてい	ちかう人	を押す		見えすいたうそだと思い乗ってやる	孫の知恵を時どき借りる台所	古里が見えると足が軽くなる	任せとけ口癖の夫先に逝き	岡山県	
				吉				ぬ	池					松		3)		Ш					森	
				永					田					本					田					下	
				伊三					寿美										博					正	
				郎					美子					郎					章					子	
女人禁制山ゆっくりと冬に	手切金のそれから女強くなる	白衣脱ぐとやさしい母の顔になり	京都市	ゆっくりと休んでおいで昆陽の池	客もなく梅咲くを待つ老い二人	あの人が小唄習うと言いだした		朝焼けに夢の続きは吉と踏む	並みという線引きがむつ	亡夫を知る人と語ればまだ涙(七回忌)		まる	つの十回五八二五十	あさんの目を盗んでやる大昌	むこうから猫がのぞいている我家	福岡市	気心のわかる隣へ留守頼む	一輪車 少女の足がよく動く	息抜きをしてるかあさん台所	尼崎市	変化球投げて男を打診する	豪邸の柿は日毎に青くなる	時の人も一尾の蟹も二十万	尼崎市	
			小				Ш				芦	i				井				中				湊	
			林				本				田	ĺ				崎				澤					
			英				義				絈	J				111:				向				修	
			子				子				子					ミサ子	9			西				水	

ロ下手が上手にハート射とめてる 質問を空振りさせた多数決	寝屋川市	応援歌 手話で張切る車椅子	遅咲きの向日葵小さく夕焼ける	母見舞う窓に熟れゆく柿の色	和歌山県	夕やけ小やけ子供はみんな塾へ行く	びいどろのまろみで心癒やされる	嫁がせて夫婦で旅の話など (娘の結婚)	高槻市	人生のたそがれバラ色にする便り	シナリオは明るい家族と言うテーマ	黒門で河豚の哀しい目に出合う	高槻市	喪中欠礼もっと私は愛ほしい	愛ほしい意外な妻の果たし状	意地張ってみてもそぐわぬ肩パット	高槻市	ベレー帽似合うと言われ文化の日	じっとしておれぬ噂を仕掛けられ	言訳の電話はきっと長くなる	京都市	
	北				藤				守				執				芦				高	
	岡				井				先				行				田				沢	
	波				春				伸				稲				静					
	留吉				子				子				子				江				栄	
捨てる神あって拾えば大物で 村子定規にいやな女となりにけり 重箱の隅をつついているピエロ	和歌山市	母さんの歌声今日は楽しい日	弱火から豆がふっくら煮え上がり	守らねばならぬ夫婦の車間距離	兵庫県	コマーシャル子を標的になど卑怯	ほめ下手がジレンマをよぶ至近距離	さあおやつ今日の話を聞きましょう	松山市	経緯を聞けば両方の得手勝手	相槌を打ってた人が敵になり	手招きをされれば「イヤ」とよう言わず	香川県	寝返った男に貸しがたんとある	捨て石の声が聞こえて眠れない	炎の男鎧繕うことばかり	綾部市	思い出の中のまあるい握りめし	凍てついて月もからりと落ちそうだ	おふくろの味がよく合う米のめし	鳥取市	
	森				円				竹			9	辻				藤				植	
					増				田				上				田				田	
					純				さや				ょ				芳				_	
	茜				子				やか				しみ				郎				京	

句読点は打つまい妻に残しとこ	自分だけを責めて小さな自己欺瞞	耳鳴りは遠い戦の風だろう	宇部市・	新築の其処此処祝いの時計の音	墓詣り会釈しておく両隣	サボッたら散歩の靴が淋しそう	能本県・	柄少し派手だが君によく似合う	どん底のくらしもあった日記帳	裏の顔表の顔と議員様	熊本市	人間のバブル虚像のまま弾け	小説のように二人の窓明り	頃合いという潮時の難しさ	熊本市	ちょっとしたときめきポスト音で受け	続編は妻の手引きで綱渡る	快方に向いて仏も医も信じ	旭川市	妥協癖ついて自分を見失い	生きるためしっかり助走しておこう	反省もなく躓いた石を蹴る	和歌山市
			中				高				北				黒				朝				児
			村				野				Щ				田				倉				野
			Ξ				宵				_								大				
			良				草				進				緑				柏				馨
慌てても足がゆっくりして困る	鈴鳴らし神は子供に遊ばれる	ヒーララヒーララ風は噂持ってくる	兵庫県	遠い日の愛は身近でまだ達者	逆らえば義理がおもたい浮世風	病床にコスモス一輪秋見舞	岡山市	外人も山曳く笑顔秋祭り	ご無沙汰の数だけ頼む年賀状	一坪の畠で老いの汗流す	唐津市	子育てにとまどうている若夫婦	あきる程磨いて塗った津軽ぬり	生真面目の靴が道草などしない	十和田市	ニュースでは豊漁安くないサンマ	する事がたくさんあって手がつかず	娘婿についで貰うて嬉しい日	新潟県	愛の嘘積み重なって倦怠期	漫画文字踊らせている答案紙	ほんのりと色気を見せて妻の屠蘇	柏市
			酒				Ш				浜				阿				高				上
			井				磨				本				部				野				鈴木
			靖				行				治				喜				不				春
			子				子				幸				久江				=				枝

丑日帯 多のレーハに子のレーハ	目削 とりノーレニチワノー	血の絆 法事に見せる顔と顔	年賀状発売 年寄りも気忙しい	寝屋川市	振り向くと影踏んでいる人がいる	車椅子押してる人も老いている	家の中要所要所に鏡吊る	西宮市	布巾洗いして一日を締めくくり	逃走はトイレの窓と書いてあり	賑やかに洗濯物のある風景	東大阪市	白線の内らで待っている油断	糟糠の妻に発言権が増え	ため息でストレス溜めている不況	藤井寺市	美しく話し合いたい言葉よる	話し合い静かに喧嘩するつもり	買うと見た客が買わずに寒さ増す	岡山県	亡父の影ばかりちらつく雑煮餅	決心がついたらおいでと言うてくれ	耳もとのないしょが温い七五三	岡山県
				井				牧				指				Ш				富				土.
				上				渕				宿				端				坂				居
				すみれ				富喜子				千枝子				たかし				志重				ひでの
開発の地響き驚農を決意させ	各の世界が推動された	寛大な処置は逃げ道空けてある	名宝に酔い痴れ仰ぐ空清かく		花束が送られて来た敬老日	反省は風呂場の中の一人言	仏壇の亡夫の助言欲しい夜		出口ない話に心冷えてくる	隠し芸なくて宴会隅にいる	喜びも悲しみも知る靴磨く		いい月夜まだ歩かせている二	子沢山 数えて切るのが好きな母	休むこと知らない波は活きて		餓鬼大将女にとても優しい子	藪医者の勘で生命を拾われる	ばあちゃんの愚痴は相手を選		継がれきた民話のしみる吊し	ドラマならここらで一寸コマ	名湯のセットが温い子の歳暮	
		る	細川家名宝展を出て)	静岡市				静岡市				静岡市	人	な母	いる	静岡市			心ばない	静岡市	鍋	ーシャル	111	枚方市
			成を出て	增				柳				Ξ				片				大		10		海北
)	田				沢				浦				平				石				老池
				扶				た				つ				静				た				

ね

代

ま

美

足早に短足の犬引きずられ中除けを多めに入れて冬を越し	月曜日バネの緩みが戻らない大阪市	先生と呼ぶ人達が多すぎる 大生と呼ぶ人達が多すぎる 会えば出る薬の話老いはいや 高知市	今日もも	続ちらつは	裏切りを許しはしない冬の海 の前で夜長を座禅する を変しまする。 を変しる。 をを	鳥取市
	小	桑	本	小	松	西
	糸	名	H N	西	浦	村
	昭	知	忠	五	登	黙
	子	華子	男	十 鈴	志子	光
定年で妻はいよいよ活気づく小姑の眼つきでわかる意地張り	は言えぬ本音を書く	遺すもの無くて働く姿だけ豊中市遺すもの無くて働く姿だけ	竹とんぼ空は青色夢を追いがとんぼ空は青色夢を追い	風の音コスモス優しなびいてる窓の中満月覗き亡母を恋う不器用な男やさしい妻を持つ	職き役の方が妙案出してくれ 聞き役の方が妙案出してくれ なんとなく味方になっているこわさ	岡山県
	木	井	浅	中	橋	大
	村	上	子	塚	本	石
	-	直	ま	礎	孝	あすなろ
	笛	次	つゑ	石	由	なろ

あと二日平気で居れぬ締切日	待合所 退屈させぬ週刊誌	三百戸のんで市房ダムが出来	熊本県 増	亡母さんの言葉が今も生きている	顔色をうかがうように電話する	冷凍庫静かに夏が眠ってる	鳥取県権	下手な字で書いても年賀状になり	焼芋に飾り気の無い味と情	曳山に男冥利の肌を見せ	唐津市 福	叱り手のない淋しさに風が泣く	喝釆をあびて弱気をとり戻す	無理のない高さで揃う旅の友	兵庫県 北	運動会一等でしたと孫の文	巣立ちした娘の部屋に秋の風	雀の群れ大きな牛を追いつめる	寝屋川市 後	マネキンと同じポーズで試着する	日溜りで母の床屋が店開き	司会など要らぬ気楽な忘年会	河内長野市 柏
			田				代				島				Щ				藤				本
			_				康				紀				٤				黎				靖
			乗				女				_				とみ子				黎之助				子
働いた鼾だそっとしておこう	いじめた事は忘れていないクラス会	散歩道蔵時記のあり福寿草	西宮市・亀	湯煙の町の三日月情けあり	脇役の野菜サラダが騒がしい	一人旅富士は余計に美しく	和歌山市 西	湯煙にうるむこけしの眉涼し	奥入瀬渓紅葉の筏離合して	遊覧船行き交う毎にカメラ向け(みちのくの旅三句	唐津市 山	詫びるにも台本が要る議員さん	見合い写真無理に預かる同期会	阿蘇横断旅愁を誘うすすき原	箕面市 木	祖父から水晶印が引継がれ	駿河屋の羊羹がくる猜疑心	記念切手を貼ることにして詩の人	大阪市 尾	イスパニアの乾季の月が天にあり	開けゴマ黄金の椅子ある王宮	マドリッド犬も昼寝の並木道	シェスク 弘前市 佐
			亀				西			の旅三	Щ				木				尾				佐
			岡				村			句	門				村				崎				治
			哲				和				幸				天				黄				千加子
			子				成				夫				弘				紅				子

若いので直球だけを投げてくる散り松葉にせ松茸で出る料理	今治市 越 智 青	お祝いの机が重い一年生	役に立つ立たぬは別として仲間	曽孫みな帰っておもちゃ寂しそう	岡山県 後 安 江	ちょい役に甘んじているエキストラ	妻だから毒舌かるくキャッチする	カラオケへ飲めるからこそついて行く	松江市 安 食 友	白い息吐く野良犬につらい冬	妻にすぐばれる良人の猿芝居	タッチの差ですと次点をなぐさめる	松山市 丹 下 美	お見舞に会いたい人が来てくれず	悠々自適それもお金があってこそ	話し合い終るのを待つ酒の燗	河内長野市 大 西 文	お互いに愚痴の捨て場は縄ノレン	おでん鍋かこむ今宵の灯はあかい	イベントでウドン面白い程に売れ	岡山県 杉 本 伊
	園				山				入 子				津子				次次				クス栄
対の湯呑がちんまりと載る置ごたつちらほらと引退説の椅子きしむ売らんかなの狂気に弱い女の眼	芦屋市	忙しさを逃げ出したくて峡を訪う	がまんして風邪引いている夏ぶとん	義母ならば尚更深い恩がある	姫路市	炬燵出しひとりの初冬暖める	木枯しと赤提灯が手をむすぶ	紅葉が庭石染めて秋がゆく	今治市	葱ぼうず人住む家が温かい	母白寿わたしの老いと向いあう	どんな絵を描こう余白がまだ少し	鳥取県	秋いろに私も染まり彼岸会に	衣食住足りて善意の灯を点す	逝く秋にひときわ目立つ木守り柿	兵庫県	家族皆肥えて極楽とんぼです	修羅の果てここは無風の吹きだまり	ふるさとは吹く木枯らしも温かし	今治市
	根				福				白				岩				奥				村
	来				島				石				崎				野				上
	敬				姫女				サダ子				みさ江				テル				久美子

初鶏の今年のギャラは高そうだ	風船がこれみよがしに飛んでゆく	紅葉は枯れ散る前の意地のよう	東京都	充分に戴きましたと箸を置く	お似合いの夫婦ですねというお世辞	久々の芝居に酔った妻無口	枚方市	フルムーン広げた地図に夢をのせ	補修した川から桃は流れない	永田町飲んで下さい癌薬	姫路市	墓そうじ私へ風が澄んで吹く	風の裏よんで波濤の船を出す	親と子の絆ゆさぶる影法師	鳥取県	万円札崩すとすぐに走り出す	豊作に捥いでもらえぬ山の柿	紅葉にため息もれるツアーバス(竜神温泉行	東大阪市	一芝居してから標札かえました	隠居部屋なみかぜ立てぬ防波堤	蛙の子表彰台に立つと言う	寝屋川市	
			小				濱				福				武			行	安				太	
			寺				田				本				田				永				田	
							良				好				照				暁				とし	
			九				知				花				女				子				子	
旅の風プラットホームのめぐり逢い	参道はクライマックス岩の闇 (那谷寺)	九谷焼 楚楚として秋ひとり旅	寝屋川市	指定席 後も前もあいてます	在宅を確かめられたように切れ	法善寺 娘の長い願い事	寝屋川市	げんこつの愛はこの頃通じない	ゆっくりと紅葉の下を二人行く	六十は青春ですよ趣味に生き	島根県	小刀で削ると木の香良く匂い	面白い顔して鬚のある導師	青林檎嚙む時名前思い出し	今治市	ストーブの火でシベリウス聴いている	旅楽し小樽運河の雪に会う	柿落し飛天の舞台を見るチャンス	豊中-市	孫が来て私のリズム狂わせる	鹿おどしツララを下げた今朝の冷え	老妻にほれた昔がなつかしい	藤井寺市	
			豊				籠				菅				渡				田				菊	
			福				島				田				邊				中				地	
			路				恵				かつ				伊津				道				繁	
			路子				恵子				かつ子				伊津志				道胤				繁男	

六法がいよいよ厚くなり濁世不景気が粗食の頭なでて過ぎ	三十年で老化もかなしニュータウン	吹田市	おいしそう隣の客は並なのに	リカちゃんのドレスに化けた勝馬券	次は何処 辞令一枚渡り鳥	大阪市	知名度を悪女で売ったメロドラマ	弱腰が顔と顔見て手を挙げる	ローン完済 次は修繕費のローン	今治市	老い一人入れる風呂が家にある	あれこれと理由がついている孤独	葉牡丹の色鮮やかに農校祭	十和田市	貴花田ファンと称してほめごろし	名優はホントのようにウソ演じ	どうもドウモこれで万事がうまくいき	鹿児島県	文化の日暮れて公園山のゴミ	さつま芋買うて靴ずみまた忘れ	来て食べて寝る子に父の影はなく	大阪市
		岩				藤				和				小笠				大				清
		鼻				明				田				立原				Щ				水
		啓				満								敏				舞				絹
		Ξ				子				宏				夫				鳥影				子
赤とんぼ飛ぶ里人が減ってゆく出発へ弾み過ぎたか忘れ物	暑くなし寒くもなしの菊日和	兵庫県	小春日へふとんむくむく干してある	野道行く柿もたわわに実る秋	晩秋へ枯葉舞うてる桜土手	島根県	蟻は偉いな愚痴も小言もなく生きる	売り言葉買いすぎました馬鹿でした	また訃報今度もやはり癌でした	鳥取県	口紅の魔法信じて君を待つ	頼りなげな留守番役のぬいぐるみ	おかえりと迎えてくれるおじぎ草	豊中市	サロンパス匂う和服のいい女	共稼ぎ帰宅時間に妻は出る	過去ばかり思い浮べる古希の初春	唐津市	漁火をきれいと見る人暮らしの灯	喋ってる自分の言葉に酔うて泣く	願望の若く老いたい黄のシャツ	大阪市
		西				Ξ				伊				新				入				Щ
		井				代				吹				井				江				原
		つ				朝				富				朋				喜				章
		つや子				子				恵				子				久亭				久

おどおどと包丁使う妻の留守	人事課がエイズの勉強しています	寝屋川市	横槍をつかれ失速したジョーク	民族主義何がなんでも金メダル	広島市	どんぐりの落ちてころころ愛される	柔順に咲くサフランのしおらしさ	兵庫県	電話より手紙が効いたいい返事	鈍行に乗って出会った話好き	富山市	残されたページ大事にして暮す	頭から悪い男と決めないで	鳥取市	晩秋の蚊一匹に悩まされ	落ち葉掃き楽しむゆとりの年になり	高槻市	腹一杯 紅葉呑み込む剣山	倖せのリズムになれて来る恐さ	香川県	制服を着るとおんなじ顔に見え	嘘少しまぜて楽しく聞かされる	静岡市	
		土			中			倉			酒			田			小			田			小	
		井			村			垣			井			賀			林			中			木	
		英						恵						八工			紀美子			スミ			久	
		明			要			美			輝			千代			子子			I			子	
じわじわと晩酌きいてきた多弁	落着きを教えてくれる抹茶茶碗	松江市	張り合う気ないが隣の畑見る	職持った妻は玄関から出入り	熊本市	寅さんは立ち消えとなる恋ばかり	口下手な意見が急所突く不思議	寝屋川市	佗住居訪ねる人も遠ざかり	赤や黄に木の葉染まって秋深し	唐津市	怒ったらあかん血圧あがります	若者と弾む笑顔に歳はない	吹田市	苦労した昔仲間とうまい酒	十人十色 色があるから面白い	唐津市	早立ちに目覚し二つ並べおく	老人会 弁当食べる会でよい	米子市	子の旅の行先を知る土産物	抽斗に身許不明の鍵の束	神戸市	
		浦			遠			瀧			木			西			江			小			岩	
		辺			Ш			本			内			岡			Щ			塩			田	
		静			夏			八上			ミチ子						青			智加			信	
		水			生			十八			子			豊			琴			加恵			義	

絵葉書へ添えた一句の和やかさ	筆太のかすれた墨の息づかい	鳥取県	独り旅 宿の夜長を持て余し	老いらくの恋も拾った万歩計	大阪市	潮騒の匂に誘われ月が出た	年の差か妻に二三歩おくれがち	島根県	小旅行何処で降りても京は秋	仁丹の代りにのど飴などしゃぶり	大阪市	いたずらな風がモンロー意識する	そこまでのついでにしては長すぎる	和歌山市	信長像安土の駅で問うて見る	大往生通夜のお酒のにぎやかさ	八尾市	爪先の向くまま秋の万歩計	目がほしい棚のだるまの一人言	寝屋川市	ご好意はありがたいけど連れがある	常識を超える好意が疑われ	佐賀市
		中			乾			福			平			木			向			坂			古
		西						間			井			村			井			上			Щ
		智士			哲			博			露路			親			L			高			かずの
		恵子			静			利			芳			跻			づ子			栄			ŋ
祝開通豊かな息吹き送られる(横断道開通	四季の花ささやいてくる散歩道	岡山県	綺麗事言えてるうちが人は華	日本髪ちらほら新春ターミナル	鳥取県	花柄の色にみせられ秋を活け	相槌を打って相手をはずませる	香川県	山茶花も乱れて風に誘われて	そして今日ポチがとうとう帰らない	米子市	採用は風袋量ってから決める	施主を見て昔を偲ぶ大鳥居	香川県	神様も超過勤務の三が日	梅干が薬のように膳にある	富田林市	脈がある空しい話に妥協する	迎い風追い風回る夫婦独楽	岡山県	客引きに釣られ覗いたショーの夜	三度目の台風逸れた銀座裏	唐津市
地		国			丸			植			鹿			工			Щ			福			野
		米			Ш			田			島			藤			原			原			田
		きくゑ			希久			チカ			松			吟			昭			悦			旭
		ゑ			代代			ア			子			笑			水			子			恒

しゃしゃり出て一つ小さな損と得	衝動買い損を承知が気の弾み	東大阪市	晩秋にお洒落上手になる山野	年賀状下手でも筆で書き通す	唐津市	こおろぎが枕にしのぶ夜は淋し	落陽に鬢にささやく風の声	岡山県	辞めなさい 酒や煙草の事じゃない	乗らぬ時バスは次々来るもんだ	広島県	サイコロころころ ふりだしに戻る	気がつけば地図にない道 冬の道	豊中市	つい口を出して後悔する羽目に	乱雑に置いてる方が性に合い	兵庫県	週休二日人の姿もまばらです	不器用な日曜大工がむちゅうです	島根県	親切は貧乏人もできること	小さな義理果すもやはり金が要り	八戸市	
		松			Ш			牧			森			小			安			松			島	
		Ш			П			野			Ш			林			達			本			田	
					20			秀			抜			_						聖			昭	
		隆			ふさ子			香			智			夫			厚			子			治	
小春日の旅クーラーが効き過ぎる	騙される演技上手に世を渡る	静岡市	愚痴言わず共に歩んで来た夫婦	床並べ寝ても見る夢違う夢	海南市	酉年をまず乾杯で老夫婦	自作自演老いの一徹夢がある	東大阪市	残照の影絵夫婦にある余生	再会を約して結ぶ手が温い	岡山県	宝くじこんど当れば蟹食べに	ストレスがたまると財布からになる	川西市	砂に釘打ち込む槌の力無さ	嘘言わぬ相手もやはり花好む	出雲市	望郷の想いをのせて風渡る	受信箱コトリひとりを弾ませる	藤井寺市	ご近所の犬にも愛想して通る	町並みを過ぎると故郷の山紅葉	和歌山市	
		青			谷			大			福			田			園			田			榎	
		柳			П			平			原			中			Щ			中			原	
		金			義			太一			辰			喜			あお			孝			公	
		吾			男			郎			江			俊			おる			子			子	

鏡もち末は雑煮かぜんざいか	神さまに悟られましたお賽銭	羽曳野市	夢の中亡父の悟りの笑い顔	静寂の心広がる富士の朝(横山大観展)	岡山県	またへった参加の少ないクラス会	福耳といわれた筈のはずれくじ	静岡市	厳しさを教えやさしい母になる	考える事を忘れて呆け始め	鳥取県	カラオケで日頃の憂さを消して冬	秋祭神楽の笛に誘われる	松江市	頓るもの何も無いので神詣	耳の痛い話に横を向いてます	米子市	金漁り金に溺れて他愛なく	怪物も崩れて見ればただの屑	泉南市	疲れたな妻の背中にはるシップ	お見舞を素直に受ける齢になり	和歌山県	
		福			江			中			Ш			佐			木			坂			村	
		田			口			西			内			野木			村			根			中	
		悦			有						芳			み			春			流			悦	
		子			朗			雅			江			ż			枝			水			男	
炎えていた昔もあった彼岸花	初冠雪富士はやっぱり日本一	鳥取県	八つ当りカラスも雀もみな逃げる	等身大ポスターだけがじっと見る	橿原市	涙だした想いで選曲ボックスで	彼だけにひと文字添える年賀出す	姫路市	佐川急便スピードあげて金もとぶ	カリスマの出番となるかこの日本	和歌山県	うどんの二次会南大阪線同士	思い出をじんわり解かす同窓会	羽曳野市	天文台丸い屋根より宇宙見る	百歳がピント外れぬ返事する	鳥取県	最後まで残った味方女房だけ	悪いこと何もしないに金がない	鳥取県	自慢ばなし聞き飽き欠伸をかみ殺す	お名前を聞いても忘れる社交下手	姫路市	
		近			西			服			Ŀ			徳			美			Щ			丸	
		藤			本			部			岡			Ш			浦			本			尾	
		秋			保			_			正			みつ			美代			正			は	
		星			夫			典			直			つこ			子			光			る子	

宝くじ 騒ぐ孫居るからわが家楽しく て 鳥 取県 橋 谷 静

江

梅干を健康食に朝一つ

鳥取

市

賀

0)

n

ゆ

お茶目でも今日はすまして宮参り(七五三にて)

島根

県

児

玉

幸

子

買って夢見る一ヶ月

兵 「庫県 玉 田 Ξ 重

妻のかく処方箋わしに副作 毎日を素敵に飾るひとり言 用

肩も腰も痛くて明日が案じら 兵 庫県

顔色を読んで人生強く生き

疑われ 友の計を半信半疑で聞く電話 反省してます身の不徳

晴れ 物好きと知りつつローマの ツリー見に

衣着てさあ行きましょう写真館

つまずいた石あと穴が深くほれ 土地に住み未だ空港の位置を見ず

星一つ落として胸に飾りたい 12 瞳犬は私を信じてる

腕 若作りビデオばっちり年捉え 白が心細そうに迎え待つ

n 中 野 とよ子

羽曳野市 山 本 たけ

広島市 元 林 光 子

泉佐野市 大 I. 静 子

第 13 回

せん賞作品

鳥取市 谷 П 侑 里

馬 渕 光 子

吹田市

賞味期限 大掃除できず年越す永田町 職業と割り切っているこの笑顔 年が明けるよろこびコケコッ 切れた女の深なさけ 島 根県

コ

岩

H

Ξ

和

わが

雑詠2句

寺尾俊平・小松原爽介 大野風柳·橘高薫風·去来川巨城

投句締切 表 ときせん賞1名・準ときせん賞2名 1月末日 『ときせん』 4月号誌上

佳作7名

投 投 句 句 料 先 誌友500円(定額小為替 652神戸市兵庫区大同町2丁目3―18 誌友外1000円(定額小為替・発表誌呈

卜部晴美方 時の川柳編集室

◎多数のご応募をお待ちします。 時

0 Ш 柳 社

— 85

河 内 天 笑 選

神さまは不在でイヴの灯が赤 来復一つ寝返りして初春 名古屋市 12 # 高 子

歳時記を笑うバイオの花ざかり

寝屋川市

光

子

雨風をついてゆきます周遊券 珍しく鞄のものがすっと出る

反省をしてから殼に閉じこもり 青森市 藤

甲

吉

貰い泣き余程優しい人である

気位の高い女は誉め殺せ 大阪市 本

蕗

児

大人にもお伽噺をしてあげる

寝屋川市 籠 島

隣とは十年前と同じ距離 グルメ好き雑食性を持ち合わす 惠

ンにも夢のカタログ来ないかな 米子市 垣 花 子

とても恐い種播いている人間達

ーチャ

錠剤の一つに安堵 シャボン玉の気ままは責めぬことにする 秋夜長 H

石塔を洗い詫びたり愚痴ったり 母のこと見直す亡母の年越えて

肩書きが邪魔になってるクラス会 選で当たった墓地に会いにいく

抽

待ちぼうけ人の流れに堪えている 紙コップ ビールの重さ手にこたえ

定年の解放感は寂しすぎ 年金を狙う名刺が置いてある

の裏に村立学校碑 唐津市 部

スー 大胆に派手にと鏡そそのかす 15 1

均等法作った男茶は汲まず

ストレスに効く適量を今日も過ぎ

時

々は凄

慈善鍋風が身に凍む辻に佇ち 唐津市

子

突っ張らなきゃ生きてられない時もある お茶碗のひびを模様と思うとく

寝屋川市

藜之助

千万子

熊本市 Ш 夏 生

几 郎

保 正 敏

朴 音

唐津曳山三日天下の無礼講 歌山市 楠 見 章

子

他人さまの

尼崎市 城 武庫坊

達 子. 腹

呪縛から逃れる酒を飲みすぎた 飯を炊いて下さいわたしの死 しても殺しても蠅あらわれる の中見せぬ課長に酒を注ぐ 家

完

司

次

男

美容院美人のコピーしてくれる 瑞 枝

堺 ıtı 西 小 雪

生きているただそれだけで忙しい 鳥取県 はるお

火の男チューインガムを噛んでい 広島市 中 3 要

褒める鬼叱る仏が駆けめぐり 広島市 H 文

過疎へ来てごらんどの樹もよくし ヤペ る

蟻の目にある日は届きそうな天 木 干 代

今治市 野 佳 雲

いつまでも涸れぬ泉が母にある 和歌山市 # Ŧ 秀

んで見せよ影法師

が旨くて帰れな 箕面市 江 清 芳

龍宮の酒

鳥取県 原 とみお

尻尾 が妙に気にかかる 枝

老夫婦ひとつの時計しか持たず

恩一つ返したように菊くずれ	西宮市西口いわゑ	耳なりがすると念仏唱えとく	和歌山市 内 芝 登志代	上げ底がストンと落ちたハネムーン	西宮市 亀 岡 哲 子	ふかし芋そんなあなたの温かさ	和歌山市 堀 畑 靖 子	転勤に振りまわされている絆	寝屋川市 江 口 度	秋茄子を食べて嫁さんきれいです	倉吉市 最 上 和 枝	汽車という足があるからここを出ぬ	鳥取県さえきやえ	世は不況 年金暮し落ち着ける	寝屋川市 太 田 とし子	曖昧にぼかし保っている平和	静岡市 小 木 久 子	果し状境界線に置いてある	鳥取県西川和子	力んでも生涯わたしはピエロ	唐津市浜本ちよ	蜘蛛の巣にかかった新鮮な男	宝塚市 永 田 暁 風	森羅万象 声あり山は紅葉す	吹田市 山 本 希久子	自己満足にすぎないけれど歯をみがく	米子市 政 岡 日枝子
目を開けて夢見る若さ素敵だな	大阪市岡田ふみ	図太さを買われピンチを任される	藤井寺市 中島 志 洋	センセイと仮名書きすると格が落ち	川西市 松 本 ただし	考える姿で眠る会議室	枚方市 海老池 洋	生きすぎたなとひとりぼっちが飲んでいる	松山市 谷 真 風	毎日が休日 時計何度見る	阪南市 深 日 白光子	追払っても逃げてもついてくるかげり	八尾市 秦 正 子	霊柩車の事故を久しく聞いてない	米子市 小 西 雄 々	手のひらを返したような爆ぜっぷり	砂川市大橋政良	万歩計いつもの家で吠えられる	泉南市 問屋 啓二郎	他生の縁ひっそりお墓隣合う	箕面市 岩津 ようじ	見えすいた嘘もあなたの優しさね	和泉市中川楓	親娘のように相席さんと昼を食べ	茨木市 堀 良 江	正月の皿は陽気でお喋りで	藤井寺市 高 田 美代子
あの駅の少年兵よ今いずこ	高知県赤川菊野	二枚舌を時どき妻の針が刺す	鳥取県 乾 隆 風	日本でも米国でもない原宿で	今治市 月 原 宵 明	ひとり芝居の幕が下ろせぬ病だれ	羽曳野市 吉川寿美	曼珠沙華地球の血潮しぼり出す	兵庫県 遠 山 可 住	泣き虫は父さんだった披露宴	奈良市 米 田 恭 昌	水よりも濃い血縁が謀反する	唐津市 田 口 虹 汀	可愛さが少し出て来て弱音はく	兵庫県 中 野 とよ子	亡夫住む浄土を見たし逝く気なし	唐津市 木 内 ミチ子	イイ男ワルイ男といて楽し	弘前市 肥 後 和香子	自意識が過剰ピエロになり切れぬ	羽曳野市 芦 田 絢 子	雑草は四季を違えず生えてくる	寝屋川市 岸 野 あやめ	家族の和ピント合うまでじっと待つ	鳥取市 田 賀 八千代	大切なはずの両親疎ましい	和歌山県谷口義男

家計簿はとんとんでした除夜の鐘	岸和田市 島 崎 冨志子	童顔のままお多福も年をとる	大阪市 板 東 倫 子	スピード違反してから妻が喧しい	鳥取県鈴木公弘	弱い者同士が組んだ温い腕	兵庫県 酒 井 靖 子	百までを生きる 不義理を重ねても	岡山県 矢 内 寿恵子	水面下駆け引き右往左往する	豊中市辻川慶子	苦しみを刻んだ皺が笑っている	鳥取県 土 橋 螢	思わせぶりの髪かきあげて惑わせる	鳥取市 小 谷 美っ千	晩成と言われ膨らむ夢ふうせん	和歌山県杉山精子	母さんに命百まで下さいな	岡山県 山 本 玉 恵	お世辞でも元気出せとはうれしいね	倉吉市 渡 辺 菩 句	おんなだから愛が命とおもうてる	和歌山市 宮 口 克 子	取留めのないことですが見逃せず	笠岡市 松 本 忠 三	蟻の列やはり大将ひとり居る	鳥取県 田 村 喜美子
おとなりが薬屋だから医者嫌い	和歌山市 古久保 和 子	ぽっくり死願って呷るコップ酒	鳥取市 西村 黙 光	寝たきりも入れて平均寿命のび	仙台市 川 村 映 輝	ジーパンで歩けば若い街が見え	鳥取市上田俊路	古希古希と騒いでるのはお父さん	豊市 田 中 正 坊	古川柳通り役人だめですわ	大阪市 藤 田 頂留子	軽口をきいたばかりに的にされ	兵庫県奥野テル	祖父巨人 嫁阪神で飯がこげ	大阪市大福留吉	団体のパワーが残す旅の恥	香川県 池 田 かおり	香典辞退私の時もそのつもり	大阪市 津 守 柳 伸	カラフルな傘で女は風になる	岡山県福原悦子	アメリカ壮年日本老人幅利かす	羽咋市 三 宅 ろ 亭	ためす気で待たせた彼がもう居ない	倉吉市 野 中 御 前	戦さ痕撫でて長生きしています	大阪市 尾 崎 黄 紅
宝くじ内緒で買って落ち着かぬ	米子市 光 井 玲 子	つじつまを合わして嘘を温める	大阪市井上白峰	健康で満期保険のあほらしさ	姫路市 丁 坪 サワ子	貧乏人だけに法律押しつける	今治市 越智 一 水	順風に気を取り直す奴凧	旭川市朝倉大柏	細胞は木の葉も僕も同じ水	十和田市 斉 藤 劦	ふところの苦しさ見せぬ奉賀帳	大阪市 神夏磯 典 子	相槌を打って逃げてる生返事	和歌山市 森 口 恵 子	天下る先へ布石を打っておく	和歌山市 青 枝 鉄 治	低気圧おせじを言うて叱られる	松原市 小 池 しげお	紅葉の風と戯る万歩計	広島市 流 奈美子	与野党は腹の底ではもたれ合い	池田市 岡 本 吉太郎	昼酒があだダイエットままならず	広島県 田 村 新 造	割り勘に不満が残るジュース組	高槻市川島。譲云児

手間賃も出ぬと言いつつ出荷する	和歌山県村中悦男	去る友へ贈る言葉が見当たらぬ	羽曳野市 福 田 悦 子	この年でときどき不倫考える	有田市 松 井 かなめ	その続き聞いてあげようワンカップ	宇部市 中 村 三 良	どんな彩に染まるでしょうか白い花	香川県 辻 上 よしみ	冗談にしてもスパイス効きすぎる	和歌山市 細川 稚 代	寝たきりは御免と朝の散歩する	唐津市 浜 本 治 幸	声援にアンカーのロー文字	吹田市 西 岡 豊	年賀状 初孫のこと書いてある	西宮市 奥 田 みつ子	銀杏散る青空市も出盛りで	尼崎市 春 城 年 代	ルビーの歯見せて柘榴の大笑い	鳥取県 石 谷 美恵子	風師走漬物石と赤い手と	岡山県 小 林 妻 子	過疎の村 紋付袴よく目立ち	唐津市 浜 本 義 美	この秋のこれが最後の栗ごはん	鳥取市 近 藤 秋 星
歌いたくないのに捻子を巻きにくる	和歌山市 福 本 英 子	呆けていてどこかプライド高い老い	唐津市 山 口 ふさ子	義理人情 時に自分を見失う	倉吉市 奥 谷 弘 朗	自販機がゴトンと礼を言うてくれ	大阪市 川 原 章 久	代償を言わない母の束ね髪	島根県 佐々木 芳 正	使うあてない引出物積んでおこ	姬路市 大 原 葉 香	八百本ことしもビール派手にかけ	大阪市 中 西 兼治郎	高級車のカタログだけを持ち帰り	唐津市 山 門 幸 夫	風媒花 風の誘いに逆らえぬ	有田市 生 馬 芙美子		神戸市 木 村 貴代子	正直な人だと男う下手な嘘	岸和田市 三 輪 通 彦	沈黙にさまざまな音聞こえだす	米子市白根ふみ	さんま寿司 笛や太鼓が味を添え	和歌山市 池 永 一 匍	夫の吹く笛を信じて空青し	原辰江
長生きの兆しこのごろよく眠る	東大阪市今岡貞人		富士宮市 渥 美 弧 秀	石棺の狭さ西日の片かげり	寝屋川市 坂 上 高 栄	まだ望みあるかも知れぬ曲り角	藤井寺市川端たかし		鳴門市 八 木 芳 水		姫路市 中 塚 遊 峰		海南市三宅保州		和歌山市 藤 井 春 子	まだまだの思いで仰ぐ広い空	岡山県 江 口 有一朗	今の子の醒めているのが恐ろしい	大阪市 亀 井 円 女	手を合わせながらもあっけないものだ	八尾市 片 上 英 一	心臓を部品のように取り替える	静岡市青柳金吾	お小言は素面で言うて下さいな	唐津市 山 口 高 明	陰口をたたくと雑魚が寄ってくる	鳥取市 美 田 旋 風



1 鏡 なるほどと笑っ 今日もまた精 時雨きて身を庇うものなにもなし 命 が の隅にわたしの I 0 つ捨て一つ拾って秋のみち 怖い スト 灯つぎ足し旅はまだ半ば にバ ともう 急ぐシャネルを匂わせ ター 10 思わなくなっ っぱいに繭になる てしまう口答え 嘘が溜まりだす たっぷり塗る自 信

> 歌山市 歌山市 歌山市 曳野市 八尾市 夕花 寿

大阪市 本間 満 津 子

和歌山 和歌山 和歌山市 弘前市 西宮市 根 門谷 佐治 宮西 榎原 板野 後藤 松本 和 たず + 香子 加 IE.

ブラジ

+

0

絹

は

H

弾ませ

れの音を集めている川

面 ŧ

ヒコ

1

+

ばしときどき亡母

30

h

出ら

た

日

6

0

白

日記帳

小

つも変らぬみ

かん色

0

世 0 C

哀を見尽く.

T 闇 飛

知 を

なる風

0 n

向 な ŧ

石

へお礼ま

10

n

がまだす

すん 切

で開

43 たての

ひらに意地

を

++

化粧 平和 年 運が無い 喧嘩する相手あるのを羨まれ 弾んでるうちは毬 おろそかに 夕 ガキー 凪 たしの時計 か して愉しいことを考える しらやさし 枚 などと言うまいこ また歳 出 よく進 してこんなによく か 音の も気が付かず 月を追いやる 書 らゆずら いてい む 方に H 感謝 しと遅 るけ 逃 状 から n る 眠 か る n は n H 2

Ŧi. 対 雑学のひとつひとつに育 当然のように蛇 こころ満月にしているお 俗臭を払い 頼らねば生きてゆかれ コスモスの 十五 岸 騒が聞こえる母の丸い りのまま素晴ら で少 ウインクだけ し方向 背く 落して冬木立 口が 、姿の Ĺ 変えてみる はして ない Vi お湯を出 82 からつい 背な てら 豆 如 元 お H 0 < n 蒽 こう てゆ

> 大阪市 大阪 क्त 渡部 植 春城 并 村 本 Ш 西 さと IE

和歌山県 名古屋市 内長野 寝屋川市 和泉市 尼崎市 熊本市 大阪市 歌山 大阪市 藤井 政岡 中 永田 上江 内芝登志代 亀 岸 出 井 野 Jil 例勝 H あ アサ 枝子 高子 8 俊子 円 女 D

守 枚方市 夏 田 Ш 原 磯典子 美代子

H

寿美子

今よりは 病葉を浮

幸せだっ かべて水が

たことたし

動

17

な

かん山

「盛家族

0)

今

H

な

聞

7

10

3

農

0

虎

ひととせの色となり

神ま あの 糸底を美しく やさしさは自分の弱さ知 飾らない言葉が温 盛り返す力を冬に蓄える そううまくいきませんけど嫁探 U 言い負けて心安らぐことを知 ファイン なだや 日の と掴 さまへ秋 見舞に行ける倖せふと思う 画とは佗 V 3 葉樹あしたの 切れ の彩を分けあう 人に会う長い髪洗ってる いり老母 い日本を三 15 子火種をひとつください れる自信木枯し受けて立 夫婦げんかも会話 を見 ウ み負けて貰うた量り売り グー -を聞 ぬ性を女というのでしょう インド買いたい物が減 て年を忘れてみるもよし 風 しくない 0) して 実りを山盛りに 0 してから愚痴 かい 夫も笑顔持っている ことは考えぬ 歩幅に合わ てスーツにすると決 心 冊買ってくる い路地 おんなの 0 か朝 友が 襞とな ってから 0 Va 0 0 かせつつ 本 自 3 内 1 負 消 2 てくる 80

> 寝屋川市 歌山市 西宮市 田林市 茨木市 鳥取県 歌山 西宮市 芦屋市 米子 鳥 庫県 路市 庫 取 丁坪 奥田 籠島 奥野 堀畑 黒田 片岡 小塩 堀 石谷 倉 古久保和子 西 植 垣 П ロみつ子 智恵子 智加惠 + 美恵子 10 ワ子 能子 わる テル 靖子 良江 恵美

> > 手をつ 縺れ がん 体験を糧にこれから生きる道 大声で「うそ」と相 鶴のように巧みに織れ < む 糸ほぐす ば ŋ 1 なぐ伝わるものがじんとくる を想えば思考纒まらず 43 b た稲 ま 3 のなくて私をさらけ 賞 穂が 背 言葉をさがしてる 40 槌打っ を脱 或る日間いかける 息吹く一行 17 か 恩がえ てくる 詩

路市

本

取

小 福 沢

美

0

歌山

根

千子

鈴

木

春 枝

そう言 そしられることに堪えてる鬼瓦 両 0 一えば 紅を信じて水をやる 何か気になる言 共稼ぎ無駄を買っては泣いてい

3

和歌山 和歌山 寝屋川 米子市 兵庫県 香 大阪 堺 111 H 県 茂理 松尾 Ш 松井 宮口 神原 町 崎ひか # 田 JII 柳右 ハかなめ n

がが、す。 ところに穿ちを見ました。 いそいそとした姿が浮かぶではありませんか。 ますが、この句にほっとしたものを感じます。 秋のみちとひらがなにされていることによって、 ますと話している。 を持つ作者が日々の忙しさに追われながらも、 **匈とした)。 社で出る第美さに感動します。 時雨の頃であるだけに、** 偲ばれます。三句目―最近の女性の句にはユーモアがないとよく言わ 胸をときめ 身に言い聞かす。その強さが句にも現われて胸を打つのです。二句目 ゴシックの一句目一入退院を繰り返される。 そんな一つ捨てひとつ拾う心であろうかと思われ、作者の平穏な日々 中年を過ぎると特に女性は心を浄化して過ごしたいと願うものです ₹ 544 かせています。 大阪市生 ある日ふと立ち止まって、 四句目一女がひとり生きる厳しさを隙のない句 野区勝山 今年もどうぞよろしくお願 南1-シャネルを匂わせてという お洒落をした一人の女性 この世の旅もまだ半ばだと 主人との生活 川柳によって生きてゆかれ 18 人生の黄昏とも受け取 10 42 葉書の届きます度 たします。 の中で、 新 Ш この句 # 仕事 n n

和歌山

福井

辻川

寝屋川市

倉吉

歌山

桜井

米子 唐津

寺沢 浜本

みど里

ちよ

香川県

銀河系賞 平成四年度

受

作品

が続きますよう腹 八 分 藤 田 泰

子

幸

福

差引零 流され 誤 青 魔 信号ばかりで眠 かし る方が楽だ てみても白には戻れ 余さない と知 0 くなってく to 0 む 7 つか 12 ない L 3 る

準賞 作品

木 千

代

自

分史へ書くにが

6

酒うまい

酒

古

久保

和

子

こんな時笑える男頼

もし

13

族

の鬱嫁たち

が子を生まぬ

ふる 錯

こおす子生み

0 ち

顎 る

IJ

しや

覚

0)

延

長

線

て 咲

3 しころ

満

洋の各氏も候補に上がりましたが、れています。準賞には高橋千万子、 品に決まりました。次に今年打たれたアンコー 思いの深さを簡潔にそして最も平易に表現さ 自分の生き方」という大きな流れを持った泰 新 正子、海老池 大御所と新進の作 桝 河内 本 ル作品。 天笑) 蕗 児

観覧車 人を想うに良い 所 高 橋

幸せ が恐い のなんてウソでし しょう 新

IF.

子

干

万

子

頑 張って遊ぶ大きくなるため に 海 老池

灰汁の ない 顔 になっ たら寂 10 ta 藤 井 高 子.

幻を担 常 識で他人が夢を斬 Vi で山を降りて来 りに来る た

林

荒

介

雑 草 にも 自 惚 れが あ n 凜 と咲

内

芝

登志

代

責 任 0 ない気安さと淋しさと

犬猿

0

仲

も笑顔 みとい

かか う調 り君

b

します 味 0

何 で

と大きな奴隷

船

忘

n

っぽい男と忘れない

女

間 0

に悲し

気

萎えることあ

声

を聞

< 村

西

和华

成

料

Ш 矢 野 佳

本 希久子

洋

茴香の花賞 平成四年度

受賞

H 中 輝

13 た便り一 気にポ スト まで 子

水漏れの早さを忘れないでおく

気 に書

見守って下さる蘇生する時間 梨も林檎も一度皮ごと食べてみる せせらぎを宿すわが体内 0) 哀

とこころのたけを毎回、 巧的にいま少しというところもありますが、 参加でした。 も真剣に立ち向かいます。気魄の勝利です。 板野美子さん、 田中輝子さんの作品には、 句柄の大きさ、人生観のふかさ、 北川弘子さんは、 体当たりで投句してもらえば、 意気がこもっています。 惜しいことに途中からの この真摯な句姿 言葉のつかい

かた。 ちた有難いご投句、 句を挙げたでしょう。 生地」の高らかな詠いぶりです。一句を推すなら、私はこの 返っています。ありがとうございました。 作品を最後まで残していました。 ほかに後藤正子・松本文子・政岡日枝子・西山 林はつ絵さんは、何といっても「嵐の向こう遙かなり 私のほうが勉強させてもらうことばかりでした。 みなさんのお力の大きさをうれしく振り 毎月のご支援、 八八木 幸さんら

作品

板 野 美

子

北向 不器 ふり向けば亡者の列 立たねばならぬ捨 きの古椅子狂 遅れ 用で言葉がい 7 歩く憎まれない てねばならぬもの捨てに おうと味 つも杖をつく 0 人たり で済 方 は む 0 絵

ぶら あし 道草 嵐 鞭打って今日の の向こう遙かなり たの風 の振 んこ揺れて目の奥の砂 ŋ に気付かせられ して洗い 流 れを変えてい 場を探す 出生 時計 る 地 水飲 3

2

場

北 JII 弘 子

桜散る汚きことはい の闇には闇のうずくまり のほとりで熱くなる ノートに沁みてくる いてる月の わぬよう 夜は

澄みきった水が 多すぎる杭を抜

紫陽

花

混

濁

池

平成四年度 茴香の花賞



中 田 輝 子

平成四年度 銀河系賞



藤 田 泰 子

後ともよろしくご指導下さい。ありがとうご 心で作句していきたいと思っております。今 ましたことを励みとして、これからも無垢な

好きで胸に刻み込んでいる私 ありがとうございました。 していきとう存じます。 これからもいのちある一句を心がけ、 この度は思いがけない大きな賞をいただき 「二度とない人生だから」という言葉が 精進

今後とも、どうぞよろしくお願い申し上げ

昭和五十九年 歴 平成元年五月 川柳塔わかや 三幸教室入会 川柳塔社同人

いました諸先生方、おおらかな柳友…。 いままとび込んだ私をあたたかくご指導下さ 狐につままれたような気がして頰っぺを抓っ てみましたが、やっぱり正夢のようです。 皆様方のお蔭と感無量です。賞をいただき 振り返りますと、 いがけず立派な賞をいただくことになり 川柳のことは何も知らな

昭和五十六年 歴

堺川柳会会員 サークル「檸 川柳塔誌友 富柳会入会

受賞のことば





新しい年に思う

柿 花 紀美女

要然の依頼を受け、これも年の功と思って 事力せて頂きました。気が付けば早や今年は 書方の年になりました。気が付けば早や今年は にお年玉を送ってたのしんでいたのに、遠く にはな孫の一人から、結婚のお知らせが来た のには驚きました。桜の花の咲く頃に、結婚 のには驚きました。それに出席できるよう 式を挙げるそうです。それに出席できるよう 目下、体調を整えています。

あのいまわしい戦争の苦労も、もう忘れかとなり、母となって、時代の波に揉まれていとなり、母となって、時代の波に揉まれています。私も時代の流れに遅れぬよう、新しいます。今年は何としても体重を減らすつもりでは、今年は何としても体重を減らすつもりです。今年は何としても体重を減らすつもりです。今年は何としても体重を減らすつもりです。今年は何としても体重を減らすつもりです。今年は何としても体重を減らすつもりです。

幸いに主人は健康で、元気に晴耕雨読の生

お付合ができますよう願っています。 お付合ができますよう願っています。 年とともに一年が早く過ぎて行きています。 年には春の種を蒔き、夏は朝顔、秋はます。 春には春の種を蒔き、夏は朝顔、秋はます。 春には春の種を蒔き、夏は朝顔、秋は大でいます。 今年もまた、次々と咲かせて、たのしんでいます。 今年もまた、次々と咲かせて行んでいます。 そして好きな川柳の皆様と暖い思っています。 どこまで続くかわかお付合ができますよう願っています。

今年もいっそう内外ともに騒然とした年でったいものです。

新しい夢一つ持ち喜寿の春

紀美女

やっぱり好き!

肥

和香子

ると、自然に心が落ちついて、うきうきしてのか。ましてや、夕食の下ごしらえなど始めのか。ましてや、夕食の下ごしらえなど始めのか。ましてや、夕食の下ごしらえなど始めのか。ましてや、夕食の下ごしらえなど始めのか。ましてや、夕食の下ごしらえなど始めのか。まして、前日からというでは、一日いっぱい主婦から離れ、一つの仕事にしている。

ストレス解消に通じるとしか思えない。

何を隠そう。おいしいもの大好き人間なので、体重を気にしながらも、食の誘惑には誠で、体重を気にしながらも、食の誘惑には誠で、体重を気にしながらも、食の誘惑には誠なにせ全国共通の話題ゆえ助かる。
た日、友達の友達の友達から、フカヒレの大好き人間なの

先日、友達の友達の友達から、フカヒレの真ん中だけ、そうめんの如くたくさん入ってるスープをごちそうになり、私の胃は面くらるスープをごちそうになり、私の胃は面くらるスープをごちそうになり、私の胃は面くらかせだった。西麻布のフランス料理のお店もかせだった。西麻布のフランス料理のお店もかけだった。一晩に、お客様は二組か三組とすごかった。一晩に、お客様は二組か三組とすごかった。一晩に、お客様は二組か三組とすごかった。

で、ほっとしている私である。 彼は仕事柄、世界中を忙しく出掛けてて、 でいていのおいしいものは経験済みだが、 一定がでとれた荒縄で引きずって持ち帰る鱈は、 湾でとれた荒縄で引きずって持ち帰る鱈は、 漢地でもお目にかかった事がないと。津軽に住んでても、とてもむずかしい代物。ところが、 友達の友達の友達のお世話で、年内にも、 ばかでっかい鱈のプレゼントが実現出来そうで、 ほっとしている私である。

住 谷 石 舟 選

昆

布

磯の香と昆 塩昆布の味 船場育ちみやげは昆布と迷わない 昆布茶に桜を加えめでたい日 よろこびを小さく結んで昆布煮る 結び昆布 根昆布の郷愁を嚙む都会の灯 湯豆腐コトコト昆布のうまい味が出る 酢昆布を持って見ていた紙芝居 昆布巻に今日の幸せ包みこみ どさん子の友から届く利尻昆布 昆布に生き三代目継ぐうどん出汁 昆布まきの味しみ込んだ落し蓋 布巻に北の詩がある歌がある 愛の化石になる日まで 布北からの便り 嫁さんがついでくれ

シマ子 ひでの 雀踊子 + 延 武庫坊 洛 遊 俊 度 歩 酔 流れには揺れるが妥協せぬ昆布

結納の昆布が床でそりかえり たのまれた昆布の店へ宿の下駄

こんぶ干す老婆へ北の島かすむ 昆布巻のとろりと甘く年が明け ずるずると舌に馴染んでくる昆布 四島を語れば愚痴になる昆布 薄口の浪速うどんの昆布の味

雄

明 17

すこしずつしこり で浪花の味を買う土産 が溶けてゆく昆布茶 諷云児 杜

花嫁の父が寡黙になる昆布茶

積雪が背丈越えたとくに便り

降り積もる雪跳ね返す竹の性

田中正

極楽へ予約善根積んでおく 積雪と紅葉前線南下する ポンポン船街の噂も積んでくる

> 前 水

出汁昆布あなた次第の味を出 隠し味母の料理に昆布が生き 昆布抱いたまんま帰らぬ北の島

利尻の昆布の味に溶け

寿恵子 たつみ だし昆布引き立て役に甘んじる

付き合えば昆布の味を出す男

鉄 有

昆布出し汁しっとり母の味が出る

枯

朗

的

昆布も根から揺れ始め

だし昆布にもなれず人生黄昏る 鍋底の昆布喋りだす海の詩 酢昆布の子を夕陽に染める紙芝居 和やかに慶び聴いている昆布茶 一布ゆらゆらまだ還らない北の島

戎橋うどんが美味いおぼろ昆布 練炭で亡母が炊いてた塩昆布 手土産は松茸昆布ときめておく 酢昆布と寄席のムードに溶けている おむすびと相性のよい塩昆布 昆布コトコト愛もしっくり煮込む老母 塩こんぶとろとろ母の味を煮る 昆布巻にまだ婆ちゃんが生きている あやめ よし津

> 不満積もると風船をふくらます 枕にも今日の話を積もらせる

ちりも積もれば一

円玉のでかい夢

澤

田

Ŧ 春 選

しげお 螢 論 水 千の罪積んで一つの善を知る 柿一つ秋を残して思慕積もる 労りの約束を積む揚羽蝶 気の合うた友とコントの積もる旅 ここからは積んだ苦労が光る時

風車さいの河原で石を積む 死の灰が積る地球が病んでいる 気のゆるみ積んだ苦労を棒にふる 積もるから今日は泊まれと祖父の 想い出す雪見障子へ眸をやれば 熟りんご嚙むと津軽は雪積もる 地の底で積もる鬱憤吹き上げる ストレスが積もったらしいよう叱る 議事堂の屋根まで積もった黒い 声

雀踊子 ひでの 次志虹 信遊 かおる 積 3

3

96

路

積みすぎた夢が重くて走れない 生き下手をさらして夢を積みあげる 降り積りやがては土となる枯れ葉 荒れる海残して積もる北の雪 高鳴りが積もる話にすぐさせず 借りに来て積もる言葉が口に出ず 責任を果して枯れ葉降り積もる 私のハートに積もるバラの花 本棚の埃が笑うなまけ癖 ささめ雪胸の亀裂に降り積もる 青雲の積木を崩す風に会う 小さくとも足跡積んで来た自信 細正

雑音が積もると咳が止まらない 積もる思いが衣紋掛にぶらさがる 生き甲斐をひたすら積んで父の貨車 楢山みち積もる落葉を踏みしめて 森を出て積もる想いを絵具皿

> 美智子 枯 武庫坊

千

わがまま気まま貧しさがまた積もる

螢

ゴムのかすが積もっている迷い 保 州

雪積もる音にまぎれて父の笛 積もる話に谺はいつか掌に戻る

小西雄々

きょうだいも冷たくなった代替

わり

余生とは冷たい言葉氷雨降る

一日酔い冷たい水をいっ気飲み

冷 た

迷う事ばかり積って四季巡る

ローンなどは積まなくてよい燕の巣

曼珠沙華積もるお話

秋日

Va 新

諷云児

田

村

造

俊

北の島にまた氷河期が訪れる 目覚ましの冷たい音に起こされる 防犯のカメラ冷たい眼でにらむ 冬苗 柿一つ冷たい秋の風に耐え コーヒーが冷めて話が続かない いとおしい思いで冷たい手を握る 暖房の部屋で美味しい氷水 冷えた手を温めてくれた亡母の胸 言が過ぎて冷たい風に逢う 杯の冷たいお茶によみがえり 外は冷たい風の

寿恵子 Œ ただし たつみ 英壬子 よし津

冷や酒に溺れてからの肌の荒れ 厚着してくれば良かった山の冷え 家裁出る冷たい顔を見てしまう 孫が来て冷たい部屋へ灯を点す 病む母の細く冷たい手を握る 水枕冷やして傍に居てあげる ロボットが入社冷たい風が吹 高齢化冷たい風の吹き溜り

選 冷え切った手足を猫に労られ

智加恵

希久子

はるお はる子 111 静 峰 聞く耳を持たぬ冷たい椅子ばかり おみかんの冷たさ心地よい火照り 煮凍りの舌に解けこむ京の味 おしゃべりがすぎてうどんが冷めている 握手した手の冷たさへ闘志湧く 単身赴任冷たい部屋に馴れぬ日日 陳情へ代理冷たいことを言 行政の冷たさを知る車椅子 夜の辻風も冷たい慈善鍋 母居ない故郷で冷たい風に会う 里帰り冷たい雨も苦にならず その上に冷たい雨も降る別れ 窓際の椅子に冷たい風が吹く 滝しぶき冷たく座して懺悔する

しげお 白光子 酔 托鉢の僧に冷たい風の街 シベリアの名簿を繰ると雪しきり 冷や飯は部下の汚職のとばっちり 小走りの下駄が冷たい街にする 産めるだけ産まされ鶏の冷たい ラッセルを待つ駅長の白い息 H

倫

重

Œ

夢 美智子

冷や飯を食った日もある立志伝 鉄冷えに社旗もげんなり垂れたまま

兼治郎

因襲の街で冷たい目が刺さる

諷云児

柳五郎

17

時

英壬子 忠 雄

雀踊子 IE. 男

治

田 中正

坊

97

か步数室

題 夫

出 房

の表現方法に配慮して頂きたいものです。 従って何を強調するのかを考えて、省略とそ うとするため、失敗することが多いようです。 直に見たまま、経験したままを全部表現しよ 七・五の枠にはめ込んだだけという場合と、正 にしすぎて、その現象あるいは事実関係を五 それでは添削句から発表します。 依然として、見たまま体験したままを大切

円満な夫婦ばかりを聞く不思議 円満に暮す夫婦を不思議がる

重

囲まれて幸せに酔う夫婦です 太一郎

幸せな夫婦孫らに囲まれて) 子を抱いて夫婦の味を嚙みしめる とし子

子を抱いて夫婦の幸を確かめる 見るだけの仲良い夫婦は外目だけ 姬

(凭れ合い支え合ってる共白髪 持ち合って持たれ合いして共白髪 辰

近所中何故か夫婦は仲が良い

(平凡に生きて貰った共白髪 お互いに夫婦空気のように住む 変らない夫婦の愛をいつくしむ 妻と二人今日の命をいつくしみ 妻と手をつなぎ歩ける齢となり 手をつなぐ横断歩道の老夫婦 めでたさは空気のような妻が居る 忠 村 夫

(うるさくて居ないと淋しのが夫婦 口げんかとっても勝てる妻じゃない 口げんか一枚上手で夫黙る うるさいが居なけりゃ淋しああ夫婦 Œ 子

夫婦とは私を写す反射鏡 にっこりとすれば夫婦は反射鏡 延

別々の趣味で理解のある夫婦 別々の趣味に追われる夫婦独楽 ますみ

満点の妻とおだてて金出させ

好

花

夫婦とは諦め耐えることだった

諦めを情でまぶして夫婦愛

物忘れ似たもの夫婦笑い合い 物忘れ笑い合ってる夫婦愛

自分史がおのろけとなる夫婦仲

子の為に辛抱したと思に着せ 子は鎹夫婦の諺生きている 満点の妻に金まで管理され

夫婦独楽けんかするからよく回る 鴛鴦も夫婦喧嘩をたまにする 夫婦独楽けんかしいしいよく廻る

鴛鴦の仲で刺激とするけんか

単身赴任してみて妻のありがたさ) 単身赴任妻の苦労が身に沁みる 自分史に夫婦ののろけ少し入れ 秀 香

新婚で火花散らした仲直り

若夫婦火花散らして仲直り 仲良くて夫婦げんかを生き甲斐に 夫婦喧嘩ストレス生きるエネルギー

君

江

美寿子

ラッシュ時の駅で別れる共稼ぎ

春

枝

平凡に生きて労り合う夫婦

渋滞もたのしみながら夫婦坂

渋滞という日もあった夫婦坂

二人三脚倒れず夫婦つづいてる

二人三脚ながく続いた夫婦仲

見栄はらぬ妻に暮しを支えられ 見栄はらぬ妻が暮しを支えてる 通勤の別れがつらい共稼ぎ)

黎之助

まさお

のんびり屋主人短気で馬が合い 雨の駅妻が車で待ってくれ) 雨の中妻が迎えに行く車

性格の不一致かばい合い夫婦 泣き笑い夫婦芝居のパートナー パートナー組んで夫婦の泣き笑

子

松茸狩り夫婦で来いと子の便り

、老い二人子らの招きを夢に見る

まさ了

98

		(おだやかに愛の深まる金婚後)		(老夫婦いつかひとりの日を思う)	
宛先 〒83 藤井寺市道品	乗	金婚後日々に深まる夫婦愛	幸枝	老夫婦いつかひとりになる特訓	
題「希望」—1月15日第		(縦横の糸で織り上げ共白髪)		(先逝って夫婦茶碗に居る夫)	
	洋	行と列補いおうて共白髪	節子	夫婦茶碗一人身になってから使い	
ねじ巻くと動く夫を飼育		(共白髪傷の痛みも分ち合い)		(たそがれの迫る夫婦の泣き笑い)	
ああ夫婦男はいつも平和	忠男	妻だからわかる私の痛い傷	タミ	泣き笑いたそがれ迫るああ夫婦	
私の句		(結婚の写真女房もうぶだった)		(我が家には婦唱夫随の無事がある)	
円満の秘訣夫婦で笑うの	舞鳥影	写真だけの見合いだったが金婚に	義子	年とれば婦唱夫随が無事らしい	
このままでずっといたい	8	(逝くときはあなた看とってからと決め)		(夫婦だけ判る仕草で事が足り)	
翔ぶ妻の今日もお抱え宝	義男	死ぬ時は貴方見送り後を追う	嘉子	老夫婦二人っ切りの秘話を解く	
繕いのあとが幾つかある		(定年後炊事 当番制にする)		(入院も夫婦一緒をひやかされ)	
あほかいなそれでケリつ	円女	老夫婦当番制でしまいごと	孝由	病人夫婦ナースが手当見て貰い	
山越える夫のあとを踏っ		(言い分は我慢し合ってまだ夫婦)		(夫婦とは何かと妻をじっと見る)	
かくしごと無いのも夫婦	恵子	それなりを受け入れ合ってきた夫婦	敬	今更に何かと思う夫婦って	
赤い糸花も嵐もくぐりに		(渾身の介護夫に手を合わす)		(突然に夫婦を試す診断書)	
終着の駅まで夫婦弾み	美恵子	渾身の介護老夫に感涙し	みつこ	突然に夫婦を試す診察券	
不器用な夫婦へみんな		(心配の要らぬ夫で妻太り)		(思い出に生きて夫婦も古くなり)	
夫婦とは所詮他人と拗	方子	凡夫婦示すが如く妻太り	高栄	ああ夫婦思い出のみに生きてます	
歳月が似たもの夫婦つん		(治ったら妻が飲み出す風邪ぐすり)		(弱点はお互い様で添いとげる)	
幾つかのドラマ演じても	隆雄	その後を妻が飲んでる風邪ぐすり	和子	弱点は握ったままで添い遂げる	
夫婦愛モデルのような		(仲の良い夫婦に見えて濡れ落葉)		(結局は妻に妥協をする平和)	
着想・表現ともに立派なり	はる子	濡れ落葉それも又よし夫婦道	金吾	老夫婦妻の意見に押し切られ	
(金婚へ共に元気で合言な		(老い二人犬を残して子ら巣立つ)		(話すこと夫婦になくて犬を飼い)	
金婚まで生きるつもり	美代子	子ら長けて老二人大愛おしむ	晋	犬飼って会話をつなぐ倦怠期	
(金婚で二人三脚崩さな		(好きだよと言えぬ夫で終るだろ)		(ひび割れた夫婦茶碗に裁かれる)	
結ばれて二人三脚合う	きぬ	好きだよと言えない夫で終るらし	芳郎	言い過ぎた夫婦茶碗を買いに行く	

な両陛下 てなお夫婦 ですめる大婦 でするる夫婦でするる大婦ですがある大婦でする夫婦ですがある夫婦です

和 絢 美章 幸 や 静 ふさ 君 凡々子子子子子子 手 女子

うのみいう夫婦 軒太楼 村

両育する

締切(3月号発表)

吉 岡 美 房



稿用紙に清記をお願いします。 毎月25日締切・30句以内厳守。 原稿は川柳塔社事務所へお送りください 所定の原

柳塔きゃらぼく 政岡日枝子報

ギリふたつあって頭が良いかもと 毒舌をとばし頭の体操だ 頭ではとべる小川に落ちちゃった いい子だね思わず頭なでまわす 先頭の子だけにあげる月桂樹 散る日まで前頭葉に鞭を打つ 頭では覚えていない経が出る 過疎になった頭で風が吹き抜ける 六法全書頭に入れてあわてな 髪を諦めてから抜け毛止 地蔵頭をこっくりされたよう 一つ出たと騒いだバルセロナ

ふ正花玲ゆ

子子子

き

ひと声の鶴が一座を凪にする 海は平らでいつもの位置にふとん敷く 七十を越えて女の海が凪ぐ いい凪だ死ぬる事などやめようか 桜貝拾えた浜の夕凪よ

富保登 美子子栄

瑞 干

たる川柳同好会 井上 直次報

明日はと言うだけでまた今日が過ぎ まだ残る大陸棚の資源掘る 陸の上溺れる人の今日も居る 宇宙から笑顔で陸に立つ男 大陸にもろもろの罪おき忘れ 大橋で四国や島も陸続き またあしたそんな情緒はもう忘れ 明日の夢まだもちあわす私です いやな事あしたあしたと山のよう 海女の娘が陸の王者を生む不幸 海祭り埋立てられた陸でする ふるさとは陸の孤島で母がいる 日逢える人の如くに離婚する

寿々子 のりこ

八重子

直澄 恭明博 司郎子子光史次江子子江

高槻川柳サークル卯の花 辻白渓子報

路地裏を杖と歩けば秋実る 幻想に雪舞う傘寿緋にもえる お隣の分まで路地の水をまく 票集め路地の奥まで土下座する 近況を便り待つ身になって書く 肩書と本人の顔見比べる 盛り場の路地は人情噺好き

決心を頭上の風に迫られる 西瓜より軽い頭だよく振れる

一転のにぶい頭を旅させる

回転の頭を夜は休ませる

惠亜千弘

弥春

子み

上の樹がいつも嵐を呼んでいる

日

枝子

恵美子 よ志子 稲 静 スミ子 IF. 子

> 料亭のたぬきが本音知っている 路地の奥汚いけれど旨い店 ぎこちない握手本音がつかめない 寝て食べて老いの胃袋まだ元気 曼珠沙華今年は嫁と来 振りむけば静かに秋が招く空 エレベーター地下へ降ろしてまた買わし

線路ロケ山下清歩かせる つきあいと言う名で財布軽くなる お隣の晩のお菜がわかる路地 廃坑の線路錆びたまま暮れる 彼岸花本音の色で咲いている 瀧しげお 白渓子 諷云児 英芳杜萬 子子的的香

尼崎尾浜川柳会

前田いわお報

すみずみが黄ばみ日めくり薄くなる 秋の夜にハイネの詩集母老いず 美しく老いる背中にある余熱 老いて趣味余生をフルに生きている 久しぶりと互いの老いを見詰め合い 老いてなおマイクに溶ける芸一つ ひのき舞台光った芸で老い知らず 大胆なプラン若さがさせている ランドセル 心配はない大きな鼾かいている うどん屋で一身上の話聞 井の蛙外の世界を見てしまっ 愛用の道具埃に咽んでる 、間の大きさ人を許す愛 緒ならあなたと渡る丸木橋 ママの期待は大きすぎ 勇次郎 弘石六 す 正澄修鹿 向 子治舟浦 2 治 子水太 秋 西

-100

柳友の年賀に春を励まされ 世話すると応えてくれる菊の花 和歌添えた賀状で祖母の若わかし さりげなく受けた忠告忘れない 十四郎 V: 夢之助 わお

尼崎いくしま川柳会 年代報

気疲れを後ろ姿に負うている 気疲れへ風呂はぬるめの方がよい ひげ剃って夜の誘惑買いに出る 誘惑と気付かぬ振りで歩を合わす 耳打ちへ後ずさりする影法師 誘惑に負けぬつもりで脱ぐ喪服 誘惑に逆らい布団重くなる 人妻に怖いポケットベルが鳴る ショートカット誘惑の種まきちらす スペアキー渡し眠れぬ夜となる 誘惑の予感口紅引き直す 振り向けば惜しい誘惑逃がしてる 誘惑の名残りなつかし脛の傷 何げないジョークが刺さる気の疲れ 意地張って一人ぼっちになる誤算 意地張った親父の肩も丸くなる 意地積んでやっと完走したコース 意地張った児が公園で泣いている 意地悪といわれるほどに長く生き 武庫坊 杜英 まさお 囊 勇次郎 伊三郎

> 身内すぐ呼べと主治医が付きっきり 秋の陽にせっせと動く母の背 父さんの努力が実る菊花展 商いは断わり上手でそつがない 膳のめしにこだわるダイエット ヒーの味も覚えた万歩計 白渓子 鹿萬歌

的 子笛

西宮北口川柳会 はつ絵報

陶工の名は遺らない井戸茶碗 作る日日わたしの菊は裏切らず 自分史を作るざん悔もないまぜて 手作りはもう着てくれぬ子の育ち 憐れさも一緒に食べる活け作り やかましい頃の母さん若かった 松茸を食べた食べたとやかまし 診察を待つ年寄りがやかましい やかましい妻は鏡の裏にいる 食べ物にやかましいから別れます やかましく叩き込まれた芸が冴え やかましいが居ないと淋しい人である 美人だが鼻の高さが気に入らぬ 愛添えたメモー枚が置いてある 口喧嘩しながら障子張ってい 乾杯の荷が重過ぎる紙コップ プラン練る楽しみがある時刻表 禁煙の貼紙ヤニで黒くなる 族繁栄デンと座った鼻揃う 枚の紙で社員は軽く飛ぶ

的子坊

月並みのくらしが出来るありがたさ 夕焼けの沖恋う貝のイヤリング 逞しいゴキブリがいて妻がいる こわい程の星ねと夫婦して見上げ 新しい友に親切売りたがる 並びが悪くて笑顔遠慮する の羅漢にゆれる枯尾花 とサ子 蘭 しげお 十二十 静 3 子

八尾市民川柳会 宮崎シマ子報

薄い紙ときどき風に誘われる パノラマの隅っこアベックまで写り

隣にも小姑がいて差出口 おとなりも同じ人間だナ喧嘩 隣から男が飼育される声

欣

佳句地十選(12月号から

またひとり身内を殺してズル休み 少年Aで隠し切れない田舎町 動いてもなお動いても用がある 傷心の旅行は北の国がいい 皮算用底なし沼へ沈む株 飽食を叱る主治医の二段腹 ストレスを捨てるゴミの日見付からず 六文銭さえあったら困らないだろう 忘れたい過去がグラスの底に浮く 一生をスペアで終る鍵もある 重 放 かなめ 諷云児 治

正とし

白渓子 夜 道 富喜子 いわる 哲 よし津

乗せられてまた引き受ける世話係 文学の奥におぼれた古本屋 視野少し広げたつもり空が澄 減反をなげく男のあばら骨

手作りのおやつに母の走り書き

101

かつみ

咳ばらい聞いてふりむく婚約者 咳払いもう怖くない父の齢 咳するに控え目天皇無事迎え 健康な妻でカルチャーやりすぎる 健康に感謝みそ汁うまい朝 すこやかな目覚め厨に歌がある なるほどと感心をする筆はこび お土産はいらぬと旅の思いやり 雨の中酒屋へ走る急な客 天井に飛車を走らす風邪の床 ああ不覚歩の成金に城落ちる 気難しい跳ね駒恋をしてしずか もう大人咳より先に目でわかる 子の咳を診断できる母の耳 いやな咳する人がいて席が空き 泥んこ遊びとっても好きな医者知らず 隣までちょいちょい来てるらしい運 若駒が駈けて原野は萌黄色 ポットから大きくなった象印 熱燗をポットに入れて汽車に乗る おしゃべりを上司の咳がたしなめる フラワーポット抱いて女は蝶になる 便利やな」老母が吐息で押すポット 二吉の駒下駄ばきが性に合う 友の分まで生きてこの長寿 僕川報 とみを 勝 しづ子 頂留子 美津留 好 b 去

> 制服を着るとおんなじ顔に見え 正月の服だと孫が見せたがり 笛吹けば神も森から出て踊る 中もくせい川柳会 田中

正坊報

幸せは汗をかかねばふり向かず 発車まで時間たっぷりあるコーヒ お古ばかりで弟我慢強くなり 弟にやっぱり大きい方をやる 夢運ぶどんぐり拾う車椅子 ききかじる人の噂は聞かぬふり 七五三次男と長女でございます 矢絣のよく似合う娘に一目ぼれ 絵はがきでお土産がある便りくる 蛙の子はやっぱり蛙それでよし 逃げ腰の男にやっぱりあった影 ちらし寿しやっぱり母の味に負け あの人はやっぱり来ない霧の駅 お腹の子やっぱり式は挙げておこ 白紙委任やっぱり怖いあと始末 姉さんが美人で弟よくもてる 弟が他人の顔で来る法事 弟の電話で気付く声変り 灰になる母よ仕合せだったのか 大部屋から灰汁の強さで這いあがり の宿確かに風の彩を見た (小)英 ただし 白渓子 きく子 吉太郎 つえ子 とくて 石 田 実子

> お互いに杖つく旧友を振り返る 石積んだ屋根の版画が今朝届く 先読んだ苦肉の策と気が付かず 重い人の話に嘘は無い

三千男 作一郎 諷云児

夕日いまビルの谷間に沈みかけ 闇笛の音色に溶けてゆく女将 もめ事も女将の笑顔で和解する 亡父かいな墓を動かぬ赤とんぼ 不景気を笑う社長にある自信 過信した自信の技が招く事故 父と子の絆夕日につながれる 決心がまだつかなくて群にいる お彼岸でお花畑になる墓場 論争の種が尽きない墓の主 雑草の自信踏まれても蹴られても 土壇場に自信などとは言うとれず 自信などと言って器用な槌とのみ 七転八起 歯を抜いた顔が帰ってくる夕日 ヒマワリの夕日に背く首もあり まだ未練残る小雨の女坂 首の皮一枚残しまだやる気 自信が達磨のかおにある 柳宏子 頂留子 猪太郎 美 高庸 雀踊子 舟

祭り果て殊更しみる秋の風 秋祭り里の野山に呼応する 弘直 あずき

宮崎シマ子報

ライバルもお祝いくれる受賞の日 遠ざかる過去懐かしく老いてゆく

まつる

焼栗の匂ここから滝の道 栗ごはん炊いたが夫帰らない Tシャツに意味の不明な英単語

田英

大寺の庭時雨来て秋深し

咲き急ぐ花にルールは決められず 秋の蚊のルール違反に悩まされ 老姉妹いまだに姉をたてている 吾が庭のごと公園の虫すだく ルール無視階段一つ踏み外す 山吹きのみのらぬ恋の片思 名も実も捨てて一途な男坂 地鎮祭長いローンが待っている 火祭りに燃える男の血が騒ぐ 借景の階下の庭に赤とんぼ ルなど飛び越える気にさせた人 古老の傷が疼き出 田実子 とよ子 香 能 司

独占の井戸で多弁になる蛙 宇宙から見れば小さい独り占め 独占を本家と元祖にらめっこ 朝茜しばし宇宙をひとり占め 秋空を独り占めする鰯雲 独り占めできる財布は多寡 ホトトギス仮親の愛独り占め 鈍行の窓富士山の独り占め 独り占めされた遺産は落ち着かず 独占の背中へ指でスキと書 過去を曝して売る女 が知 n

> 親 初

楊貴妃の独占されてからの乱

三宅

保州報

男結びを解くのが辛い一周忌 鬼のような顔だが情けに脆い人 荷を担ぐ蟻の行きさき見届ける 揺れている女惑わすちぎれ雲 今だけの幸せに酔う水中花 眠らせた想いをまたも揺する雨 貴花田勝利に結ぶ動き技 煮え切らぬ話コーヒー匙で混ぜ 結婚よりナナハンが好きロック好き 澄んだ瞳が大人の嘘を覗いてる 水澄んで魚は餌が欲しくなり 自然界九月の声聞けば涼しくて ヒーを唯飲む仲を怪しまれ はる女

> ライバルの無言に負けたなと思っ 胸の内割って見せたい朧月 天高くなって出来ないダイエット 手を使う事ばかり好き亡母に似て 紅葉狩り二人並んでなお燃ゆる 大学を出て物識りで村に朽

> > はる子

女花蘭代

来ぬ出番それでも素振り続け 病室で逃してやった朝の蜘蛛 試し斬りしたくなるような刀剣美 自販機の酒がときどき呼び止める 南京豆がコロコロ新幹線の酒 いい齢で世渡り下手を抜け出 呉越同舟言葉すくなに酒をくむ 痴呆症に俺はならないぞと信じ 商人を先祖に持った話し振 幸せの汗が教える風の味 ポケットの底でいつでも不発弾 苛立ちをからかうように蟻の列 柳五郎 たけ志 治 友

柳塔あおもり

白髪にもったじろがぬ古希が来る 盛りあがり会費の高さもつい忘れ 妬心ふつふつ女の語尾が跳ねている 子に脛をかじられ父の熱帯夜

お点前の回し飲みする友がいて 笑ったり泣いたりしてはお茶を飲む

手の内が尽きて手負いの猪となる サイクルを変えて手の内読ませない

熱出して大事な妻と見直され

棟梁の手の内嗤う釘打ち器 手の内は見せず待ってる蜘蛛の糸 泥舟の上で手の内明かされる 手の内を見せて軌道に乗せにくる 手の内で泳がされてるめだか達 手の内は見え見え白を切り通す 公園の鳩に付けたい万歩計 たわいない会話に和む鳩の群れ

、間を冷めた目で見る檻の 度よい石に腰かけ天守閣

王様の手の内にある石榴の実

これ以上さらけるものは何もない

内を読んだ布石が物を言い

-103 -

ジーパンも袱紗さばきがうまくなり 灌仏の稚児の願いに慈悲光る お茶代わりなどと野心のビール注ぐ お茶だけの仲をまわりがさわぎたて 日本の心落ちつく茶の香り 明治まだ達者で今日も千振り茶 渋い茶を飲んで仕事の鬼となり 決断をする一服のお茶を替え 金策のメドに冷え茶で安堵する 真実を語れぬお茶の黙秘権 留守番は出がらしのお茶飲ませられ お茶漬が甘くて仲のいい夫婦 茶柱が今日の私を指図する ライバルへ静かに燃えている茶筅 茶柱へやる気おこしたかたつむり 交番で飲ませてくれる並のお茶 茶柱が今日の運勢予告する 茶柱にご利益あると信じきり レモンティおいしい会話聞いている の慣れたお茶とおわんと妻の指 生恵子 凡凡子 五楽庵 つとむ 花 弘、 Ш 3 明

器用ではないが努力は惜しまない 三枚におろす鰯がまだ動く 器用とは言わず努力と答えよう

群れるしか知らぬ鰯へ網の罠

美恵子

喜与志 良

反骨の小骨鰯も持っている 鰯の刺身だけでよい

娘ごころ本気で母にだけ話し 奥の手がそわそわしだす負けいくさ 中年の本気の恋が恐くなる 奥底をあかさぬ女のうす笑い 持ち出した古文書質屋に意見され 骨董屋メガネの奥で値踏みする 本気だと言えずじまいの遠いひと 明日持って行くもの点検して幹事 舶来を持てば背筋が伸びている 知ってても欺され上手な老母で居る にせものの壺を何度も拭く夜長 古都の奥庭秋にする

客の声奥から猫が顔を出す 路地の奥誰に見せよう菊作り 責任は持たず主張を持っている 心の奥見られてるよな幼児の 芋蔓式雲の上まで露見する まだ夜中トイレに立つは三回目 **襖越し奥の一間でもめてます** 話題いつか本気になったポッ クリ死 頂留子 柳宏子 文友 覚然坊 江美郎

無神論だから鰯を信じよう 呆け止めた鰯の頭拝んでる 大漁のニュース鰯は何処へ行く

べ飽きて鰯手の鳴る方へ来ず

たけし

羽津川公乃報

のメニュー囲み我が家も元気です つみれ故郷の海が呼んでいる

> 里帰り虫の声聞く夜もすがら きわめつけ奥にもあった落し穴 虫の声だんだん弱くなる夜長 魂胆があるのかいやに持ち上げる 有力な味方を持って路地に住む 金持ってだんだん人を信じな 奥座敷良からぬ話まとめあげ こめかみに辛い敏持つ負け戦 露見して見直しました妻の勘 趣味多彩 夜長と思う事がな

柳塔わかやま吟社 宮口 克子報

限界を知って進路の舵を変え 先頭を進む歩幅にあるゆとり 車椅子少女の笑みに救われる 忘却という歳月に救われる **焚断の木の実がスパイスに残る** 諍いの朝スパイスの効いた汁 革新というスパイスを抱く男 新弟子の肉は残してあるチャン 乗りついで海の青さに救われる スパイスを投げて男の夢を買う スパイスが効いて自閉の児を展く 天婦して愛確かめるガーリック 前進の椅子にたまっている孤独 変だけで救えぬ修羅に母の地図 柿の実や冬越す鳥が救われる 信仰に救われ明るい心持つ イスの効いた女で遠くいる

日佐雄 登志代 兀

シマ子 新

泥舟に乗ったふたりをどう教う 秋の恋ひとり相撲の紅を拭く 贔屓力士負けて虫歯が疼き出す 歌わせば巧い力士の負けっぷり ゆっくりと進み自然と語り合う ほんとうのことを知らないのが救い 土壇場へ神が垂らした縄梯子 若貴の人気の影で四股を踏む かけ引きへ一歩退き二歩進む

尼崎小園川柳会 立谷勇次郎報

保

鉄

紀久子 栄美子 三男

祭り帰りの鬼に寝られた父の背な 腹の皮背中へ付いた戦時中 長長と訓辞背中がかゆくなる 秋夜長読書二人で静か過ぎ 外は雨亡父の手垢の本を読む 腹芸で笑わす老父の背が丸い 読書好き妻のいびきを聞く夜長 やっとこさ読書が出来る回復期 三食をきっちり知らす腹時計 砂の器を読みかえす 月が窓から覗き込む いわお キク子 十四郎 定

秋灯下

小倉

JII

岩

腹割って話そう今夜酒もある せり出したお腹を庇う水溜り 腹立つ話は機嫌の良い時に

先走る知恵が時々叩かれる

アサ報 7

行楽客そんなに急ぎどこへ行く

ん気です米もお酒もつけが利

貫禄かそれとものん気うちの虎

突然に傘が重たくなって来た

足音の響く幸せ気付かない 家中の音が消えてる母の留守 走ってもまだあなたには追い 完璧な主婦で小走りまだ続 つけず

バーゲンの値札に走る女の目 旬運ぶ雨足の音秋をきく 耳年増セーラー服で闊歩する 悔いのない人生君と走破する 音もない夜半に明日をねり上げ 足早に郷愁残し秋走る 足音で分かる夫の酔い心地 生きる音全てが好きになる目覚 音もなく月日は進み世は変る 合掌し心耳で神の声を聞 無力さを知ってひたすら突っ 走る め 紳

渡辺 **善句報**

倉吉川柳会

秋晴れへしっかり者の音で明け

与呂志

行楽のシーズン家族誰か病み 回遊魚のように行楽して帰り 三十年奉仕したから別れます 同窓会尽きぬことばの花が咲 ボランティア奥様お手が汚れます ん気節歌う気持にまだなれぬ

とみお かつみ ゆり子 秋

> 広重の雨降る傘の行楽だ 突然があるから金を貯めておこ 暖房の部屋にのん気に蠅がい 奉仕品手に取って見るうら表

綾 一鶴子

あなたでも突然死ぬと惜しまれる 突然という爆弾を娘が投げ 行楽はすぐそこまでの遊園地 がやがやと年寄りだけで草を刈る 娘の肩をもんで奉仕を笑いあう 突然の帰郷家族をおどろかせ 突然の別れの方がいさぎよ 突然に結婚すると子の電話

川柳塔まつえ吟社 恒松

解禁の流れ真菰の小さい

解禁の酒は五臓をかけめぐり 神楽面外せば村の顔が出る 幕のない神楽を舞うた凡夫婦 秋まつり神楽ばやしに孫走る いちにちでいいから主婦の解禁日 解禁へ青田が売れぬ不況風 解禁に父は猟銃磨いてる 解禁の湖の白魚透き通る

懸崖の菊頂いてから狂う 神楽太鼓聞けば浮足立ってくる 神楽面はずせば優しいパパの顔 古里の自慢徹夜の神楽舞 小菊なら育てられそう苗を買う

ちかし きみえ 枝 江

美由紀 寿満湖 司

叮紅報

もつ一本追加が欲しいいい話 気があって内緒話が多くなり 話題の主が酒 受話器持ち直して聞いたいい話 菊花展愚痴はこぼさぬいい仲間 カラオケで小さな火傷してかえり カラオケが途切れ身上話聞く カラオケに出掛ける母の薄化粧 過去形の話ばかりでうるさかる 菊の秋となりへ嫁が来る話 カラオケを問題にする住宅地 カラオケになると別人になる里 言も話さぬうちに予防線 R花展自慢の顔が笑ってる 一升を提げて来る

良

京都塔の会

カラオケは苦手ジョッキが空いている

pŢ

松川 杜的報

どの部屋も民宿蟹の客でこむ 町のチャイムが流れて宿も夕焼ける 本当の影を探しているスター 宿にまで社用電話が追って来る ワンカップ寝酒と決めた簡易宿 宿楽しハイビスカスが燃えてい もっさりした口調で急所ついてくる 白渓子 ただし

カムバックさせたい百恵にある人気 上げ底の人気は芸を磨けない

大技も小技も冴えて舞の海

一座子役が人気ひとりじめ

英

子.

鳴らしてるだけのピアノで鬱を取る 豆腐屋の笛が旅情を誘う京 酸欠の街に渇いた鈴が鳴る 鐘の音が懺悔の溝を深くする ほおずきを鳴らすと亡母を思い出す よちよちの孫の靴鳴る秋日和 八気まだ捨てたものでないラムネ

太

故郷に野菊の花が咲く便り

秋深く背の鈴が鳴る砂丘馬車 八気者離婚の時もギャグが出る

多賀子

ひろびろと野辺都の鬼門何のその むずかしい亭主会社で人気者 桃太郎と名乗り人気が出たト

寿美子

峰

流れ去る都会の灯北へ発つ心 いい方にいい方にとる丸い背

一服をかしこまってる萩の寺

ポケットに五億バッキンは二十万

はつ絵

しげお

川柳クラブわたの花

目標の階段しかと踏みしめる 階段にもう騙されぬすべり止め 階段に組閣の顔を並べたが 階段にしっかりせえと叱られる 階段から落ちて平屋の良さを知り 階段を見上げ御利益あきらめ 階段につまずき多い齢になり 離職してからの階段ふりむかぬ り場の出合い始まる長話 2 トシエ 美津留 シマ子

2

雄 0

百合子 諷云児 武庫坊 正倫 3 子坊 階段で足がもつれる一大事 人の世の階段おりる秋の風 階段を上り下りする孫従者を連れ

控え目にみても相当貯めている 目八分の仕ぐさに母が先に惚れ 控え目にかみなり娘猫かぶる 控え目の六十路の恋の道行か 義理の仲心が通うめし茶碗 念願の我が書斎へは梯子段 階段は重い御輿の車椅子 階段を一直線に落ちた株 かしわ手の心通うていい 通り揃え嫁く気のない娘

見えるならたぐりよせたい紅い糸 喜んでばかりおれないほめごろし 子の成長のばすは母の褒め言葉 褒められてほんまかいなと鏡見る 萩の寺今日は紅刷く老妻連れて 紅色のシャツ着て少し照れてはる 台鍵を持つ裏階段にけつまずき

高田美代子報

鬼遊

秋風にぬくい話をしてやろう 秋風にさよなら言わず去る女 秋風に父母へ便りをことづける 禅僧の喝は背中を突き抜ける 騙されてみようと思う萩の風 コスモスが小径の幅をせまくする 目画自賛バラも牡丹も描きそえて キミ子 美代子

-106

ますみ

他人なら軽いジョークで済む話 目くばせでちょっと他人になる二人 よそ目には仲良く見える内輪揉め 辞めてからほっと他人を意識する 時を経て赤の他人の顔で逢い 越えられぬ一線があり未だ他人 泣いた鴉がもう笑うのも他人さま どの道を歩いてみても秋の風 おだてればおだてにのってくる女 飲み干したボトルの底に居る女 女です百まで紅を忘れない 弱そうに見えて女の強い意地 焼いて煮て食えぬ女が女房です 老妻は愛があるからやかましい 手の内は女の勘で不発弾 再会の鏡へ女とり戻す あなたとは他人のままで手をつなぐ 他人事見たし聞きたし喋りたし の中で人間とり戻す しげお 与呂志 十三子 みのる たかし 利政美 海

引き返す勇気教えてくれた海 善人を守りあくびの出る暮らし 善人の仮面が税務署で落ちる 心の襞かくし善人らしくいる 見るからに善人そうな丸い顔 善人が時々かむりたくなる鬼面 善人はじゃんけんぽんにすぐ負ける 勇気など要らぬ平和な国に住む 金バッジ外す勇気のほしい秋 選挙区が怖くて処断勇気出ぬ 宇宙から英知と勇気教えられ 政治家の嘘をわが家でもめてい 欲しかった余裕一日花といる てのひらに毬遊ばせている余裕 五日制余裕は妻に埋められる 貫禄も余裕も膝に出た胡坐 3

(編秀 子

ちかし

磯

きみえ れいじ 芙佐子 ひろし

まこと

留守居する老母に家がでかすぎる

恐喝の人相しかと見るゆとり 母の皿には許すゆとりがいつもある 終章の白紙へ笑顔描く余裕 余裕などないが迷わぬ慈善鍋 いっぱい開けて音楽きく余裕

祥文房一 庵子子葉

吉岡きみえ報

多賀子

かおる

もっている勇気は欲の絡むとき ライバルに向ける勇気はしまっとく 埋もれ火が燃え出す予感した出合い 踊るなよ島は返さぬ予感する 今日誰か来そうな予感落着かぬ 予感みなびたり当って小気味よい 天高し一日孫に笑わされいつの日か笑う運命の鶴 欲望の過ぎた地球が病んでいる 過去だけに生きる男の影薄い 幸せの顔を知らずに行き過ぎる 与え過ぎ子供の我慢奪ってる 定退を過ぎると妻は強くなる 七十歳を過ぎると医者と懇意なり 誘惑に勝った勇気を褒めてやる 間違った勇気血圧だけ上がる 打明ける勇気がなくて恋逃す 阪神が負けて虎刈りする勇気 まっすぐな勇気出世に遠くいる 恋拾う予感濃い目の紅を引く 心澄む朝の予感がよく当る つの日か笑う運命の鶴を折 行友 圭 艷 草 太 山 男 夫 郎 子 人 平 人 輪多朗 しお 由

武田

代仕男

ニコニコとして居る妻が恐ろしい 哀歓を知りつくしてる母の笑み 笑う声絶えて喪中の人となる 地獄で笑い買えるかな 路粒

金の沙汰

金持ちでないがわが家の灯が温い しきたりが家紋を生かす旧い家 子の成長だけを願って母子家庭 恋しいとリボンに言わす贈物 積善を満たしてリボン胸で咲く バレンタイン リボンが愛の演技する 痴呆症連絡先を書くリボン

柳たけはら

亡父が棲む古い時計が動いてる 針千本の約束小指聞きあきる 亡姉さんが話に来たか赤トンボ 床の間に結納がある秋の景 がんばるぞ新人戦にわくファイト 小さな木いちじく一つなっていた 中1 小5 史 千 幸 子枝 煌煌と昇る名月見るひとり 子の方が過労と思うスケジュ 後悔をするほど悪い事もせず 文化の日せめて句帳を新しく 香をたく気づいてくれぬ人ばかり 検査はシロ酒ありがたく胃にしみる 薬より笑顔の方が効くらしい みょうが汁忘れたいこと多かりき おふくろに心配事は聞かさない 鯛みそへ捨てた故郷の海を恋う 話す事書く事老いの良薬か 老人向けカルシウムウェハース好きでなし 胃切除も元気毎日ゲートする 偲ぶ人多く高野の紅葉踏む あめ玉が溶けきるまでの話です 冬物を納めないまま冬が来る コスモスの強さはかなさ忌が巡る 人惟う豊かさにいる羅漢たち ゲート玉曲り曲った運不運 赤いあかい彼岸花咲き秋の風 娘等と旅これも仏のお導き 血筋よき猫は夜遊びなどしな そくりをみんな知られている平和 取られた指の行方など i みつ穂 喜久恵 のばら 静 貞 笑 不淑 千年枝 ヤスエ

井上

照子報

げんこつの味も知らない不幸せ 諦めにまぐれで出来た次男坊

白

父の墓見舞うてくれた赤トンボ まぐれでも当選すれば変らない 言いきってひとり言では済みません 赤トンボ急げよやがて霜が来る

辛い過去隠す男の向う傷 辛いことのりきってきた丸い石 寅さんの旅立つ背なが泣いてい 好きですと顔に答が書いてある 長生きの手相でたばこ酒やめず 別れよと言う占いに怒ってる 占いを味方に今日の靴をはく 占いに凝り出したわけ告げない 走馬灯つらい話はきき流す つらい日も耐えねばならぬ父の樹 つらいので二日でやめた新入社 いから黙って空を見ています 娘 みつ子 希久子

石

IE

坊

ちよえ かつ子 郎党もない方が楽 金が要る そのうちに助さん格さん連れてゆく ポチの家来はだあれもいないボール投げ 社長兼小使い家来などいない 会社ミス家来の首をすげ替える 笛吹けど踊らぬ家来多すぎる に祖父は家来のお馬役

げんこつをポケツに入れた父であり げんこつをもらって人間らしくなり

きび団子 往診にナース家来のように連れ 今はまだ勝ち目ないので家来です 鬼より強い家来たち

高田

柳ねやがわ

水田町で江戸の喧嘩が変えられる

ほめ殺しあの手この手の無台裏 去年の坂今年は息の切れる坂 毒舌の雀に笑みを投げ返す ドクターが家族にあうという怖さ 恋せよと真赤に燃える曼珠沙華 無駄口をたたいていてもそつが無 新妻の供でしびれの切れる席 花嫁の実家ばかりと仲が良い 新婚がたっぷり距離をおく同居 無医村へ理想を抱いて若い医師 勝つ方に喧嘩は加担すると決め トラックが未だもめている帰り道 俯けのたらい無視する

雀の子 砂場での喧嘩家まで持ってくる の緊張ほぐす宿ゆかた 、味噌汁の味変えた人 覚然坊 頂留子 まさお 勇太朗

蛙

赤トンボとんでいますと隣から赤トンボとまりたいのに竿がない そして今赤いトンボと旅に出る

かあゆ川柳会

松本はるみ報

病名をかくしつまりは誤診なり

生きるとは辛いものだな大利根

人恋うる辛さを知ってから無口

ひろ子

さと美

はるみ

天皇の盾特攻の帽子振る ためらわず嘘でごまかす父の前 辛かった頃には虹がよく見えた 辛いつらいとこぼす女がよく食

> 兼治郎 恭宏正久 登志子 春 昌子雄峰

波留吉

秋晴れに行く所があり羨まし 先見の目があり喧嘩などしない 日付けない辞表がいつもある机 風船の逃げた方からうろこ霊 医学書を読んで主治医にきらわれる 減反へ毎年雀痩せてゆく モザイクをかけて見てます新婚さん お近くへ来られたらと新婚からの便り 口喧嘩強い男で痩せている ドクターから見れば患者の浮気者 同じ話ばかりの母へ柿をむく 小雀が踊り忘れて漫画読む 喫水線のまま出入り 柳宏子 あやめ かすみ シマ子 月

うみなり川柳会 森田 熊生報

孫が寝てやっと座ってお茶を飲む 父座る向いに亡母が居るように シャンソンを歌うと木の葉降ってくる 傷ついた心若葉に癒される お隣は垣根が高くまだ知らぬ 窓際の椅子に覚悟の正座する 御見舞の握ってくれた手が温い 人情の旅の座席をゆずられる 白旗を高く掲げて夢芝居 わたくしが座ると猫がぴょんと来る 酸性雨だろうか高い樹が枯れる 葉桜に微醺またよし十三夜 きみ子 あづま とし江 喜与志 みずえ

> もう何も言うなと父があぐら組む 女にはおんなの見舞い菊香る 枯れた葉に父の挽歌をいとおしむ

川柳塔おっぱこ吟社 迷観子

無意識に草を相手に時忘れ 里帰り夫もやはり追ってくる 生唾が出ても最後の手が出せぬ 実家には私の座る場所がない 裕福でないが幸福だけはある どんな彩染まるか可隣な白い花 運動会 親が転んで子が起こす サヨナラの時まで夢を追いかける 陰口は枝葉をつけて風に乗る 追伸の二字にトキメク夢を賭け 言が過ぎて今夜も責められる 返事する子の方にある理屈

暗闇に光がさしたらもう出口 川柳ささやま社 遠山 可住報 小菜実子 人生は嬉し悔しのくり返し

伽名子 かおり スミエ

縋っても自転車尻目に踏むペダル

出しをしたばっかりに高くつき

思いっきり遊んでみたい白い杖 文明の利器に弱まる土踏まず 乱筆を詫びて筆おく秋の夜 落ち椿 赤をそのまま自負とする 楽しみをおすそ分けして日が沈む

つや子

凡人に月がある夜の高い空

ちょうどよい高さに柿が熟れていた

葉士人

明人報

曼珠沙華咲いて彼岸がやってきた チカエ 放 ひかり 白柳子 よしみ いさむ S 川柳塔唐津支部

年金も貰わず逝ってしもたひと 二日制ごろ寝ふて寝でまだ足らず 爆笑の舞台裏にもある涙 好い時期に死んで倅は神にされ ブランドの波に埋没する個性 パトカーで酢昆布を嚙む夜の巡視 冬の朝冷たい水で身を清め むらくも句会報

おしゃべりが去んでゆっくり抹茶立て お地蔵さん誰にもらった赤帽子 晩酌にだれがほめた出るくしゃみ おしゃべりで淋しさうめる雨の午後 先客もあっておしゃべり花が咲く 赤頭巾はにかむように母米寿 肩書きをはずし気楽なベレー帽 はる代 良 子朗

とよ子

弱点を知ってる妻で逆らわぬ 空席の横が気になる一人旅 失意の日素直になって読む聖書 弱い子の味方は母のにぎりめ 遊ぶのも疲れた母のサロンパス 喝釆をあびて弱気をとり戻す 経を読む解らぬままのありがたさ 妻病んで男の弱さもろに出る 寝たきりが遊んだ話聞きたがり 火の女風の吹く日を読んでいる

> ヒサ子 百合子 とみ子

ジャンケンに弱くてグーをくり返す 久保 正敏報

芳 冨

郎美

īī

川 柳 高 知

川竹

ライバルが降りて闘志がわかぬ日々

松風報

雄

ひっそりと時雨の中に見る紅葉

重子

紅少しさして親子の七五三 にわか雨案山子の帽子借りようか

北発進紅葉前線かけ巡る

寒い夜はあったかメニューで待つ夕餉

知恵ついて孫のおしゃべり面白し

正確にアナウンサーはよくしゃべり

若夫婦見れば寒さもどこへやら

風

息づかい聞こえてきそう菊人形

菊 春 千佳 野 風 枝

月の出を待てぬいられが栓を抜 新港のプラン龍馬の血が躍る 名月にそろう同志の輪が和む 金に写した月をグイッと飲む

ふさえ 節 八 昭定 島 仲

風葬に今年もなるか過疎の柿 滴も残さず干した一合酒

本当の事は言えないくしゃみする

久世川柳クラブ

吟平報 明 おしゃべりの機転明るい座にかえす

芳 美恵女

腰すえて我慢に耐えた今日の幸

余話へ退屈しない友が寄る

柘葉舞うお城の樹々も冬支度 いい話一口乗ると膝が出る

人家族退屈しない位置にいる

約束はきらい私は刹那主義 何もかも調査済みです見合い席 中秋の月が邪魔するしのび逢い 三高の一つが欠けている迷い 反核の署名に躊躇などいらぬ 嘘のない暮らしへ迷い付いて来ず 名月を砕いて入る露天風呂 盃に月が飛び込む酒供養

高須賀金太報

川柳

大阪

仇とは見えぬ顔立ち菊人形 耳貸しただけに敵かと疑われ ほっといて自然体です薄い髪 運命を任すに風が強すぎる 糞害に平和の鳥も憎まれる 私等は一円でも首です金丸さん 比呂志 童

お祝いの机が重い一年生

江邦

聖戦と言う名で炎えた日の戦野

すんなりと許す貴方も意地っ張り 明月に尋ねてみたいあの亡父を 花のような笑顔の中にある度胸 日焼けした笑顔揃うた新学期 妥協するつもり裏口開けておく 苦しさも上り坂には夢もあり

すみれ

思惑も外れっ放しの土地と株 いい出会い実るか息子の赤い糸 ひと言が多いと諫める下戸の友

司

弘

重

コンピナート炎の種が貯めてある

そして秋女は明日の米を研ぐ 親子孫ひ孫も愛でる文机 職を去る机は拭いて拭いて置く

步道酔巢

菊づくりもう来年の策を練る

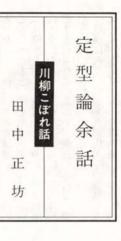
姑は達者で主婦の座を降りず

破れ靴駄馬を承知の妻といる 貰い火もあるから保険入っとく 父の座をいつかは降りる潮を待つ その一歩支える妻と降りる駅 火あぶりの刑にしなさい放火犯 筋一本通して鬼が降りて去る 人柄に引かれ縁談承知する

しげお 希久志 本蔭棒 笑 風

与呂志

美津留



り、そして第三分節の終りにも休止音符が入るから、結果として(2・2・1・0 2・2・1・2・0)となり、各分をも音数は違っても音量は同じで、四音歩節とも音数は違っても音量は同じで、四音歩のが第一印象」という批評も頂いており、今のが第一印象」という批評も頂いており、今のが第一印象」という批評も頂いており、今のが第一印象」という批評も頂いており、今のが第一印象」という批評も頂いており、今のが第一印象」という批評も頂いており、今のが第一印象」という批評も頂いており、今のが第一印象」という批評も頂いており、今のが第一印象」という表表方を導入してとは別に、十二音歩という考え方を導入してとは別に、十二音歩という考え方を導入していること、また、「休止音符』に着目していること、また、「休止音符』に着目している点は、評価すべきではないかと思う。

さて、ここで定型論にしめくくりを付けるさて、ここで定型論にしめくくりを付けるとより現代俳句の主流が、なぜ文統俳句はもとより現代俳句の主流が、なぜ文語体と旧仮名遣いを固守しているのか、ということである。俳句のサイドからは、これは当然すぎることとして取り立てた発言はないようだが、その方が定型とリズムを維持しやようだが、その方が定型とリズムを維持しやようだが、その方が定型としているのか、とい言うように、文語は定型律と不可分に結びつ言うように、文語は定型律と不可分に結びついており、それには旧仮名遣いが不可欠だ。

さらに検討したい。 字は二音字となったものと考えられる。しか 促音と拗音の漢字は一音字、長音と撥音の漢 字が渡来して以来の日本語は、それを抜きに ついては、少し疑問が残る。これについては し、撥音をすべて二音字として数えることに まないため、馬(マ)が「ウマ」、梅(メ)が とながら一字が一音であったと推定される。 古代・現代を問わず、一字一音の言語である も漢語から導入されたものである。中国語は でふれた促音・拗音・長音・撥音は、いずれ しては成立しない。九月号の「定型と音字数 したがって漢字が渡来した当初は、当然のこ 「ウメ」となったように、徐々に変化を遂げ、 しかし、その発音が日本語の発音構造になじ 二つは、漢字(漢語)についてである。漢

これまで書いてきたことで、もし私が定型を軽視しているように受け取られる方があれを軽視しているように受け取られる方があれた。たれは誤解である。大岡信氏の言葉を借ば、それは誤解であるとがおそらく決るためには、定型きであると私も思う。そのためには、定型という概念を狭い土俵に閉じ込めるは、定型という概念を狭い土俵に閉じ込めるは、定型という概念を検い土俵に閉じ込めるは、定型という概念を検い土俵に閉じ込めるは、定型という概念を検い土俵に関じ込める。

本 十二月句会

十二月七日(月)午後五時半 メンズファッションセンター

りぎりにすべり込みの人など、忙しい師走そ ハ名の出席で定刻に句会ははじまった。昨日 (六日) ままの句会風景であった。 冬にしては激しい雨にもかかわらず、 句会に直行した人、列車で締切りぎ の米子きゃらぼく忘年句会からバス

今年を振返り、感謝の言葉が述べられた。そ 句会が多く、それぞれに豊かな実りのあった を乞うとのことであった。 もまとめられているので、機会があれば一読 氏の手になる某人氏の生涯と共に、 亡くなったあと、昭和六十三年、講談社から あった。この作品は芥川賞候補になり、氏の した岡田某人氏の小説『銀杏物語』の紹介が のあと川柳雑誌時代、大鉄局畔柳社で活躍を 『秋澄』と題して出版されている。河津武俊 「おはなし」は黒川紫香副主幹で、遠出の 他の作品

氏から、西尾栞主幹の料理旅館「日本海」の 披講に入り、神谷凡九郎氏代選の板尾岳人

アルバムに残せぬ場面分かち合い 華やいだ場面をいつも抱いている

ぞれの想いを胸に今年最後の句会は、恙なく になったとの報告があり、拍手が送られた。 幕をおろした。 敷地から温泉が出て、このほど新築オープン 月間賞は河内天笑氏(堺市)に輝き、それ

清記—楓楽 司会一東雲 (記録―ダン吉・月子 (受付一房子・たず子

面 田 中 太選

場面毎 地球儀に戦の場面まだ消えぬ 肝心な場面はぼかすサスペンス もみじから枯葉に変る峠茶屋 老人会 お涙を流す場面はお静かに ノックせず開けたらとんでもない場面 虫の音も月もシーンを盛り上げる 時代劇ぼつぼつ主役出る場面 花道へうかうかと出る頬被り 濡れ場撮るシーンに双方テレている おさん茂兵衛の濡れ場へ雪がしんしんと 印籠をかざす場面にほっとする 印籠を出して場面をしめくくり 主役だけ残る場面に飛ぶ祝儀 死にそうでなかなか死なぬ名場 孤児対面 最終の場面で肉親名乗り出る 見せ場をつくる脚本家 荒神山の名セリフ 宝石の涙美しい 諷云児

> 雪の降る場面になると鳴る太鼓 緊迫の場面なごます酒を出す 見栄を切る場面でころぶ父の靴 閻魔さんが椅子で私が座っている場面 ラーメンをすするシーンは真剣だ あっけないもんだ雪がとけている カットして欲しいシーンを孫と見る 仲直りの場面 エリートの悲しい場面見てしまっ なつかしい場面はアルバムの中に 大見得を切った場面で声がとぶ 夫婦喧嘩のあとの場面が面白い 湯豆腐つついてる 美代子 シマ子 欣史子 しげお 風

痛恨のシーンいくつも胸にある 名場面なかった父の一代記 感激のシーン繰返してるビデオ 逆転のゆとりを秘めている場面 雪の降る場面に母が居て哀し

お葬式の場面ときどき夢で見る 目薬を充分つけておく場面 しげお 文

ざという場面で消えている男 保 州

暗転の場面で雪が降ってくる 透 太

紅白のゲストも確か人間だ ゲスト

兼題

伸選 螢

-112 -

脇役のゲスト主役を引き立てる 本番で座を盛りあげたのはゲスト 喜寿傘寿 祝うゲストも頑固です 体験談 語るゲストが控え目に いつまでもゲストのままの嫁の位置 落語家をゲストによんで年忘れ 注射より効いたゲストのひとくさり 百歳のゲスト笑いに嘘はない 博学のゲストへ合わすおべんきょう ゲストから貰った知恵の袋詰め テーブカットにゲスト代理が若過ぎる 知名度の高いゲストに期待する 意に添わぬゲストへ司会やりにくい 新人のゲスト笑ってばかりいる 引き際を上手に決めてゆくゲスト 司会者食う今日のゲストは芸達者 喋らないゲストを徹子もて余し マスコミが狙うゲストが遅刻する レギュラーをさしおきゲストよくしゃべる 端整なゲストが醸し出すムード 日曜日ゲストのように父が居る 花飾る代わりにゲスト呼びました ノッているゲストに羞恥心がない ゲストへの招待状に罠がある 正月だ妻をゲストにしておこう 華やかなゲスト主役を食い荒らす 持ち時間 上手にゲスト座を沸かす 大写しゲストが少し固くなる 人寄せのパンダと変わりないゲスト 福英 太茂津 勝吸 太茂津 蕗 金 たず子 ダン吉 白 千 絹 歌 保

> 大物のゲスト堂々遅刻する 外人のゲストに敬語教えられ 特大のリボンでつんぼ棧敷です 息づまる試合にゲスト喋りすぎ 射月芳

Gパンのファンで埋まるゲスト来る ネギ背負い松茸持って来てほしい 顔だけ売ってゆくゲスト 笛

百歳のゲスト ギャグもちょっぴり心得る いわゑ

抽斗をいっぱい持っているゲスト 森 子

読み耽けるぼくヘコオロギ来てくれる 天 笑

怖いもの知らずゲストの髪かたち 柳 伸

兼題

板 尾 岳

人

選

躓いた石にも文句出る師走 好きという殺し文句は聞き飽きた 殺し文句を胸に仕舞っているやり手 殺し文句もうわたしには通じない 雑魚の言う文句は軽くいなされる 埋め立てに文句いうてる蟹の泡 ハンサムでお金持ちなら文句なし 殺し文句と知ってて母は引っかかる 文句聞く耳を遠くで遊ばせて 松文 吐 7

> もうひとりのわたしが文句ばかり言 休肝日やたら文句の多い父 ふるさとをもたぬ女のうらみ節 いわる

月の道 文句言いながら墓穴を掘っている じんわりと殺し文句が効いてくる 街角でさむい男の文句聞く 追伸の文句に母が打った釘 殺し文句が生きてくる

消費税 何時も文句を言うているのは次男坊 ぐちゃぐちゃと芯のないこと言うてはる 妻の書くドラマ文句が多過ぎる 以来文句をためている 武庫坊

招き猫 重箱の隅ぶつぶつとつつき合う 月明かり殺し文句にけつまずく 女房の文句が皿に盛ってある 愚痴も文句も聞き飽きる

あの人が言う文句なら聞きましょう 鮮やかな返し技には文句なし 文句言う椅子の軋みが聞えぬか

よっぽどの事か無口が言う文句 文句などどうでもいいよ餅が焼け スプーン一杯程の文句が胸を突く ファックスの文句 文字まで怒ってる 正稚寿 IE 代 子風雄

致死量の文句を秋のてのひらに

ぶつぶつと何か言うてる影法師

使わねば錆びる文句で小出しする

気さくに文句聞いてくれ

影武者にときどきもらう名文句

楓

鬼の面なにか文句があるらしい 天 重

٨

口止めをして愚かさに自嘲する

どうしても五右衛門風呂にある文句

岳

1

すらすら 岡 美 房

ここまではすらすらとゆく詰将棋

(松)文

英

満津子

物事はすらすらいっても勘繰られ すらすらと答弁きっと嘘だろう 朝帰りウソをすらすら並べたて すらすらとことが運んだ飯茶碗 金バッジの嘘すらすらと秋の風 暗記した祝辞すらすら出てこない すらすらと母の当て字を読んでいる 場慣れした代理すらすら祝辞読む すらすらと来たわけでない喜寿の坂 すらすらと読んであっさり忘れられ 敵はまだすらすら針に糸通す すらすらと書くペン先に嘘がある さよならがすらすら言えぬ太郎冠者 無口にもすらすらしゃべる酒がある すらすらと議決をさせた水面下 みつ子 シマ子 射月芳 しげお 楓楽 頂留子 重

> すらすらと出来た名句は鉢合せ 裸婦の絵をすらすら画いて冬仕度 本音すらすら言うて空気を重くする すらすらと答えた嘘に蹴躓く 琴線に触れてすらすら自白する すらすらと自分を庇えたら議員 すらすらと答弁できぬ訳がある すらすらと夫婦と書いて悪びれず すらすらと泳ぐ男の吹き溜り 松芳 たず子 岳 太茂津 正昭 洋的

取り調べすらすらいかぬ黙秘権 すらすらと喋るぼかんと聞いている すらすらと喋る男が軽くなる サインならすらすら芸はまだ未熟 すらすらとゆかぬ二言目に家風 ダン吉 文透 路

容疑者がすらすら吐いたのが不安 生い立ちを知ってすらすら謎がとけ すらすらと名文でくる断り状 すらすらと遺言状が書けますか すらすらとする答弁に裏がある すらすらとアドリブが出る芸達者

灯を消すとすらすら謎が解けてくる

すらすらとまとまる人を斬る話 まだ恋に遠くすらすら書いている 天 月 子

兼題・止まる Baj 萬 萬 的 恐ろしいことをすらすら書くカルテ

美

房

立ち止まる風景ばかり京の秋 止まる子はいない淋しい親の指 タイムトンネル信長が生きている近江 ひとさまの接吻をみて立ち止まる 松芳 個英 的 子

> 終止符を打って女の顔になる 唇を合わすと夜の時止まる

止まらない惰性続ける花時計

乗り継ぎがすらすらゆかぬ人生譜

若夫婦 貧乏ゆすり止まらぬままに年の暮れ 来年を見事に咲かす枝を止め 夕焼けに足止めを食う万歩計 雪吊りのてっぺんに止まっているカラス 逢えぬ日も胸の振子は止まらない 昭和史の時計が止まる孤児来日 踏みきりたい夢が助走路で止まる あの日から止まった刻を抱いている 金時計 止まったままで亡父の顔 私語止まる紳士淑女の理事会議 大上段を止める優しい目に出会う 無器用に暮らしています停止線 プルトニウム止まる港が見つからぬ 道化師がふと行き止まる風の辻 かごめかごめ一人ぼっちに止まる秋 笑いが止まる奥の咳 シマ子 太茂津 いわゑ ダン吉

密航船 盗み取った芸が師匠の目に止まる ふと止まる第九流れて来る窓辺 立ち止まりふと考える齢となる 遭難のニュース夕餉の手が止まる 私に合せてとまる月が居る 言い出したら止まらぬ自慢もであます 課長どまりの父でいい 止まる入江を探しあて

美津留

おばさんと呼び止められる忘れ物 武庫坊 ただし いわる 秋

-114 -

目に止まる路傍の石が欠けている 売名の一人芝居が止まらない うぬぼれが止まるとピエロの顔になり 伽羅の香にふと立ち止まる寺の道 ただし T 白 秀

余り風 石庭と向う時間を止めたくて 秋は小指に来て止まる

7

これ以上言うなと妻の目が止める 昭

議会空転 不況も止まったままでいる 萬

的

西 尾

選

趣味の欄 旅行と書ける貯金高 北国の旅からつづく年賀状 まだ旅は続く私に朝が来る 狂う海見たくてひとり北の旅

> (福)英 (新)正 松文

子

雄

旅に出てやっぱり妻と口喧嘩 据え膳に憧れがある妻の旅 初旅のプランに添えるわんこそば 旅ごろも脱げば雑音攻めてくる あそ五岳 霜月に逢う銀世界 観音さまを尋ねて歩く秋ひとり 翔ぶことも家出もできず旅に出る

残り火の消えないうちに旅に出る 旅は道連れアメ玉一つ如何です 男の旅はいつ果てる たず子

鬼の面

余韻とや旅で拾うて来た絆

旅の虹 地酒ほろ民話ほろほろ旅日記 奥入瀬を見てからやさしさにかえる旅 少しずつ仮面をおとすへんろ旅 一人旅どうもきょろきょろしてしまう 今は影絵となる女 ただし

古寺巡礼うろこ一枚ずつはがす 名優と一字違いの旅役者 同伴の脚を労る旅疲れ 日々好日 大事に旅をしています エリツィンのかわりへ鶴の長い旅

覚然坊

フルムーン妻から腕を組みにくる 創作のヒントが旅の出会いから アバンチュール求めて老いの一人旅 妻の夢 果たす嬉しいパスポート ハネムーン女性上位がほの見える

しげお

旅にいてさえ時計眼鏡の置きどころ 旅人にとてもやさしい道祖神 旅の終り恋女房がいてくれる 旅人のモラルを歎く城下町 ハネムーンなんと私の若いこと 放浪の詩人に逢うた北の旅 食べてしゃべっていいじゃない 口やかましい老妻といる (小)英 欣史子 IE

旅先の事では済まぬ後遺症 仏の面も脱いで旅 房 佳

子 秋

寅さんのビデオで終わるバスの旅 郎

良い旅でございましたが二キロ増え 天

笑

あかあかともえる炉の色旅の色

栞

平成 保持者と句会皆出席者 四 年月間 賞 杯

月句会に欠席した福本英子・坊農柳弘の二氏 名に清水利武・森下愛論の二氏を追加、 小池しげお氏に決定した。 一月・六月の2回にがたって天位を獲得した また、皆出席者は十二月号既報の皆出席者 今年の本社句会の月間賞杯永久保持者は、

正しく、 のうち、 となっていましたが、 P103下段の岡山県川柳大会のときが1月23日 がありましたので、訂正いたします。また、 は「道連れが一枚チューインガムくれた」が は「佳きことの往復葉書買いにゆく」の誤り 「道連れがチューインガム一枚くれた」の句 訂 、清記が違っていた旨、 正 「佳きひとの往復葉書買いにゆく」 12月号―P8下段の川柳塔あおも り五周年記念大会における入選句 上田登志実氏ご遺族様から粗 1月24日の誤りです。 現地から連絡

しました。

芳志

供養として金一封、拝受いた 川柳塔社

を削除して計三十二名となった。

ш

中に

編集部

たくなる

句賞に入選した。 加で開かれ、次の4氏が秀 句者を含めて117名の参 日、同市婦人労働会館で投 すの木」川柳大会は11月5 ★第4回摂津サークル 12周年記念大会は11月15日 ぐや姫 きている

五億円ハイおつりです二 順番に風邪を移している 匹を捌くに白い目を怖 黒川 田頭 代田万寿男 紫香 5新家完司6金築雨学?灰 合成績は、①新正子②土橋 同町営国民宿舎「山紫苑」 螢③江原とみお4八木千代 名) して開かれた。大会総 で143名が出席(投句42

月15日、同市立中央公民館 で42名が参加して開かれた。 ★富田林市民川柳大会は11 近すぎる絆が風を持って 河合 時弘 各題天位句次のとおり。 は田村きみ子さんが獲得。 石花菜氏、じげ起し記念杯 俗名のままに野菊の墓が れますよ 土橋 わがままを通すと茎が折

各選秀句次のとおり。

らわかる 小出 てのひらの寒さが妻だか

原泰子8田村きみ子で、山

休日が増えたと思う象の

陰合同銀行支店長賞は但見

★川柳塔鹿野みか月結成満 美しい手でしたたかに生 雪の日に咲く約束の藁の バラ咲いて夢の続きが見 待ち佗びて花も女も絵の 地球には戻りたくないか 西出 河合 西出 小池しげお 時弘 冬の面 ある きかす ようだ きる 中天の月も鼓を打ってい 死にそうな男に銭の音を 今はまだ笑う刻ではない 幸せと書ける余白を信じ 素顔に近い彩に 八木 政岡日枝子 矢内寿恵子

11月20日に行われ、本社同 ★余暇開発センターが主催 人の江口度氏の次の句 女房の休日」の表彰式が た遊々川柳「亭主の休日 せぬように 翁をつけてなあ犬死にを 但見石花菜 江原とみお



るパーク

新 同 人 紹 介

太茂津・由多香・洋々・諷人・熊生推薦 西 村 默 光

上 薫風・明光推薦 直 次

#

甲吉·五楽庵推薦 風 樹湯

千

治 甲吉·五楽庵推薦 千 加 子

佐

が人位に入選した。 受賞した。 句と絵で漫画川柳優秀賞を また、住谷石舟氏が次の 休日のパパへとへとにな 目「頰にふれるは秋の手の 月) は (昭和3年…)。 ·上段1行目(昭和8年8 ひらか」のかは不要。 P71 ■12月号=P47·中段7行 ▼訂 正

ちば東北子・波多野五楽庵 豊・片倉沢心・佐藤良子・ 第2次選者は大野風柳・斎 さむ・今野空白・猿田寒坊 年」。第1次選者は礒野い 作品 良行・渡辺蓮夫。応募料は 藤大雄・森中恵美子・山田 石珠子・西村在我・藤沢岳 志水剣人・仲川たけし・永 は平成5年4月1日から6 が決定した。応募受付期間 て93文芸大会川柳募集要項 ★第8回・国民文化祭いわ 「美」「心」「大地」「鼓 風土」「流れ」「一番」 」、同(当日句)は「仲 「出会い」「発足」「定 (事前投句)は「未来」 1人各題2句とし 応募作品は未発表

もいる

たたかい

各題秀句は次のとおり。 49人が参加して開かれた。 1000円 ★豊中市民川柳大会は11月 市立中央公民館で1

林英子・田中正坊の5氏。 年末句会で表彰した。最優 年間賞を決定、12月11日の 松川杜的・川島諷云児④小 秀賞は都倉求芽氏、 ★京都塔の会は平成4年の 得点賞)は1阿萬萬的2 版△ 堀江くに子

B6判184頁·1200 川柳教室 田口麦彦著『麦彦の時事 (東京美術刊

業平が呼ぶので行って参

手話弾む笑う目と目があ よく見れば忘れ物した蟻 じゃが芋のいつか輝く日 先妻の位牌動くと妻がい 宮沢さん時には怒る顔見 職安へ切られた首を見せ が終ります 山本 小さなお金を数えて今日 吉村 石川一 後藤 保木 玉利三恵子 玉利三重子 雅文 円) 田辺聖子序文。 野いさむ序文・東野大八が 244頁・2000円) 礒 わら』(自費出版・A5判 38人の作品集・年表で構成 0円) 明治・大正・昭和編 頁 · 1800円 イムス社刊・B6判364 性川柳の手引き』(北海タ ■斎藤大雄著『情念句―女 ■奥原雨人川柳句集『ゆが · A5判200頁 · 200 柳史』(川柳甘茶クラブ刊 ■奥美瓜露著『石川近代川

雨人川柳に乾盃」執筆

▼お便り▲

きました。観光客に親しま じ・河南と私が日御碕へ行 18日、青湖・まこと・れい 周年になります。 去る10月 緑之助の句碑を建立して20 板垣草丘(同人·出雲市 「来年(平成5年)は、尼 岸和田川柳会会長)旧冬11 多数が参列した。 36の自宅で告別式が行われ 院で肺気腫のため死去、 月20日、岸和田市の寺田病 橘高薫風理事長はじめ同人 ■植山武助氏 同22日、同市上町7-

きました」 ▼計

人としてよろこびが湧いて れている句碑を見て、

世話

■富岡温子さん(同人・大

別式が行われた。

め死去、67歳。同4日 阪市)12月2日、

大阪文化祭川柳大会

火のいろを溶かすひとりの絵の具皿 11月21日 大阪府中小企業文化会館 志水浩一郎

小笹

作一郎

トンネルの向うに原色の祭 年金をカニー匹に嗤われる 蟹を食う旅から冬は加速する 航海を終えた老父の舵の艶

前田

織田作の口縄坂も秋のいろ あなどれない悪がある駅前の放置自転車

久保田元紀



植山武助さんを悼む

面倒見のよい会長

芳 地 狸 村

武助さんが体調をこわされて十一月六日、幸田病院に入院され、二週間後の二十日午後寺田病院に入院され、二週間後の二十日午後市大日の午後にお見舞に行った時は、元気な市で話をされておられるので、よろこんでいたのですが、その日の夜半から容態が急変し、そのまま永眠されました。合掌

受け、その柔和な性格が、皆さんから「武さとして功績を残され、発展に尽力されました。として功績を残され、発展に尽力されました。として功績を残され、発展に尽力されました。として功績を残され、発展に尽力されました。として功績を残され、発展に尽力されました。として、ながく文化また、市文化協会副会長として、ながく文化また。

ん」と呼ばれ、親しまれていたのは、誰もが ご承知のことと思います。 私たちに対しても、気を遣って車で各地の 利たちに対しても、気を遣って車で各地の 利たちに対しても、気を遣って車で各地の また、操子先生と武助さんは、「おばちゃ また、操子先生と武助さんは、「おばちゃ また、浄土で「武さん、よう来てくれた淋し かったよ」、「おばちゃんとまた川柳をつくり あり、浄土で「武さん、よう来でくれた淋し かったよ」、「おばちゃんとまた川柳をつくり ましょうか」とたのしく会話をかわしておら れるのが、目に見えるようです。

大生に会いに旅立ちされたのでした。
た生に会いに旅立ちされたのでした。
これから岸和田川柳会をますます発展させ
これから岸和田川柳会をますます発展させ
るよう、一同頑張って行きたいと思いますの
るよう、一同頑張って行きたいと思いますの
るよう、一同頑張って行きたいと思いますの
るよう、一同頑張って行きたいと思いますの
るよう、一同頑張って行きたいと思いますの
るよう、一同頑張って行きたいと思いますの
るよう、一同頑張って行きたいと思いますの
まつるよう

控え目な人柄

福 浦 勝 晴

「きしせん」は、主宰者の操子さんが女性「きしせん」は、主宰者の操子さんが女性の同人が多く、だったせいか、最初から女性の同人が多く、だったせいか、最初から女性の同人が多く、として、会の運営にいろいろと協力されていまして、

武助さんはかって

なべて世には見栄坊、フロシキ型、出しゃなべて世には見栄坊、フロシキ型、出しゃの雑事に骨身を惜しまず、絶えずコツコツとの雑事に骨身を惜しまず、絶えずコツコツとのない。

おり、 岸和田市民川柳大会には、元気なお顔を見せ ておられたが、実はこの時、病状は悪化して ったのはごく最近のことで、十月二十五日の ことを後から奥様にお聞きして、驚いた次第 肺気腫になられて苦しんでおられるのを知 気腫特有の呼吸困難に悩んでおられた

ナラ、サヨナラ。 上げます。親愛なる武助さんサヨナラ、サヨ 中心になって諸事を取りしきられたことを同 人一同、感謝し、心からご冥福をお祈り申し 武助さんが操子さん亡き後、「きしせん」の

> 友達のいる東京へ行きたがる 叱られた子供に父がいなかった

メダルでもくれそう納税ランク表

体調はよく似て六十路を話し合う 忙しい人を羨ましいとも思う 胃も肺も切り人並みへ力瘤 老妻に年々頼る事多く 元気さがだんだん妻に追抜かれ

偶然と思いたくない出会いです 意地悪な奴が笑ってばかりいる この野郎と思う男と馬が合い 掛声をかければ少し楽になる

円満な家庭にうまいニギリ飯 古里に帰り心の傷洗う 幸運と呼ばう今年のみくじ引く

> 世を拗ねたように悠々自適する 利口振る男の前置き多すぎる 解説は当り障りのない言葉 何も彼も年齢のせいにして逃げる 君が行くなら行くと言われて行く旅行 亡父の帽子が何時もの所にかかってる 留守番電話言葉遣いが改まり

第二回

全国紙上りんご川柳大会

おもり後援の第2回全国紙上りんご川柳大会 の入選がこのほど次のとおり決定した。 アップルフェア推進協議会主催、 川柳塔あ

りんごむく妻よ長生きしておくれ

岐阜県

秀江

位

岩手県

関川

這い這いの孫と遊んでいるりんご

思い出をリボンのようにりんご剝く

東京都泉 セツ

花が咲き実がなりりんご母になる

青森県

高杉

郷愁に堪らずりんご抛りあげ 大阪府

宮前

仕送りは途絶えたけれどリンゴ着く

今に見ていろとリンゴの丸かじり 青森県 西山

くるくるとりんごむく手で得たヒント 京都府 紫水

爱知県

星の子は降りて林檎の木になった 入選・佳作(本社関係のみ

りんごの歌が洗濯物を干している 八木 千代

サスペンス主役はりんごに添えたナイフ 憧れの街でりんごが熟れてゆく 自問自答りんごは何も喋らない 遠く病む人へりんごの花便り 土橋はるお

今は昔赤いリンゴの丸かじり いい顔で嫁に行きたいリンゴ達 てのひらで笑いころげる姫りんご 川崎ひかり

川見

リンゴ剝く母に一浪励まされ



笑みを絶やさぬ温子さん

吐田公一

川柳塔同人冨岡温子さんの訃報に接したの川柳塔同人冨岡温子さんの訃報に接したのまま

朝日カルチャー川柳教室で、橘高薫風先生のら承ったところによりますと、朝日新聞社の入会なさったきっかけは、故川口弘生会長か入のである。これがは、温子さんが城北川柳会へご思いおこせば、温子さんが城北川柳会へご

城北句会では異色の柳人として、また、打柳会へご推薦があったというように思います。人として旭区にお住いのところから、城北川人として旭区にお住いのところから、城北川ご指導を受けられ、薫風先生の折紙付きの柳

城北川柳の第四集に、彼女は

なご活躍ぶりでした。

吹川柳会や番傘いざよい会の同人として大変

何度か勧めて下さった。(中略)娘二人も嫁いってからもやれる趣味として、川柳と囲碁を来ていただいた幼稚園の園長さんが、年を取来るいただいた幼稚園の園長さんが、年を取『も2二十年も昔、娘達にオルガンを教えに

でしまった後、ふとその言葉を思い出して、カ でしまった後、ふとその言葉を思い出して、カ でしまった後、ふとその言葉を思い出して、カ

いまでは、 さいでは、 さいからひた走り を家族を想い、 と家族を想い、

万歩計いただく齢になりました

大歩計いただく齢になりました

ではすを知る誰しもがこのような句を見ると、

たすりし日の笑みとこしえに花と咲く 久留美有りし日の笑みとこしえに花と咲く 久留美有りし日の笑みとこしえに花と咲く 久留美なはご病弱だったようで、いたわられる

な女はご病弱だったようで、いたわられる

な女はご病弱だったようで、いたわられる

な女はご病弱だったようで、いたわられる

大輪の菊を思わせる彼女を偲んで、柳友の東郷の空があなたを待っている 典子

弔吟を認めます。

これからというのに早い蓮華の座 白 峰 これからというのに早い蓮華の座 白 峰 コスモスを想わす友が先に逝く 倫 子 星が散る止めるすべなし秋の風 漢子
を逝きしひときわさびし秋の風 八重子
惜しまるる今日の別れに散る木の葉 満津子
翔べる時待ちにまってた千羽鶴
ただし
大輪の菊失いしけさの寂
これからと言う齢ですと余命表
公
これからと言う齢ですと余命表
公
っ
では女の川柳の恩師橋高薫風先生の弔吟を止めに頂き、筆を擱きます。

銀杏黄葉思い残しの多かろに 薫 風

あけましておめでとうございます

西宮北口川柳会

例 会 毎月第2月曜日午後1時 西宮市中央公民館 (阪急電鉄神戸線西宮北口下車南西5分)

事務局および投句先

〒663 西宮市高木東町9-4 西口いわゑ

第17回 全日本川柳愛媛大会

命

内

光全

6

月12日

土

午

後

0

時

#

百

4 時

加 加 費 合 介前 3500円~400 6 松 山全日空ホテ Ill 月 祭〉 全 12 日空ホテ H (式典 <u></u> (土 午後7時 12 前 0 Щ 1 同 8 時

会 加 題 費 場 時 2部 愛媛県民文化 11 0 〇〇円 当日 日 出 大 広 句 熊 午 前 吉 塩 時 原 # H 間 開

新年おめでとうございます

1993年

î

久世川柳クラブ

泉

洲 伏 杉 矢 富 後 牧 森 後 或 宗 村 見 本 野 坂 宏 安 野 米 H H 伊 吟 甫 美 す 志 Ш 江 3 秀 2 恵 栄 n 4 IE Ш

川柳たけはら

〒725 広島県竹原市竹原町4535-5

小島蘭幸方

明けましておめでとうございます

会会計長

石藤古古岩岡古三山時岩小原解田田本本谷宅内広本島 原解田田本本谷宅内広本島 はか一同子風子虚晴水夫朽子路子幸

川柳クラブわたの花平成五年頌春

二 西 田 田 高 高 杉 川 片 小 大 内 指 井 生 高 瓶 沢 中 中 橋 橋 村 崎 上 澤 内 田 宿 上 島 杉 道 一 花 ト 初 明 龍 友 英 泰 朝 千 枝 の 子 雄 子 エ 子 子 襄 甫 一 成 子 龍 子 ぶ み 遊

鷲 吉 山 山 山 安 籾 宮 宮 水 牧 松 松 平 服 秦 見 村 村 本 下 永 山 崎 崎 谷 戸 葉 本 川 部

一節俊美暁 シ弘そき君み幸春正 津 マ み き 章風子子留子隆子直の子江子枝子子

あけましておめでとうございます

翠

洋

会

坂 児 栗 北 片 奥 岡 梅 内 上 稲 井 市 池 阿 中 山 高 橘 本 玉 谷 田 上 田 本 田 田 田 本 上 野 田 山 西 根 杉 高 仙 吉 春 綾 英 つ 入 宣 結 佳 凡 照 友 意志 治 郎 を 遊 風 郎 蛙 子 子 一 子 峰 司 実 秋 子 子 美 子 郎 極

渡米山松堀堀古藤藤西西中寺田高住神清部田本永江 谷明村井山出村井中杉谷保水郡大島 おっちょう 光泉 ま正 楓 叡東正千石拓絹 をなた まます 子子子 雄幸楽子雲坊歩舟生子

謹 賀 新 年

平成五年 元旦

川柳塔わかやま吟社

例 会 毎月 第2日曜日 午後1時 近鉄カルチャーセンター2F (JR和歌山駅前)

事務局 〒641 和歌山市紀三井寺111-2 牛 尾 緑 良 方 電話 (0734)46-2855

あけましておめでとうございます

川柳若葉の会

熊本川柳会

お目出度うございますあけまして

岩大宇永北高遠有黑切川野田川野山働田康幸照俊一宵夏芳子代子進草生仙緑

 岸和田川柳

路郎賞をいただいた尼緑之助の句「灯台の夕陽神話を抱きよせる」の句碑を建ててから20年になり、これを記念して句会を開く運びとなりました。

5月23日 国立公園日御碕への吟行を お待ちいたします。

いずも川柳会

会長 久家代仕男 会 員 一 同

は

謹

智

新

年

びきの 榎 清 塩 Ш 福 徳 市 本 Ш 本 水 満 H H た 2 紬 悦 叶 利 1+ 武敏し子こ子 来

謹賀新年

うみなり川柳会 会員 一同

〒680 鳥取市相生町 3 -204 森田熊生 電話 0857-23-4672

新年おめでとうございます

三幸川柳教室一同

 事務局
 〒640-01
 和歌山市西ノ庄239-23

 桜井千秀

もくせい川柳会

定例句会 每月第3月曜日 豊中市立中央公民館

季刊川柳展望 主宰·時 寒 新 子

誌代 1,000円 (**〒**240円)

〒563-01 大阪府とよの町ときわ台3-4-17 天根夢草方 川柳展望事務局 電話 (0727) 38-1845 FAX (0727) 38-6770 郵便振替 神戸 5-49710

謹賀新年

八尾市民川柳会

会員一同

南大阪川柳会

会員一同

春のお慶びを申し上げます

平成5年元旦

川柳塔まつえ吟社

同人一同

〒690 松江市雑賀町1686 恒 松 叮 紅 方 TEL (0852) 24-5450

尼崎

小園

東京二、四水曜日午前10時 別が、会 尼崎

おはま川柳会

尾崎市尾浜二丁目五一八

多全

会 毎月第一金曜日午後1時

(阪神尼崎駅西南三分) サンシビック尼崎三階

謹賀新年

新春万歲

ま

ĴΠ

柳

川柳ささやま社一同

川柳万歳

丸 一 釦 кк

福西牧子

大阪市都島区善源寺町 ☎(06)928-7331~4

東大阪市川柳同好会

会 長 片 岡 湖 風

会 員 一 同

迎春

本年もどうぞよろしく私たち"大阪の星』は川柳兄弟です

おめでとうございます明けまして

初春のお慶びを 申し上げます

平成五年 元旦

川柳塔唐津支

清山山山中岩野筒山久仁田 唐水門門下村崎田井口保部口 津隆夕幸剛 旭朴高正四虹 支代 美司弘實恒竜明敏郎汀 部

新年おめでとうございます

川柳大阪

大阪市交通局互助組合文化部 川柳部

部 長 高村正彦 事務局 坊農柳弘 編 集 高須賀金太 会 計 森松まつお

児田武三吉高楠高赤菊高福中中吉笠 他島中部崎田田 田木地津元島原岡 一与孝敦伴つや子子子男郎る洋志房 同志子子子子子男郎

川柳藤井寺

明けましておめでとうございますことしもよろしくお願い致します

米子 川柳塔きゃらぼく

平成五年

あけましておめでとうございます

川柳塔鹿野みか月

満12周年記念大会のご支援ありがとうございました ことしもご支援くださいますようよろしくお願い申し上げます

副 会 11 + 彭 中 中 中務 津 H 長 谷 村 村 橋 原 原長 Ш 原 美 八 き は 喜 2 汲 諷 盛 与志 3 3 重 2 7. 桜 香 人 螢 西 大 西 鈴 大 Ш 黒 太 乾 石 浦 木 角 角 根 JII \mathbb{H} \mathbb{H} 星 隆 か 幸 1 公 幸 和 正 八 0 鹿 弘 代 道 重 枝 子 子 風 74

土 德 岩 德 徳 鈴 小 伊 崎 田 倉 本 橋 田 岡 木 吹 た みさ 芙 利 早 睦 # 本 富 0 7. 7 お 男 江 丸 美 苗 惠 ほ Ш 森 中 谷 木 吉 Ш 安 か会員 根 H 下 井 澤 出 百 孔 博 げ 明 正 久 合子 美子 F 3 美 惠 賞 枝 子

☆事務局 〒689-04 鳥取県気高郡鹿野町鹿野1279 中原諷人方 電話 (0857) 84-2100

1 月各地句会案内

607	日時と題	会場と投句先
堺川柳会	7日(木)午後1時から ひらく・元気・巧い・餅	堺市総合福祉会館 南海高野線堺東駅市役所西入る 〒593 堺市堀上緑町2-16-3 河内天笑
尼 崎いくしま	8日(金)午後1時から 松・えくぼ・決意・自由吟	サンシビック尼崎 阪神尼崎南西徒歩3分 〒661 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
川柳塔まつえ	9日(土)午後1時半から 礼 服・拍 手・笑 い	松江市雑賀町雑賀公民館 〒690 松江市雑賀町1686 恒松叮紅
富柳会	10日(日)午前11時半から 未来・風景・にっこり	房の家 滝谷不動下車 〒584 富田林市南大伴町4-1 池 森子
川柳塔わかやま	10日(日)午後1時から 雑 煮 ・空 ・育てる	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒641 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
八尾市民 川 柳 会	10日(日)午後6時から 生む・夢・活動・クイズ	八尾市立労働会館(山本) 近鉄山本駅すぐ 〒581 八尾市上之島北1-15 宮崎シマ子
西宮北口川柳 会	11日(月)午後1時から 赤・歌う・個性・自由吟	西宮市中央公民館 阪急西宮北口駅南出口歩5分〒663 西宮市高木東町9-4 西口いわゑ
南 海川柳会	15日(金)午後6時から 来客・料理・風呂・家計	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造西徒歩3分 〒543 大阪市天王寺区空堀町15-18 寺井東雲
川 柳ぬやがわ	17日(日) 正午から 褒める・姿・勇 気	秦公民館 京阪寝屋川市駅からバス 〒572 寝屋川市春日町 9 - 9 高田博泉
もくせい 川 柳 会	18日(月)午後1時から 東・サロン・しなやか・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曽根駅東南歩5分 〒561 豊中市島江町1丁目3番5-801 田中正坊
南大阪川柳会	19日(火)午後6時から 怒り・興味・実・縮む	寺田町高松会館 JR環状線寺田町駅南100米 〒544 大阪市生野区生野西1-5-2 金井文秋
高槻川柳 サークル 卯 の 花	22日(金) 正午から 雪・踊り・祈り・自由吟	富田公民館 阪急富田駅東側踏切南へ歩7分 〒669 高槻市宮田町3-8-8 川島ᇓ云児
川柳東大阪	23日(土)午後6時から スタート・背広・重い・美	東大阪市立社会教育センター 近鉄布施北へ長堂小学校隣 〒578 東大阪市稲葉3丁目3-21 片岡湖風
はびきの 市 根会	24日(日)午後1時から 熱・牽制・メモ・(付合い)	羽曳野市立陵南の森公民館 〒583 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
京 都 塔 の 会	25日(月)午後1時から 内 ・ 縫 う ・ 財 布	京都府南労働セツルメント 近鉄東寺駅西徒歩3分 〒601 京都市南区西九条開ヶ町41-1 松川杜的
岸和田川柳会	28日(木)午後6時から サロン・粋・せかせか・雑炊	市立福祉総合センター 南海線岸和田駅南東歩5分 〒596 岸和田市上松町610-85 芳地狸村

[★]日時・会場が変更になる場合は、西出楓楽(06-762-4408)へご連絡ください。

もっと重視されてよいと思

執筆者にその人を得て

作品の鑑賞や評論は、

こと」コーナーを設けたの 投書欄とも言うべき「ひと ろと読者のみなさんに語り このページを通じていろい ざいます。今年も一年間 かけたいと思う。本号から ★あけましておめでとうご ★年金生活者である私に、 で投稿もお願いしたい。

その中でもやはり大きなウ 力の衰えを実感する昨今で て才能のない私がとみに能 事である。もともとたいし の編集とそれにかかわる仕 忙しい毎日を送っている。 けではないが、幸か不幸か エートを占めるのは、本誌 これといった仕事があるわ を見て対談や座談会などの り増頁したい。また、折り り込むように努め、時によ ★おわりに、私がほぼ隔月 盛り込みたい。 企画も考え、多彩な内容を 頁だが、川柳塔社を中心と づけ、多彩なニュースを織 道する。新聞』として位置 する柳人・柳社の動きを報

の秀句鑑賞を二ページとし ★その一環として、 めに努力したい。 同人吟 しばらく続けたい。(正 でくださる方もあるので、 にしているが、熱心に読ん

道下や南半球で暦が作られ

メモに「ケニアの運転免許

表わせたらと願う。

少しでも本誌を良くするた はあるが、駑馬に鞭打って

れ話」は、異なる評価も耳 に執筆している「川柳こぼ

『川柳侍』を読んで

入れ、帰宅してから読み耽った。 潮文庫・四〇〇円)。 の本―小松重男著『川柳侍』 面白くて途中で止められない。こ た。早速、本屋に立ち寄って手に 隣に座っていた先輩から教えられ 面白い本があるよ」と句会で

さまざまなテーマによる同

つながることを期したい。

量的な増加が質的な向上に

小説には、公事師、武士も登場し いわゆる町人が大多数だが、この 江戸時代の川柳作家と言うと、

ないだろうか。

伏見 二郎

うので、今年も続けたい。

での資料的価値もあると思 題材を掘り下げて考えるト 人特集<百句>は、一つの

★「柳界展望」はわずか

凝りをほぐすには、 ちりばめられている。作句の肩 句や『末摘花』の破礼句が随所に 楽しむーとあり、『柳多留』の佳 しむ3登場人物による句の解釈を 開を楽しむ②題材である川柳を楽 る本書の楽しみ方は、①物語の展 する。巻末の解説で述べられてい を仕込んで、密かに万句合に投句 さる大名のご隠居まで吉原でネタ 役立つのでは

で、気候の変化の少ない赤 からこそ、春を迎える時期 ある中緯度の北半球で、文 が便宜上つけた区切りでし ざいます。時の流れは過去 に年の初めが定められたの 明が発達し、暦が作られた かない。たまたま、四季の 日、元日と言っても、 め終りの区別はない。 から未来永劫に続いて、初 ★あけましておめでとうご 人間 大晦 たとしたら、年の初めはい 重ねてゆく。 を数えるものであろう。日 にある。暦とは確かに日々 戸時代の国語辞典『倭訓栞』 れば、名とせるなり」と江 ★以前、朝日新聞の特派員 々を重ね、そして、年齢を てその事を考え見るものな の義で、二日、三日と数え つになっていたことか。 ★「暦とは日読(かよみ)

しい。堂々と歳相応の美し とがらせる必要もない。 書類などの年齢欄に神経を ある。特に女性には有難い。 い実りを、顔に、体全体に を重ねてゆくことはむずか ったりしなくてすみそうで 歳の上下にむやみにこだわ った。日本もそうなれば、 証の年齢欄には、十八歳以 ★それにしても、美しく歳 上としか書いてない」とあ

作品募集

銀水川 初步教室 河煙 (3句) ō 花 系 華人や (3句 (3句) 笛 か形

岡美房担

振替口座大阪8-1111三六八番

小河黑西 肥井舟出内川尾 上渡 締 照杏 了笑香

★川柳塔欄は同人、水煙抄欄は誌 友、茴香の花欄は女性、その他 はどなたでも投句できます。

選選選選選

林」「弱い」 街 角 月号 初歩教室「進む」

夜市川柳募集

第8回「旨い」 田頭 良子選 ハガキに3句 1月末締切 投句先 〒593 堺市堀上緑町2-16-3 河内天笑方 堺川柳会

> मृद्ध गृद्ध ₹545 定 成成 * 五 四 年 年 一年分 印 発編 刷 行集 所 人兼 向信野区三明町1--O--大 向信野区三明町1--O--大 のアエムラ第2ビル202号室 六 三千八百円 百 円

行刷

本社 1 月 句 会

会席 題

会 日 場時

なし 空混進有 ☆平成四年 月間賞杯授与と皆出席者表彰 (短冊交換会(1人3点以内 ンズファ 気む化名 木 ショ 銀河系賞 後5時 ンセンター2階 電06.941.1

料310円(62円切手 各題2句以内 西小田三木橋 ・茴香の花賞表彰 尾出中宅本 智正保朱 枚 選選選選風

本社 2 月句会 6 日 (十)

兼題 「たくさん」「上 役」「回 る」 い」、「指

NHK川柳作品募集

題 壁 森中恵美子選

ハガキに3句 1月10日締切

〒540 大阪市中央区馬場町3-43 NHK大阪放送局

「ラジオセンター|川柳係

1月31日(日)ラジオ第1放送

西日本文字放送作品募集

課 題「好き」 橘高 薫風 選

ハガキに3句 1月15日締切

投句先

〒540 大阪市中央区谷町2丁目2-20 大手前ウサミビル3階 西日本文字放送 川柳係





泣いて笑って…… 夜を通り過ぎたら また陽がのぼっていた 男のロマン



オーエスケーの 紳 士 服

〒540 大阪市中央区南新町 1-(06) 941-8018

賃貸住宅の建築・設計・仲介・管理

売買貸借大きな家から小さな家まで 住居の事なら何でも相談できる店

TJ 豊津住宅株式会社

社 豊津住宅KKビル 〒564 吹田市泉町 5 丁目28-27 TEL (06) 330-0102

豊津店

TEL (06) 330-0006代 FAX (06) 388-6102

関大正門前店

〒564 吹田市泉町 5 丁目11-14 〒564 吹田市千里山東1丁目9-21 TEL (06) 388-6166(4) FAX (06) 388-6886